

大坂城跡

XIV

2012.11

公益財団法人 大阪市博物館協会
大阪文化財研究所

大坂城跡

XIV

2012.11

公益財団法人 大阪市博物館協会
大阪文化財研究所



古代の溝SD601a・bから出土した遺物

大坂城跡

XIV

2012.11

公益財団法人 大阪市博物館協会
大阪文化財研究所

序 文

本書は2011年度に大坂城跡で実施した発掘調査の成果をまとめたもので、報告書としては14冊目となります。

調査地は豊臣期には惣構の北西隅に位置し、交通の要衝、陸水運の拠点に当たります。また、この地域は古代の難波津、中世の渡辺津の有力な比定地でもあります。

今回の調査では、難波宮が営まれた7世紀、そして終焉した8世紀末の土器や瓦などが発見されました。なかでも後者は量が多く、饗宴や祭祀に使用された可能性があり、大川に面した当時の状況を彷彿とさせてくれます。中世では建物跡や井戸が見つかり、渡辺津の姿を垣間見せてくれました。また、豊臣期では厚さ3mにも及ぶ大規模な土地造成があったことがわかりました。いずれも今日の都市大阪のルーツ、基盤を解明する上で重要な成果といえるでしょう。

最後に、発掘調査ならびに報告書刊行に当って、株式会社大林組をはじめ、多くの関係者のご理解、ご協力を賜りました。関係者の皆様に感謝いたします。

2012年11月

公益財団法人 大阪市博物館協会
大 阪 文 化 財 研 究 所
所 長 長 山 雅 一

例 言

- 一、本書は財団法人大阪市博物館協会 大阪文化財研究所(現 公益財団法人大阪市博物館協会 大阪文化財研究所)が2011年度に実施した、中央区北浜東における大坂城跡発掘調査(OS11-16次)の報告書である。
- 一、発掘調査と報告書作成については、株式会社大林組と委託契約を締結して実施した。
- 一、発掘調査は大阪文化財研究所次長兼調査課長 南秀雄および難波宮調査事務所長 高橋工の指揮のもと、副所長(現東淀川調査事務所長)岡村勝行・嘱託調査員 岩本正二が担当した。調査の面積・期間などは第Ⅰ章に示した。
- 一、本書の編集は、岡村および岩本が共同して担当した。第Ⅰ章・第Ⅱ章第1・4節・第Ⅳ章の執筆は岡村、そのほかはおもに岩本が行った。また、豊臣期の遺物については嘱託調査員 波通晴香、銭貨については保存科学室 藤田浩明が同定を行った。貝については大阪歴史博物館学芸員 池田研、矢穴のある石材については、調査課学芸員 市川創が記述した。
- 一、発掘調査や報告書作成の過程で、多くの方々の協力を得た。特に豊臣期の造成工事に関わる土手状遺構や粘土枠工法について、高槻市立今城塚古代歴史館 森田克行氏、大阪府立狭山池博物館 小山田宏一氏、公益財団法人 大阪府文化財センター 江浦洋氏から、地層について湯池新田会所 別所秀高氏、石塔について財団法人 元興寺文化財研究所 狭川真一氏から、ご指導・ご教示頂いた。
- 一、英文目次・要旨は、岡村が行い、Robert Condon氏の協力を得た。
- 一、本書の用字・用語や体裁などの調整は、校正委員の高橋および調査課学芸員 小倉徹也、同課総括研究員 田中清美・京嶋寛・趙哲済が行った。
- 一、遺構写真は主として岡村が撮影した。遺物写真は寿福滋氏に撮影を委託した。
- 一、基準点測量は国際航業株式会社による。
- 一、発掘調査で得られた遺物・図面・写真などの資料はすべて当研究所が保管している。

凡 例

1. 本書で用いた層位学・堆積学の用語、および断面図に示した岩相のパターンは、『発掘調査のてびき—集落遺跡発掘編—』[文化庁文化財部記念物課2010]に準じる。
2. 本書における遺構名の表記には、柱列はSA、溝はSD、井戸はSE、土壌はSK、柱穴はSP、それ以外はSXを冠している。遺構番号は第6層a'上面で検出した遺構を101~299、第6層内で検出した盛土区画に関する遺構を301~399、中世の遺構を401~599、古代の遺構を601~699とし、遺構の種類に関係なく通し番号を付与している。
3. 本書で用いた座標値は世界測地系に基づく。水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中ではTP±〇mと記した。また、挿図中の方位は図1・2が真北である以外はすべて座標北を基準とする。
4. 本書で用いた土器編年・器種名は、飛鳥・奈良時代の土器は[佐藤隆2000]、製埴土器は[積山洋1993]、瓦器類は[尾上実・森島康雄・近江俊秀1995]、中国産陶磁器は[山本信夫2000]、東播系須恵器は[森田稔1995]、備前焼は[乗岡実2005]、常滑焼は[中野晴久2005]、豊臣期の青花・国産陶器は[森毅1992]に従い、煩雑を避けるため本文中では引用を割愛した。これら以外の文献に依拠した場合はそのつと明記した。
5. 本書で用いた地層の土色は、『新版 標準土色帖』[小山正忠・竹原秀雄1970]に拠った。
6. 本書で使用する近世の時期区分については、これまでの大坂城跡・大坂城下町跡の調査成果および、[森毅2004]の編年をもとに下記の区分を採用している。

豊臣氏大坂城前期(豊臣前期) 大坂本願寺焼亡(1580: 天正8年)から三ノ丸築城開始(1598: 慶長3年)まで
後期(豊臣後期) 三ノ丸築城から大坂夏ノ陣(1615(慶長20)年)まで
徳川氏大坂城期(徳川期) 大坂夏ノ陣以降
7. 引用文献は巻末に示した。引用文献は本文中に[筆者または編集発行者 発行年]のかたちで表示するので巻末で検索されたい。また、本文中で引用文献を表記する際、大阪文化財研究所→大文研、大阪市文化財協会→大文協、大阪市教育委員会→市教委と省略した。

本文目次

序文

例言

凡例

第1章 調査の位置と経過	1
第1節 調査地の歴史地理的環境	1
第2節 調査に至る経緯と経過	6
1)発掘調査に至る経緯	6
2)発掘調査の経過	7
3)報告書作成の経過	9
第II章 調査の結果	11
第1節 層序	11
第2節 古代の遺構と遺物	20
1)第12～10b層の遺構と遺物	20
i)第12層中の遺構と遺物	
ii)第11層上面の遺構	
iii)第11・10b層出土の遺物	
2)第10a層上面の遺構と遺物	23
i)SD601a・b・c	
ii)SD601b出土の遺物	
iii)SD601a出土の遺物	
3)小結	37
第3節 中世の遺構と遺物	38
1)第9層中の遺構と遺物	38
i)柱穴	
ii)溝	
iii)井戸	
iv)土壌	
2)第9層上面の遺構と遺物	43
i)柱穴	
ii)溝	
iii)井戸	
iv)土壌	
3)第9層出土の遺物	50
4)第8層上面の遺構と遺物	51
i)柱穴	
ii)土壌	
5)第8層出土の遺物	57
6)第6層基底面の遺構と遺物	59
i)井戸	
ii)土壌	
iii)その他の遺構	

7) 小結	63
第4節 豊臣期の遺構と遺物	65
1) 豊臣期第Ⅰ段階の遺構	65
i) 盛土以前の状況	ii) 盛土の構造と過程
iii) 土手状遺構	iv) 盛土区画・粘土枠・礎石列ほか
2) 整地土・盛土出土の遺物	74
i) 第6h層出土の遺物	ii) 第6e～g層出土の遺物
iii) 第6c層出土の遺物	iv) 第6b層出土の遺物
v) 第6a層出土の遺物	vi) 第6a'層出土の遺物
3) 豊臣期第Ⅱ段階の遺構と遺物	83
i) 北部	ii) 中央部
iii) 西部	iv) 東南部
v) 南区	
4) 小結	94
第5節 瓦埵・土鍾・石製品・銭貨・貝類	96
1) 瓦埵	96
2) 土鍾	102
3) 石製品	103
4) 銭貨	105
5) 貝類	107
第三章 遺構と遺物の検討	109
1) 第12層出土の平瓦について	109
2) SD601aの出土遺物について	109
3) 中世の遺構について	110
4) 豊臣期の造成について	110
第四章 まとめ	113
1) 古代	113
2) 中世	113
3) 豊臣期	113
引用・参考文献	114

索引

英文目次・要旨

原色図版目次

- | | |
|---|--|
| <p>1 全景と地層</p> <p>上：調査区全景(東から)</p> <p>下：調査区東壁(南西から)</p> <p>2 地層</p> <p>上：調査区南壁(北東から)</p> <p>中：調査区西壁(南東から)</p> <p>下：古代SD601a・bと豊臣期造成土層断面(中央壁、南西から)</p> <p>3 古代・中世の遺構</p> <p>上：SD601a・b検出状況(南西から)</p> <p>下：SE510検出状況(東から)</p> | <p>4 豊臣期の遺構(一)</p> <p>上：土手状遺構SX301検出状況(南東から)</p> <p>下：土手状遺構SX301断面(北西から)</p> <p>5 豊臣期の遺構(二)</p> <p>上：調査区東部盛土区画上面検出状況(南から)</p> <p>中：SX353ほか検出状況(東から)</p> <p>下：SX321検出状況(南東から)</p> |
|---|--|

図版目次

- | | |
|--|--|
| <p>1 古代の遺構</p> <p>上：SD601b検出状況(東から)</p> <p>中：SD601b遺物出土状況(東から)</p> <p>下：調査区北東部第12層(南東から)</p> <p>2 中世の遺構(一)</p> <p>上：第9層中遺構検出状況(南東から)</p> <p>中：第9層上面遺構検出状況(西から)</p> <p>下：第8層上面遺構検出状況(南西から)</p> <p>3 中世の遺構(二)</p> <p>上：SE415埋土の状況(南から)</p> <p>中：SK566検出状況(西から)</p> <p>下：SK563埋土の状況(南東から)</p> <p>4 中世の遺構(三)</p> <p>上：SK543貝出土状況(西から)</p> <p>中：SE523・SK550検出状況(南西から)</p> <p>下：SE523埋土の状況(西から)</p> <p>5 中世・豊臣期の遺構</p> <p>上：SK550埋土の状況(北西から)</p> <p>中：SX580検出状況(南から)</p> <p>下：SX580埋土の状況(南西から)</p> <p>6 豊臣期の遺構(一)</p> <p>上：第6h層の偽壁検出状況(東から)</p> <p>中：第6h層石材検出状況(西から)</p> <p>下：第6h層堆積後に発生した地滑り(調査区中央北部、北から)</p> | <p>7 豊臣期の遺構(二)</p> <p>上：SX301検出状況(北から)</p> <p>中：SX301北側の状況(北から)</p> <p>下：SX302検出状況(北西から)</p> <p>8 豊臣期の遺構(三)</p> <p>上：調査区東部盛土区画検出状況(北から)</p> <p>下：調査区南東部盛土区画検出状況(北西から)</p> <p>9 豊臣期の遺構(四)</p> <p>上：SX336・339ほか検出状況(北東から)</p> <p>中：SX337・338竈検出状況(北西から)</p> <p>下：SX337竈断面(北東から)</p> <p>10 豊臣期の遺構(五)</p> <p>上：SX334検出状況(北東から)</p> <p>中：SX353～357検出状況(北西から)</p> <p>下：SX351検出状況(南西から)</p> <p>11 豊臣期の遺構(六)</p> <p>上：SX347・348検出状況(北から)</p> <p>中：SX347・348検出状況(南西から)</p> <p>下：SX342～344検出状況(南東から)</p> <p>12 豊臣期の遺構(七)</p> <p>上：SX339墨書のある礎石(南西から)</p> <p>中：SA202礎石検出状況(北から)</p> <p>下：SA202礎石検出状況(東から)</p> <p>13 豊臣期の遺構(八)</p> <p>上：調査区南部第6a層上面遺構検出状況(東から)</p> |
|--|--|

- 下：調査区中央部第6a層上面遺構検出状況
(南東から)
- 14 豊臣期の遺構(九)
上：調査区東部第6a層上面遺構検出状況
(南から)
下：調査区東部第6a層上面遺構検出状況
(東から)
- 15 豊臣期の遺構(一〇)
上：SK221・226埋土の状況(南から)
中：SK223埋土の状況(南から)
下：SK218埋土の状況(南から)
- 16 豊臣期の遺構(一一)
上：SK263埋土の状況(東から)
中：SK261埋土の状況(北西から)
下：SK246埋土の状況(南から)
- 17 豊臣期の遺構(一二)
上：SK219完掘状況(北から)
中：SK219埋土の状況(南から)
下：SK219西壁(東から)
- 18 豊臣期の遺構(一三)
上：南区全景(東から)
中：SK265・267埋土の状況(南西から)
下：SK264埋土の状況(南から)
- 19 古代地層出土の遺物
20 古代遺構出土の土器(一)
21 古代遺構出土の土器・地層出土の土器
22 古代遺構出土の土器(二)
23 製塩土器と緑釉陶器
24 中世遺構出土の土器
25 中国産磁器と中世の土器
26 中世以降の遺構・地層出土の土器
27 古代の瓦
28 古代から中世の瓦
29 豊臣期の瓦
30 鬼瓦と土鍾
31 石製品

挿 図 目 次

図1 大坂城跡の位置	1	図21 SD601a・b・c地層断面図	25
図2 大坂城跡と周辺の遺跡	2	図22 SD601a・b地層断面図	26
図3 調査地周辺の旧地形	2	図23 SD601b出土土器(1)	27
図4 調査地位置図	3	図24 SD601b出土土器(2)	28
図5 古墳時代末頃	4	図25 SD601a出土土器(1)	30
図6 古代の遺構・遺物出土地点	4	図26 SD601a出土土器(2)	31
図7 中世前期の遺構・遺物出土地点	4	図27 SD601a出土土器(3)	32
図8 調査区位置図	6	図28 SD601a出土土器(4)	34
図9 地層と遺構の関係図	11	図29 SD601a出土土器(5)	36
図10 中央野地層断面図	13	図30 第9層中遺構平面図	39
図11 北壁・東壁地層断面図	14	図31 第9層中遺構断面図	40
図12 東壁地層断面図	15	図32 第9層中遺構出土土器	41
図13 南壁地層断面図	16	図33 第9層上面遺構平面図	44
図14 西壁地層断面図	17	図34 第9層上面遺構断面図(1)	45
図15 中央北部西壁地層断面図	18	図35 第9層上面遺構断面図(2)	46
図16 第12層の分布範囲	20	図36 SE510出土土器(1)	47
図17 第11層の分布範囲	20	図37 SE510出土土器(2)	48
図18 第12層出土土器	21	図38 第9層上面遺構出土土器・第9層出土土器	50
図19 第12層出土土器・第11層出土土器	22	図39 第8層上面遺構平面図	52
図20 SD601a・b・c平面図	24		

図40 第8層上面遺構断面図	53	図57 第6a層出土土器	82
図41 第8層上面遺構出土土器	54	図58 第6a'層出土土器	83
図42 SK566出土土器	57	図59 第6a'層上面遺構平面図	85
図43 第8層出土土器	58	図60 第6a'層上面遺構平面図・断面図	86
図44 第6層基底面遺構平面図	60	図61 第6a'層上面遺構断面図(1)	87
図45 第6層基底面遺構断面図	61	図62 SK219平面図・断面図	89
図46 SX580断面図	62	図63 第6a'層上面遺構断面図(2)	91
図47 第6層基底面遺構出土土器	63	図64 第6a'層上面遺構出土土器(1)	92
図48 第6h層の分布範囲	65	図65 第6a'層上面遺構出土土器(2)	93
図49 盛土の工程	66	図66 出土瓦(1)	97
図50 粘土枠立面・断面図	68	図67 出土瓦(2)	98
図51 第6b・c層内遺構平面図	70	図68 出土瓦(3)	100
図52 第6a層内遺構平面図(1)	72	図69 出土瓦(4)	102
図53 第6a層内遺構平面図(2)	73	図70 土鍾・石甕・石罎	103
図54 第6b層出土土器	75	図71 矢穴のある石材	104
図55 第6e~g層・第6c層出土土器	77	図72 出土銭貨X線写真	106
図56 第6b層出土土器	80	図73 土手状遺構の分布	111

表 目 次

表1 過去の調査	6	表3 出土銭貨一覧表	107
表2 矢穴計画表	104	表4 出土具類種名一覧	108

写 真 目 次

写真1 OS86-22次調査豊臣後期(第2面)屋敷跡検出状況(南から)	7	写真4 調査区東部調査前の状況(北西から)	8
写真2 OS87-40次調査豊臣後期屋敷跡検出状況(北東から)	7	写真5 粘土枠調査風景(北東から)	8
写真3 OS92-1次調査豊臣後期屋敷跡検出状況(北から)	7	写真6 SD601調査風景(南西から)	8
		写真7 現地説明会(北東から)	8
		写真8 第6c層で確認した火災構造	12
		写真9 粘土枠の状況	69

第Ⅰ章 調査の位置と経過

第1節 調査地の歴史地理的環境

大坂城跡は大阪市の中央を南北に延びる上町台地の北端に位置している(図1)。その範囲は豊臣氏大坂城の惣構の範囲と、東北部の現在の城見と呼称する旧猫間川と平野川右岸の京橋口定番下屋敷地一帯を含んでいる。豊臣氏大坂城惣構は北は大川、南は空堀通商店街付近、東は旧猫間川、西が東横堀川までの範囲である(図2)。

調査地は豊臣期惣構の西北隅にあり、大川と東横堀川、また、土佐堀通り、紀州に通じる松屋町筋の幹線道路が交差する交通の結節点に立地する(図2～4)。また、古くは、調査地付近は上町台地と長柄砂州の間に広がるラグーンにあたと推定され、中世では渡辺津、古代では難波津の有力な比定地である[日下雅義1991]。

調査地周辺ではこれまで多くの調査が行われている(図4)。半径500mに限っても、約100件の調査が実施されている。これらの調査成果は、大坂城跡では『大坂城跡』Ⅵ・Ⅶ[大文協2002b・2003]、大坂城下町跡では『大坂城下町跡』Ⅱ[大文協2004b]で総括され、地域の全体像が詳細に報告されている。また、大川の北岸にある天神橋遺跡では、鎌倉～室町時代を中心とする調査成果が蓄積されつつある[大文協2002c・大文研2011a]。

なかでも、早くから都市的様相を示す、調査地周辺の古地理については、弥生時代末から大坂冬ノ陣直前に至るまでの変遷が提示されている[趙哲済2004]。また、後述するように、調査地では過去3度の調査が行われており、この報告において、遺跡の立地、豊臣後期の屋敷跡を中心に検討が加えられている[松尾信裕2003]。ここではこうした調査研究の成果を適宜引用しつつ、今回検出された遺構・遺物の所属時期である古代～豊臣期を中心に、調査地の歴史地理的環境を述べる。

調査地の地形は北を流れる大川と西にある東横堀川の前身である沿岸トラフの二つの沖積作用によって大きな影響を受け、時代とともに変遷している(図5～7)。

今回の調査で最も古い人間活動が確認できる7世紀前～中葉から遡ること約半世紀、古墳時代末の大川は現在より南側で西南西に流れており、当時の左岸は現在の道



図1 大坂城跡の位置



図2 大坂城跡と周辺の道跡

(道跡範囲は大阪府地図情報システム上の「文化財情報」[大阪府教育委員会(平成23年7月現在)]を利用)

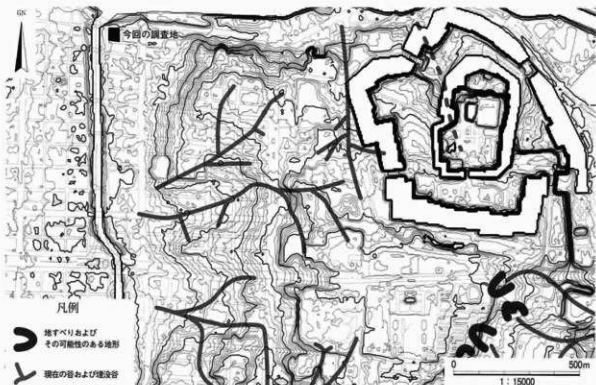


図3 調査地周辺の旧地形

(植・清水2011「上町台地北部の詳細地形図」をもとに作成)



図5 古墳時代末頃
(趙哲済2004「古墳時代末頃」の古地理図に加筆)



図6 古代の遺構・遺物出土地点
(趙哲済2004「古代」の古地理図に調査地点を加筆)

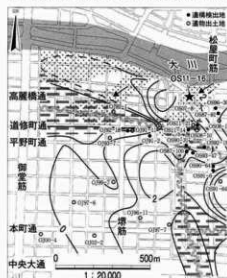


図7 中世前期の遺構・遺物出土地点
(趙哲済2004「中世前期」の古地理図に調査地点を加筆)

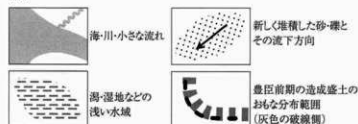
修町通付近であったと考えられる。沿岸州の陸側に沿岸トラフと呼ばれる溝を形成し、台地の水はこの溝を通り、北の大川に流れ出ていた(図5)。調査区から南1.7kmにある住友銅吹所跡地の古代から中世の地層は帯水状態にあり[大文協1998]、少なくともこの地域までは南北に長い湿地帯の様相を呈したと考えられる。一方、大川はこの沿岸トラフの出口付近に砂礫層を運び、洪水によって大きな州を現在の船場北部に形成した。

古代に入ると、沿岸州の出口は塞がれ、その結果、沿岸トラフは海と繋がり、道修町通～伏見町通付近に東西方向の細長い入り江を形成したものと考えられる(図6)。

大川の影響を受け難いこの入り江付近には、遺構は乏しいが、沿岸トラフとの合流地点近くの、かつて「安曇寺跡」として調査されたAZ87-2～5次調査地では、人面墨土器や隆平永寶(初鑄796年)、平安時代の瑞花双鳥文八稜鏡などが出土している。OJ91-11次調査地では、土師器・須恵器が大量に含まれる水成層が堆積しており、この地域の人々の活発な活動を示唆している[大文協2004b]。

一方、調査地の東側に目を転じると、上町台地西裾部は、松屋筋筋あたりから中段丘構成面が急に深くなっており、台地縁辺に位置するOS85-28次調査地やOS90-50次調査地では奈良～平安時代の遺構が広がっている。また、南東250mのOS87-33次調査地では、飛鳥時代の遺物も多く出土しており、この地域が上町台地上に展開している建物群への上陸地点として機能した可能性が高い[大文協2003]。この頃、調査地は、その西北部に浜堤が広がっており、その陸部から低地へと地形が移る地点にあったものと考えられる。平安時代終わり頃の資料として、OS86-22次調査地では、11世紀末～12世紀初頭に位置づけられる古瀬戸の洗が出土

凡例



している。

中世に入る頃には、大川左岸の汀線は北部に後退したとみられるが、しばしば氾濫し、左岸の州を嵩上げし成長させた。また、一部は州を乗り越えて、入り江にも砂層を堆積させ、泥層との累積で浅くなった入り江には、水田や畑が作られ始めた(図7)。今回の調査地では12世紀末頃から14世紀代前半頃に、建物・井戸・溝・土壌が密集して検出されている。出土遺物には、中国産白磁や古瀬戸・常滑など東海地域、滑石製の石鍋など、広域に流通する商品が含まれ、調査地周辺は大川に続く港湾機能を活かし、他地域との流通を担う都市的な集落が展開したものと考えられる。また、南方300m付近のOS87-100・90-31・93-47次調査地でも、中世までの井戸が多く検出されており、沿岸トラフに面しても、集落が分布している状況がわかる[大文協2003]。

大坂城の築造と城下町の造成が始まった豊臣前期(1580~1598年)には、盛土が広く分布する(111頁図73参照)。道修町通以南では東横堀川以東が主たる造成地域であったようだが、道修町通り以北では少なくとも中橋筋付近まで盛土されている。かつての沿岸トラフや入り江の名残が造成計画に影響を及ぼしたことが予想される。

1598(慶長3)年に始まる三ノ丸工事は、大坂城惣構内に新たな防衛ラインを築き、内部に大名の屋敷が配置された。この工事に連動して、すでにあった寺院や町屋の強制移転先として、船場地域に城下町が開発される[内田九州男1989a]。この「大坂町中屋敷替」として知られる大規模な開発により、調査地周辺、東横堀川沿いの低地帯は一挙に埋め立てられ、大きく景観が変化した。

第2節 調査に至る経緯と経過

1) 発掘調査に至る経緯

今回の敷地では、1986・87・92年度に、計3回の調査が行われ(図8、表1、写真1～3)、豊臣後期の広大な武家屋敷地(東西125m、南北60m)の一角を検出し、奉行あるいは有力大名の屋敷地と考えられている[鈴木秀典1987・1989、松尾信裕1994、大文協2003]。広大な大坂城跡においても、これほど保存状態が良く、その内容・構成が判明した武家屋敷はなく、都市大坂の発展を考える一級資料として、これまで度々紹介されてきた。

事業者はこの地域の一体的な開発を希望しており、明瞭な遺構が確認された大坂夏ノ陣焼土層に覆われた遺構面で調査を留め、全体像が明らかになった時点で、その開発手法が検討されることとなった。各調査で検出された遺構はすべて保護砂で現地保存され、夏ノ陣焼土層以下の調査が生じた場合は改めて協議を行うこととされた。



図8 調査区位置図

その後、現地は長らく駐車場として活用されたが、2011年5月に現地の開発計画についての協議が株式会社大林組と大阪市教育委員会文化財保護担当(以下、「市文化財保護担当」とする)との間で行われた。同6月、開発計画の確定を受けて協議が行われ、同10月、対象地1,170㎡について調査を行う契約合意が取り交わされ、本調査を実施することとなった。

調査区は東西36.5m、南北46.5mの主たる調査区とこの南にある東西22.5m、南北4.5mの小調査区(「南区」と呼ぶ)に設定され、旧建物の深い基礎によって遺構の遺存が望めない西北部の一部については、調査対象地から除外された。

表1 過去の調査

調査次数	調査面積	調査成果の概要	報告書
OS86-22	347㎡	大坂夏ノ陣(1615年)で焼亡した遺構面とその下層の2面(豊臣後期)を調査。第1面では礎石建物、それを取り囲む溝、掘立柱建物、第2面では砂利敷通路、石列溝などを非常に良い保存状態で武家屋敷跡を検出。調査区南部で深掘し、古代～中世の遺構・遺物を検出。調査後、保護砂で保存。	大文協2003
OS87-40	720㎡	夏ノ陣(1615年)で焼亡した武家屋敷地を1面調査。7棟の建物を検出。壁の厚さ・構造、土間の有無、瓦葺、板葺の違い、遺物の検討で各々の建物の性格が推定可能。調査後、保護砂で保存。	
OS92-1	215㎡	上記2時期の屋敷地における建物配置をより明らかにする目的の調査。礎石建物、石列溝など検出。	

2)発掘調査の経過

調査に先立ち、現地には鋼矢板・基礎杭・鋼梁が設置され、大阪文化財研究所は2011年11月21日から調査を開始した。調査区西南部から側溝を慎重に掘り下げたが、保護砂が見つからず、豊臣期と考えられる盛土層のみが確認された。翌日22日、調査面の標高を確認したところ、調査区東部約三分の一については、TP+2.7m、そのほかはTP+3.1mであり、大坂夏ノ陣で焼亡した屋敷地跡の地表面(TP+3.4~4.0m)よりも、0.4~0.9m低いことが判明した。市文化財保護担当にこの状況を伝え、同24日に現地確認が行われ、豊臣後期遺構面の遺存状況について、調査区全域で確認するように指示が行われた。調査地では重機による上掘りの後、杭打ちや鋼梁設置作業のため、層厚10~20cmの攪乱層(第0層)が形成されており、この除去を進めるとともに、遺構の検出・遺物の収集に努めた。

12月上旬、この作業を終え、調査地全域において豊臣後期の遺構面は2面とも失われており、調査開始面が豊臣期の盛土層(第6層)内にあること、井戸や大型の土壇など深い一部の遺構のみが調査面に残されていることが明確となった。こうした状況をうけ、市文化財保護担当は関係機関と協議を重ね、最終的に調査の成果と合わせて、遺構面の損壊を公表することを決定した。

第6a・a層上面で確認した豊臣・徳川期の遺構群の調査中、その下位に土手状遺構SX301が調査区中央を北西-南東方向に延びていること、この遺構を軸とする盛土(第6a~c層)によって、調査区全体が嵩上げされていること、また、盛土中に粘土板の枠で区画されたもの(以下、「盛土区画」と呼ぶ)が存在することが判明した。2012年1月6日、SX301に直交する断面観察用の畔を設け、順次、盛土を掘削していった。

盛土は層厚最大3mに及び、その掘下げと途中に現れる盛土区画の記録に時間を要した。2月末、盛土をすべて掘り下げ、SX301の全体を検出した。3月に入り、SX301を掘り下げ、第6h層の調査を行った。この掘下げにより、調査区東部全体が低地となっている状況が明らかになった。3月中旬より、調査区中央部・中央北部の中世遺構の調査を始めた。複数面にわたり、遺構が濃密に分布していた。



写真1 OS86-22次調査
豊臣後期(第2面)屋敷跡検出状況(南から)



写真2 OS87-40次調査
豊臣後期屋敷跡検出状況(北東から)



写真3 OS92-1次調査
豊臣後期屋敷跡検出状況(北から)



写真4 調査区東部調査前の状況(北西から)



写真5 粘土枠調査風景(北東から)



写真6 SD601調査風景(南西から)



写真7 現地説明会(北東から)

また、同時に古代のSD601の掘り下げも進め(写真6)、7世紀後半と8世紀末の資料を多く得た。

なお、南区については、排土の調査区外への搬出が困難であったため、調査開始面(第6a層内)上面の遺構検出と記録に留め、それ以下の掘削、調査は断念した。

3月21日、大阪市教育委員会事務局・(財)大阪市博物館協会名で「大坂城跡北西隅で豊臣時代の大規模な造成工事を示す土手状の遺構を発見しましたー現地説明会を3月24日に開催しますー」と題してプレス発表を行った。このなかで、「発掘調査での遺構面損壊事故について」として、下記の報告が行われた(以下、「」内は全文プレス発表資料のまま)。

「本発掘調査で、10月下旬から行った重機による掘削の際、本市教育委員会職員が深さをあやまって指示した等の理由により、過去の調査終了時の遺構面を0.4m～0.9m掘りすぎる事故がありました。

調査地は過去に、昭和61年(調査面積347㎡)、同62年(同720㎡)、平成4年(同215㎡)の3回に分けて発掘調査をおこない、近世初頭(豊臣期後半)の大名屋敷の一部かと思われる建物遺構などが検出されていました。開発計画の変更等の理由により発掘調査は中断され、その後は埋め戻し、駐車場等として利用されていましたが、計画が再開し、3月末までの予定で再度発掘調査を実施することになりました。

遺構面を掘りすぎたことにより、今回の調査範囲約1,200㎡のうち過去に調査した約700㎡について、豊臣期後半の遺構面のうち下層の遺構の調査ができなくなりました。

文化庁に報告の上、遺構面を掘りすぎた原因を究明したところ、以下のことが考えられます。

- ・重機掘削の深さを、これまでにおこなった複数の調査地点のうちの1カ所の深さで指示したのであるが、基準とした地表面の高さの違いにより実際よりも深い深度を指示することとなったこと。
- ・近年の発掘調査件数の増加等による繁忙のため、職員が機械掘削に立ち会えなかったこと。
- ・上記の状況に対して組織として対応ができていなかったこと、などがあげられます。

今後は、個々の職員が担当する業務について組織全体で情報を共有するため、頻繁に会議等を行い、複数の職員によるチェック機能をもたせるようにする、といったことを徹底します。」

翌日、新聞各社はこの内容を報道した。同月24日、現地説明会を実施し、雨天のなか、約100名の参加者を得た(写真7)。説明会では、調査成果の説明に先立ち、市文化財保護担当からさきの遺構面損壊事故の報告が行われた。

現地説明会の後、SD601、第10～12層の掘下げ、記録を行うとともに、東・南・西壁で一部深掘りし、下位の地層の観察・記録を行った。3月30日、すべての調査を完了した。

3) 報告書作成の経過

現地で記録した図面・写真および出土品は、難波宮調査事務所および東淀川調査事務所に搬入し、整理～報告書作成作業を行った。出土した遺物の量はコンテナパットで約200箱あり、遺物は順次洗浄、注記、接合を行った後、実測図作成を行った。

これらをもとにパーソナルコンピューターを使用して作図・編集を行った。遺物の撮影は専門のカメラマンに委託して行った。こうした作業と並行して原稿を執筆し、レイアウト完成済みのデジタルデータおよびフィルムを印刷業者に入稿して本書を完成させた。

第0層：現代の盛土層および攪乱層である。

第1層：近世後半の整地層である。

第2層：1724(享保9)年の妙知焼の焼土とその直後に行われた復旧のための整地層である。

第3層：大坂夏ノ陣以降、妙知焼までの間の整地層である。

第4層：1615(慶長20)年の大坂夏ノ陣の焼土層である。OS86-22次調査地とOS87-40次調査地では20~30cmと厚く堆積しているが、OS92-1次調査地では10cm以下であった。

第5層：大坂夏ノ陣で焼亡する遺構面をなす整地層である。数枚の薄い地層を整地している。

第6層：豊臣期の盛土層・整地層および河成層である。層厚は最大300cmで、6a'~6hの9層に分類した。6a'~6c層はこの地域全体を嵩上げするための盛土層、6d~6f層はその造成の軸となるSX301を形成する盛土層、6g・h層はSX301造成前の地層である。混入する古代~中世遺物は多いが、造成時期を示す豊臣期の遺物は少ない。6a~6c層からは肥前陶器が10点弱、志野焼細片が1点出土した。これらは混入遺物の可能性もあり、評価が難しいが、後述するように第6層が示す大規模な造成は1598(慶長3)年から翌年にかけて行われた「大坂町中屋敷替」に伴う可能性が高いと考えられる。

第6a'層：SX301の上面まで埋まった後の盛土層・整地土層で、第6層最上部を形成する。調査区中央以西で確認したが、上面は大きく削平されている。OS86-22次調査地では中粒砂と細粒砂質シルトの互層からなり、上面で豊臣後期の遺構群が検出された。

第6a層：第6層上部を形成する盛土層で、層厚は最大110cmである。調査区の西部(とりわけ西南部)とそのほかの地域では盛土の構成物が大きく異なる。前者では中~細礫を含む黒褐色粗粒砂質シルト(泥)を主体とする。後者では黄褐色中・細粒砂(川砂)を主体とする。川砂は大川からもたらされたものと考えられる。層中には細粒砂質粘土質シルトを固めた厚さ3~5cmの帯(粘土枠)が垂直方向に存在する状況を広く確認できた。また、調査区中央~西南部では、この砂層に鉾澤、炭、焼土などを多量に含む地層が挟在する状況がみられた。調査区東北部~中部のTP+3.0m付近では、この層上端で層厚5cm前後の粘土質シルトからなる整地土が確認でき、本来、全体に括がっていたものと考えられる。

第6b層：第6層の中部を構成する盛土層で、岩相は第6a層と同様である。層厚は概ね90~100cmである。上面で礎石(列)、層中で粘土枠からなる盛土区画を検出した。北壁地層断面では同一の地震による地層の変形が2箇所で確認できた。

第6c層：調査区東北部に分布する第6層の下部を構成する盛土層で、黒褐色粗粒砂質シルトを主体とする。層厚は概ね50~60cmである。また、東北隅付近の本層最下部には地震による地層の変形(火災構造、写真8)がみられ、その上位にはトラフ型斜交層理をなす中粒~細粒砂層が覆っている。このことは地震によって周辺の地盤が低下し、低いところをめがけて土砂が流入したことを示唆する。

第6d層：調査区西南部で確認した土手状遺構SX302を構成する盛土層で、黒褐色細粒砂質シルト、中~細礫を含む黄褐色粗粒砂からなる。層厚は90~150cmである。



写真8 第6c層で確認した火災構造

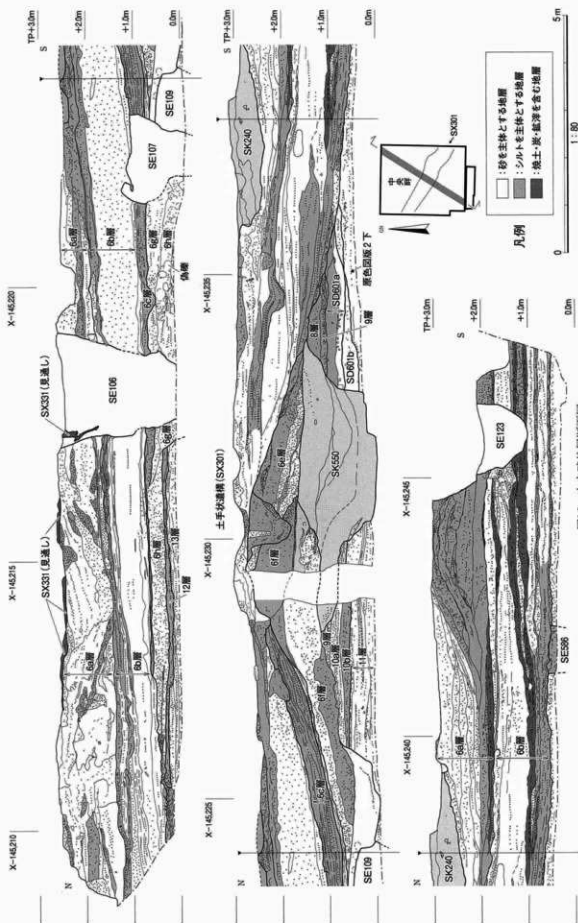
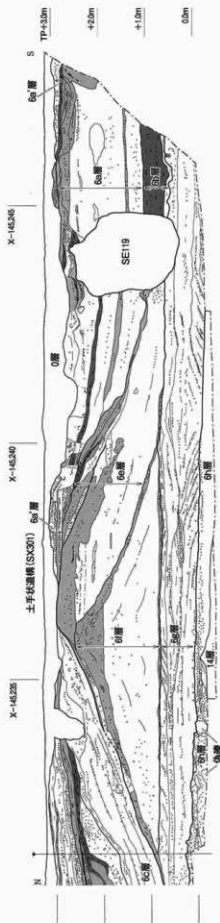
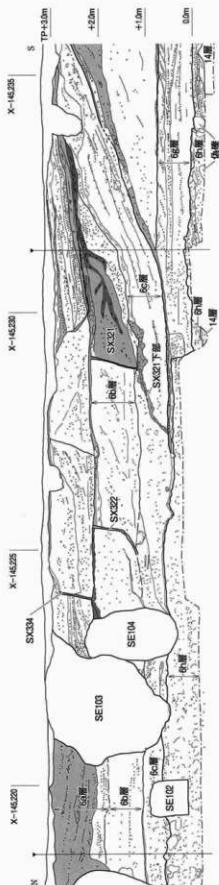


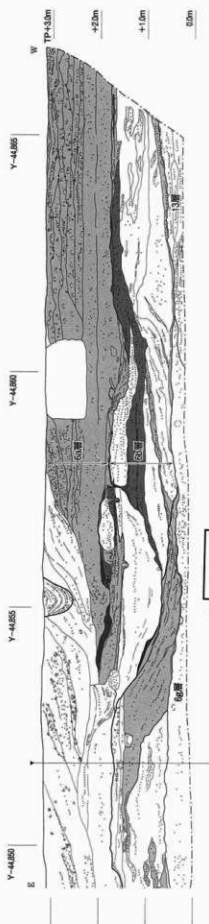
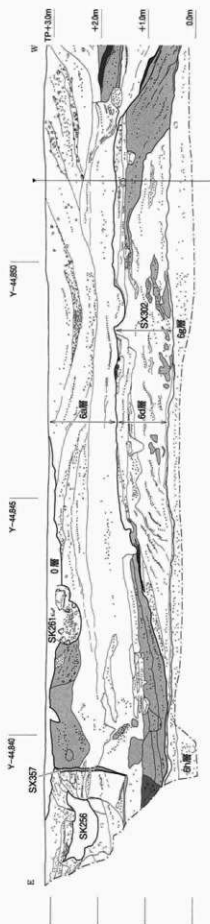
図10 中央群地層断面図



凡例

- : 砂を主体とする地層
- : シルトを主体とする地層
- : 粘土・泥・砂層を含む地層

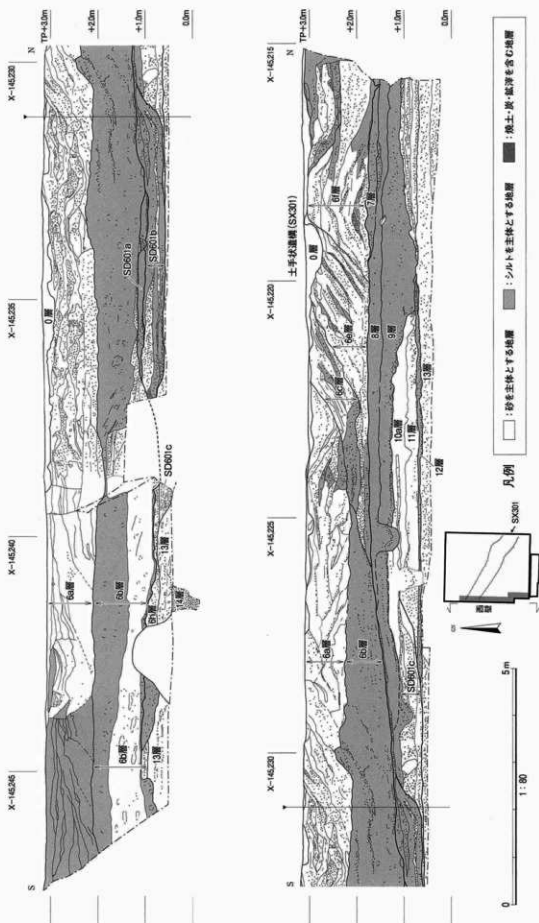
図12 東岸地層断面図



凡例



図13 南摩地層断面図



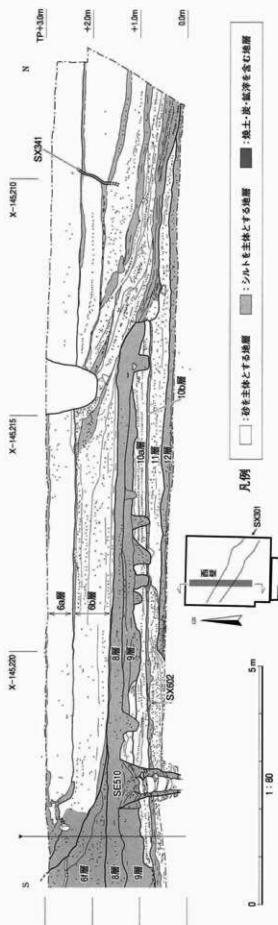
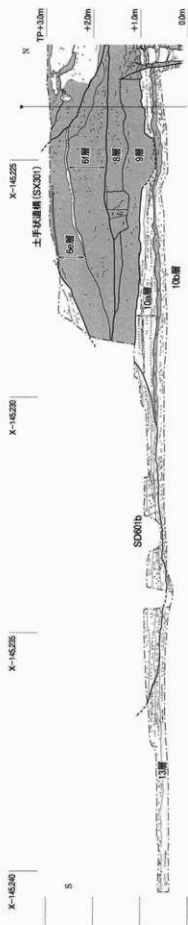


図15 中央北部西端地層断面図

第6e層：SX301上部を構成する盛土層で、黒褐色細粒砂質シルト、中～細礫を含む黄褐色粗粒砂からなる。層厚は最大120cmである

第6f層：SX301下部を構成する盛土層で、黒褐色細粒砂質シルト、中～細礫を含む黄褐色粗粒砂からなる。層厚は最大170cmである。

第6g層：調査区東部の低地に分布する、SX301が築かれる直前の粗粒砂を主体とする河成の砂礫層で、層厚は最大90cm以上ある。古代～中世の多様な遺物が出土した。

第6h層：調査区東部の低地を埋める整地層で、層厚は最大70cmである。第8・9層の偽礫を大量に含む中礫～極粗粒砂からなる。偽礫は長辺0.3～0.4mのものが最も多いが、最大0.8mである(図版6)。豊臣前期の瓦308が1点出土しており、この時期以降の整地層と考えられる。そのほか、瓦器・土師器・須恵器のほか、石臼369、矢穴のある石材337など、古代～中世の遺物が多く出土した。調査区中央北部でこの地層の堆積後に発生した、北東方向の地滑りを確認した(図49、図版6)。

第7層：調査区西北部のみに部分的に分布する、オリブ褐色細粒砂からなる作土層で、層厚は20cmである。出土遺物は確認できなかった。

第8層：調査区中央北部に分布する、黒褐色細粒砂質シルトからなる中世の古土壌で、層厚は20～30cmである。土師器皿・羽釜、瓦器椀、瓦質土器羽釜、備前焼甕などの遺物が出土し、13世紀中～後半を中心とする地層と考えられる。上面、層中から井戸・土壌など多数の遺構を検出した。

第9層：第8層同様、調査区中央北部に分布する、黒褐色細粒砂質シルトからなる中世の古土壌で、層厚は概ね20cm前後である。第8層と同様の遺物が出土し、概ね13世紀前半を中心とする地層と考えられる。SE510をはじめ、上面、層中で井戸・土壌など多数の遺構を検出した。

第10a層：細礫を含む中粒砂を主体とする古代の河成層で、層厚は概ね30cm前後である。層中に褐色細粒砂質シルトからなる3層の薄層を確認した。上面の高さはTP+1.0～1.2mで、北に向けて低くなる傾向にある。遺物は確認できなかったが、上面で7世紀後半に属するSD601bを検出し、それ以前の7世紀代の地層である。

第10b層：黒褐色細粒砂質シルトからなる河成層で、層厚は概ね5cmである。出土遺物が少ないが、7世紀前半と思われる土師器・須恵器が出土した。上面で遺構は確認できなかった。

第11層：調査区西北部に分布する、中・細礫を含む中粒砂を主体とする河成の砂礫層で、層厚は30～50cmである。第12層と同様、西部が高く、東北側にやや低くなっている。7世紀前半の土師器・須恵器などが出土した。中央部上面で南への落ちSX602を検出した。

第12層：暗灰黄色細粒砂シルトからなる古代の古土壌で、層厚は概ね20cmである。調査区西～中央部と東北隅に分布する。前者の上面の高さは西壁付近で、TP+0.7m、中央部でTP+0.3～0.6m、後者ではTP+0.4～0.5mであり、それぞれ南から北、西から東にやや低くなる傾向がある。7世紀前半に属する土師器・須恵器のほか、平瓦299、木器横樋17などが出土した。

第13層：中・細礫～粗粒砂からなる河成の砂礫層で、層厚は70cm以上である。遺物・上面遺構とも確認できなかった。

第14層：分級のよい中粒砂で、海浜砂層と考えられる。調査区東北隅・西南隅で確認した。

第2節 古代の遺構と遺物

古代の遺物の包含層は、第12～10b層が該当し、おもに調査区西部に分布する。このうち明確な遺構を検出したのは第10a層上面のSD601a・b・cのみである。

1) 第12～10b層の遺構と遺物

i) 第12層中の遺構と遺物(図16・18・19・67、図版1・19)

第12層は調査区北部に広がる。東北部では第6h層に覆われ、この堆積前に削平されている。調査区中央北よりの層厚は0.2mで、下面で深さ0.1mほどの溝状の窪みを確認した。土器・木製品など遺物の大半がこの窪みから出土し、遺構と認識すべきだったかも知れない。第12層上面では明確な遺構は認められなかった。出土遺物は磨滅しておらず、水流によって遠くから運ばれたとは考え難く、近辺での活動の結果を反映しているであろう。

第12層からは土師器杯C1、高杯2・3、甕、甕11・14～16、把手12・13、須恵器杯H蓋4、杯H身5～8、杯G蓋10、短頸壺9、長頸壺、鉢、甕と木器横植17、平瓦299が出土した。

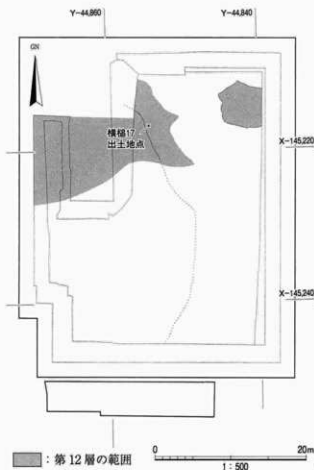


図16 第12層の分布範囲

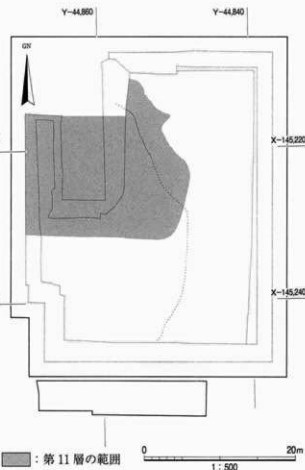


図17 第11層の分布範囲

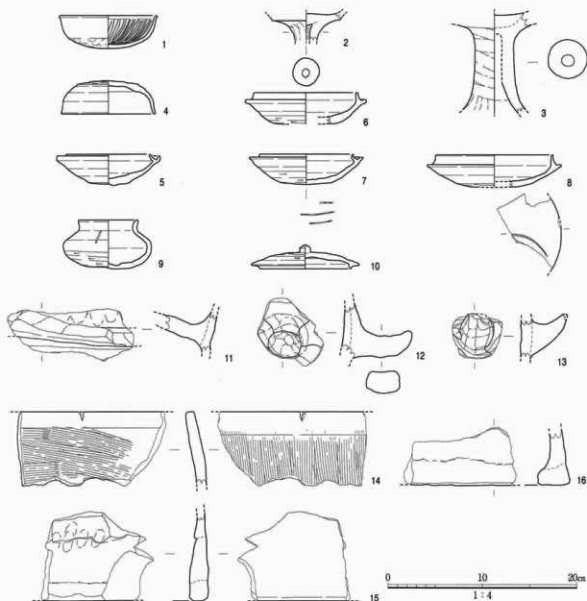


図18 第12層出土土器

土師器杯C1は口径10.2cm、器高3.4cmで径高指数は33となり、内底面に螺旋暗文、側面に放射状暗文がある。土師器高杯2・3はいずれも脚部は円形である。須恵器杯H蓋4の口径は9.8cmで、天井部のヘラケズリは不調整である。杯H身の受部径は5が10.9cm、6が12.8cm、7が12.0cm、8が14.2cmで、6～8は外底面ヘラケズリ、5は不調整である。杯G蓋10の受部径は11.5cmで、天井部外面はヘラケズリを施す。短頸壺9は口径が6.3cm、器高5.1cm、外底面はヘラケズリ調整している。土師器移動式甕11は付底系で底は貼り付け、把手12・13は貼り付けて接合している。木器横樋17は長さ24.1cm、幅7.2cm、厚さ6.2cmで、径約8cmの枝付の芯持ち材を削り出してつくる。打面には使用した痕跡がある。以上の出土遺物の時期は難波Ⅲ古段階～中段階(7世紀前～中葉)と考えられる。

ii) 第11層上面の遺構(図15・17)

第11層は調査区西北部に拡がり、南部は豊臣期の造成時に削平されている。上面では調査区中央北寄りの中央西壁地層断面で南方向への落込みSX602を確認した(図15参照)。深さ0.4m以上で、埋土

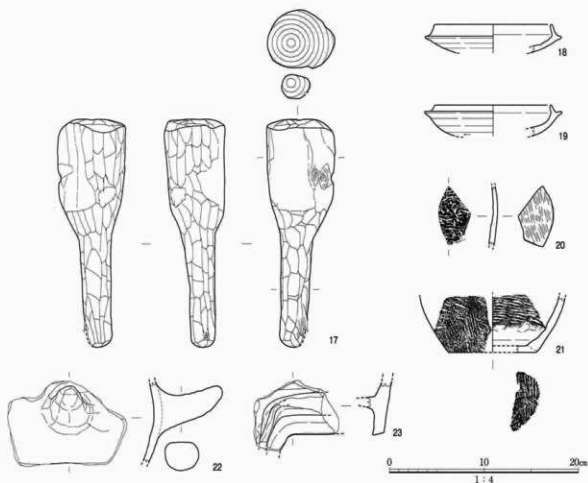


図19 第12層出土土器・第11層出土土器
第12層(17)、第11層(18~23)

は礫を含む暗灰黄色粗粒砂からなる河成の砂礫層である。南方への拡がりは、十分な掘削深度を設けることができず、不明であるが、SD601の下位には確認でき、少なくとも幅15mは存在する。遺物は確認できなかった。

iii) 第11・10b層出土の遺物(図19、図版19)

第11層からは、土師器甕・甕23、把手22、須恵器杯H身18・19、壺、甕20、高杯、韓式系土器平底鉢21など、遺物が少量出土している。須恵器杯H身18・19の受部径は18が14.4cm、19が14.5cm、18・19の外底部はヘラケズリを施す。須恵器甕破片20は内面に車輪文の当て具痕跡がある。近辺ではNW93-5次・NW90-7次[大文協2004a]、OS99-16次[大文協2002a]で出土している。難波Ⅲ古～中段階でわずかではあるが一定量含まれる[大文協2004a]。23は付底系の移動式甕で、底は貼り付け、焚口の上は水平に切られている。22は牛角状の把手で、本体は甕・鍋・甌が候補にあげられる。体部に孔をあけて把手を差し込んでいる。21は平底鉢で、底部径9.2cm、体部外面に縦方向の平行タタキ、底部に平行タタキを施す。内面は横方向の平行タタキをナデ消している。器表はにぶい橙色、内面は灰黄褐色で、底部内面には焦げが見られる。酸化焰焼成の土器で、製作技法などから見て韓式系土器であろう。第11層の出土遺物の時期は、難波Ⅲ古段階～中段階に相当する。

第10b層は上面では遺構は確認できなかったが、層中から土器片3点が出土した。土師器甕・把手、須恵器壺の細片で、時期を明確にしたいが、第11層と同様、7世紀前半であろう。

2) 第10a層上面の遺構と遺物

i) SD601a・b・c (図20～22、原色図版3、図版1)

SD601a・b・cは調査区西南部の第10a層上面で検出した東西方向の溝状遺構である。調査時の確認範囲では下位から3本の溝状遺構がほぼ同様な同じ場所に重複して検出されており、下位からSD601c・b・aと呼ぶ。このうちSD601bの方向はほぼ真東西で、西側は調査区外に延びる。東側は中世の遺構や豊臣期の造成によって壊されており、16.5m分を確認した。また、豊臣期の土手状遺構SX301の盛土採取のために上面全体が削平されている。

SD601c 調査区西壁近くで検出し、南北幅13.2m、深さは0.4mである。大半をSD601bで切られ、北辺については、7.0m分、南辺については、8.0m分確認した。埋土は北側では中・細礫が混る灰白色細粒砂と中粒砂からなる埋立てであり、南側は灰黄褐色細粒砂の自然堆積であった。北側では明確に遺構確認した上で、遺物を取り上げることができなかった。南側では遺物は出土しなかった。ただ、下位の第11層は7世紀前半、SD601cを切るSD601bは7世紀後半であり、その間の時期におさまる。

SD601b 南北幅約9.0m、現状の深さは最大0.6mであるが、第10a層上面の高さから、0.8m前後に復元できる。溝底の高さは、東部でTP+0.35m、西部でTP+0.55mで、東側が低い。埋土は概ね4層に分かれ、灰黄褐色細～中粒砂質シルトと中・細礫が混じる暗灰黄色細粒砂の互層である。前者は水つきでよどんだ状態を示し、後者は埋立てと考えられる。最下部は掘削時の偽層を多く含む。現状では恒常的に流水があった痕跡は確認できない。7世紀後半の土器・瓦などの遺物はどの層からもほぼ同量が出土した。埋土の上下で、遺物の型式差は認め難く、機能時、廃絶時とも7世紀後半の時期におさまるものと考えられる。

SD601a 東西の長さはほぼSD601bと同じで、幅はSD601bの中におさまリ、6.3m前後である。上面の削平の度合いが異なるため、検出面での走向は真東西とならないが、本来はSD601bと同様の方向軸であると考えられる。深さは東部では0.4mで、溝底の高さは西部でTP+0.95m、東部でTP+0.75mで、東側が低い。埋土は概ね2層に分かれ、上層は黒褐色極細粒砂質シルト、下層は灰黄色極細粒砂質シルトであり、湿地的な環境下の堆積物である。溝としたが、流水の痕跡は確認できず、細長い土壌となる可能性もある。いずれの埋土からも、8世紀末の土器、瓦などが多量に出土した。SD601bとはまったく埋土の特徴が異なり、時期差がある。7世紀後半と8世紀末の間の時期を示す遺物は出土しなかった。

ii) SD601b出土の遺物(図23・24・66、図版20・27)

SD601bからは土師器、須恵器、瓦、獣骨が出土した。土師器は杯、鉢、甕、移動式甕47、把手、須恵器は杯H蓋24～26、杯H身27～33、杯G蓋34・35、杯G身36・37、杯B38、長頸壺39、短頸壺40、高杯41・42、平瓶43、甕44～46がある。瓦は軒丸瓦287である。

24～26は須恵器杯H蓋で、口径は25が ϕ 10.0cm、24が ϕ 10.3cm、26が ϕ 13.5cmで、いずれも天井部はへ

Y-44,870

Y-44,860

Y-44,850

Y-44,840

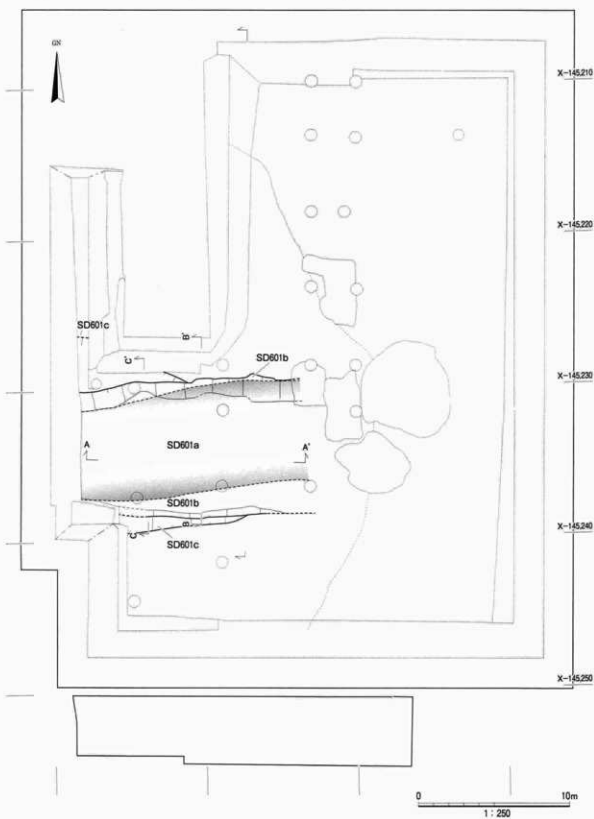


图20 SD601a・b・c平面图

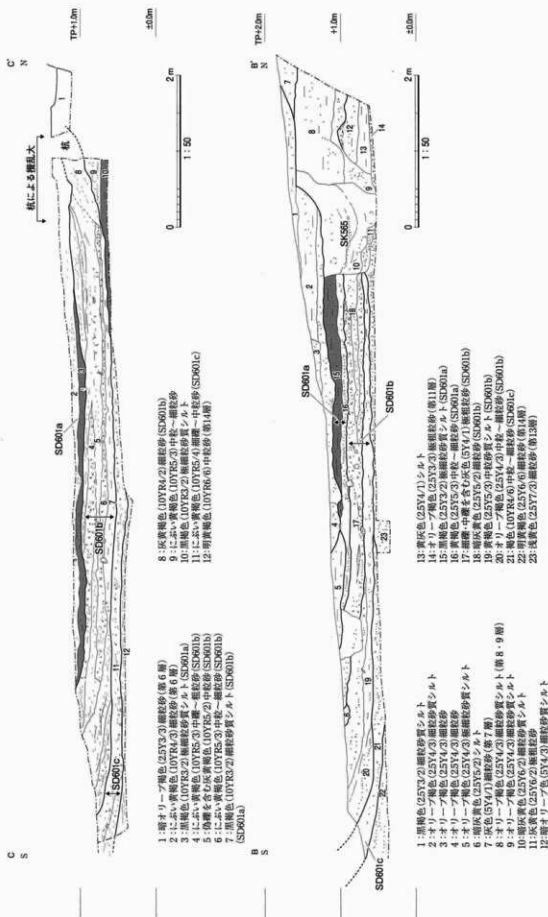


図21 SD601a・b・c地層断面図

ラ切りのまま不調整である。27~33は須恵器杯H身で、受部径は10.3~10.9cmになる。29以外はすべて、外底面はヘラ切りのまま不調整である。34・35は須恵器杯G蓋で、受部径は34が9.6cm、35が9.7cmになり、天井部はいずれもヘラケズリしている。36・37は須恵器杯G身で、口径は36が8.8cm、37が9.2cmとなり、いずれも外底面はヘラ切りのまま不調整である。38は須恵器杯Bで、口径14.1cm、器高4.7cm、低い高台を張り付ける。焼けひずみか、底部がせり出ている。39は須恵器長頸壺で、体部最大径17.7cm、頸部上部に沈線を二条施す。体部上半は刺突文をめぐらしてカキメ調整し、下半部はヨコナデ〜カキメ調整する。40は須恵器短頸壺で、口径が9.0cm、肩部にカキメ調整する。41は須恵器高杯である。低脚の高杯で、脚底径が8.8cm、円形のスカシ孔が3方向にある。脚部はカキメ調整する。42は須恵器高杯である。長脚2段スカシで、長方形スカシ孔が2段3方向にある。スカシ孔の下にそれぞれ凹線を2本巡らす。43は須恵器平瓶で、口径7.7cm、高さ14.0cm、体部最大径16.7cmである。口縁部はヨコナデ調整、底部から体部最下部にかけてはヘラケズリ、それ以外はヨコナデ調整する。44は須恵器甕で、口径14.4cm、高さ29.6cm、口縁部は短く外反し、口縁部はヨコナデ、体部外面は全面に平行タキ整形、上半部を後にカキメ調整する。内面は全面に同心円の当て具痕跡があり、軟質の焼成である。45は須恵器甕で、口径19.1cm、口縁部は短く外反し、端部は丸く肥厚する。46は須恵器甕で、口径19.3cm、口縁部は短く外反し、端部は肥厚し、内面端部を軽くつまみあげ

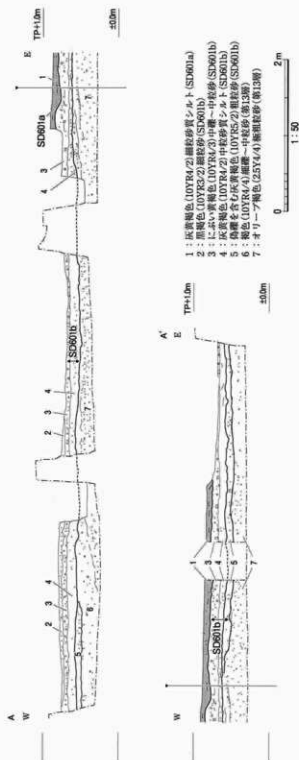


図22 SD601a・b地層断面図

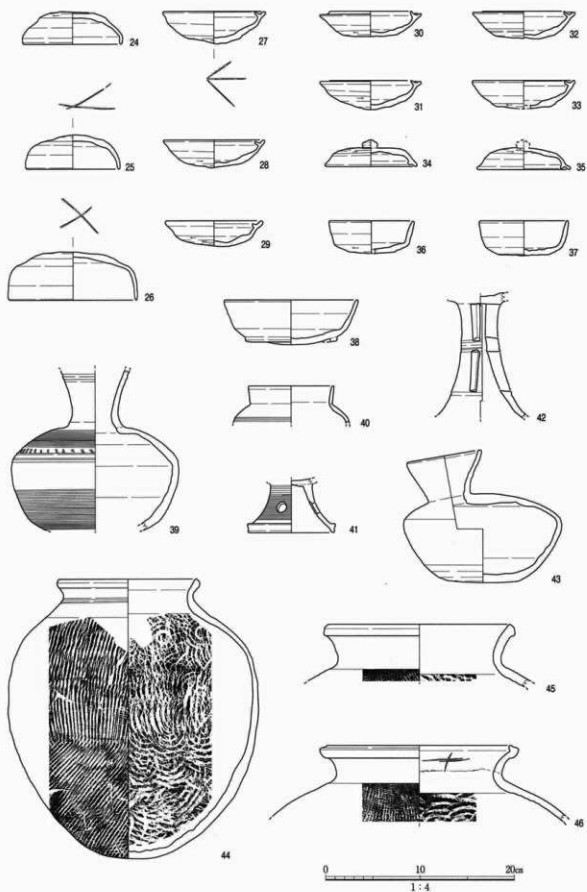


图23 SD601b出土土器(1)

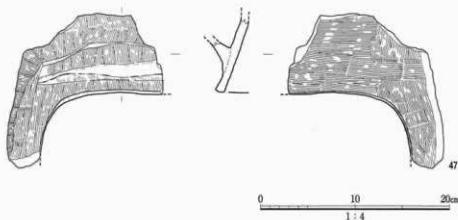


図24 SD601b出土土器(2)

ており、軟質の焼成である。47は移動式竈の焚口で、付底系の竈である。底部は貼り付けてヨコナデ調整し、それ以外は全面ハケ調整し、内面や底部下面には煤が付着している。

以上のSD601b出土土器は、難波Ⅲ中段階～新段階(7世紀中～後葉)と推定され、前期難波宮期に相当する。

iii)SD601a出土の遺物(図25～29・66・67・70、図版21～23・27・28・30)

SD601aからは、土師器、須恵器、土馬、軒丸瓦291、軒平瓦293、埴306、丸瓦、平瓦300～305、土鍾319・321、獣骨が出土した。これらの遺物はまとめて出土しており、短時間のうちに一括廃棄された状況である。なお、瓦埴・土鍾の詳細については第5節で報告する。

a. 土師器・土馬

土師器には杯A48～52、皿A53、皿B59、杯B蓋58、碗A54～57、高杯60～62、鉢、甕64～69、羽釜70、移動式竈79～81、把手、製塩土器71～78がある。

48～52は土師器杯Aである。口径が13cm前後のものと19cm前後のものがある。49は口径12.4cm、高さ2.7cm、51は口径13.6cm、高さ3.3cm、48は口径14.2cm、高さ3.3cm、52は口径18.0cm、高さ2.7cm、50は口径19.4cm、高さ3.6cmである。径高指数は19～24になる。これらはいずれも暗文はない。51は口縁部を丸く収め、端部をつまみあげており、外面・内面に一条沈線が巡る。体部外面側部はヨコナデ、底部はユビオサエしている。内面底部はナデ調整で、外面底部に「十」の墨書がある。48・52は口縁部を丸く収めるが、端部をつまみあげており、やや外反し、内面に一条沈線が巡る。体部外面はヨコナデ、底部はユビオサエ、内面はヨコナデ調整している。50は内面から口縁部外側付近まではヨコナデ、底部から底部付近は粗いナデで、底部はユビオサエ痕が十分消されていない。

53は土師器皿Aで、口径18.9cm、器高2.2cm、底径17.4cm、径高指数は13になる。口縁部は丸く収めるが、端部を軽くつまみあげており、外面・内面に一条沈線がかすかに巡る。内面底部に粗い螺旋状の暗文がある。体部外面部はヨコナデ、底部はユビオサエおよびナデ、内面底部はナデ調整している。59は土師器皿Bで、口径26.6cm、器高2.9cm、底径22.0cm、径高指数は11である。低い高台がつく。口縁端部は内に巻き込む。内面底部に螺旋暗文、側面に斜放射状暗文、外面側面はミガキ調整、底部はナデ調整を施す。58は杯B蓋で、口径26.2cm、高さ3.0cm(つまみ含む)である。端部は丸く収める。

外面はヘラミガキ、内面はナデ・ヨコナデ調整する。

54～57は碗Aである。口径が10cm前後のものと16cm前後のものがあり、54は9.4cm、55は11.3cm、57は16.2cm、56は16.8cmである。径高指数は29～40になる。54は口縁部を丸く収め、強くヨコナデするため、わずかに外反する。体部外面はヘラミガキ、内面はヨコナデ調整する。55は口縁部を丸く収め、強くヨコナデする。体部外面下半はヨコナデののち、ヘラケズリする。56は口縁部を丸く収めるが、強くナデしており、内面に一条の凹線が、外面はくびれている。体部外面の上部はヨコナデ、下部から底部はヘラケズリする。57は口縁部を丸く収め、わずかな端部をつくる。体部外面の上部はヨコナデ、下部から底部はヘラケズリする。

60～62は高杯である。60は脚部で、底径が13.1cm、高さ10.5cm、外面は縦方向のハケ調整の後、上部は縦方向のケズリを施し、10角形に面取りする。内面はシボリメが残り、裾部は横方向のハケ調整を施す。杯部内面はヘラミガキし、螺旋状の暗文を施す。61は杯部口径26.3cm、器高11.7cm、脚部底径12.2cmで、杯部はゆるやかに外反し、口縁端部を内に巻き込む。杯部の内底面に螺旋状暗文、側面に斜放射状暗文、口縁部はヨコナデ、外面はケズリ調整する。脚部は粘土紐を巻き上げ、内面にはシボリメがある。脚部は12角形にヘラケズリで面取りする。脚端部外面は粗い縦方向のハケ調整の後でヨコナデ、内面はハケ調整の後ヨコナデ調整する。62は小型の高杯で、口径6.5cm、高さ5.5cm、底径4.2cmである。ミニチュアの手捏ね土器で、脚部は八角形に面取りする。

64～69は甕である。64～66の口縁部は「く」の字状に外反し、端部はつまんで厚くする。体部外面は口縁部から頸部まではヨコナデ、それ以下は粗いハケ調整を施す。内面は口縁部がハケ調整ののちヨコナデ、それ以下は縦方向のヘラケズリ調整を施す。67は頸部で段をつくって肩部に至り、ここから口縁部は「く」の字状に外反し、端部は厚くなる。体部外面は口縁部から頸部まで強いヨコナデ、それ以下はユビオサエで調整するが、粘土紐の痕跡が十分消されていない。内面は口縁部から頸部までヨコナデ、それ以下はナデ調整する。68は口縁部が「く」の字状に外反し、端部は拡張し厚くする。体部外面は口縁部から頸部までは強くヨコナデするため、頸部に小さい肩ができる。それ以下は粗いハケ調整である。口縁部の内面はハケ調整ののちヨコナデ、それ以下はハケ調整のちユビオサエ・ナデ調整を施す。69は口縁部が「く」の字状に大きく外反し、端部は内側に巻き込んでつまみあげる。体部外面は口縁部から頸部まではヨコナデ、それ以下は縦方向のハケ調整を施す。口縁部の内面はハケ調整ののちヨコナデ、それ以下は縦方向の強いナデやハケ調整を行う。外面に煤が付着し、内面は焦げている。70は土師器羽釜で、口径24.3cmである。口縁部はやや外反し、端部は丸く収める。鈎はやや上向きに貼り付ける。体部外面は口縁部から鈎まではヨコナデ、内面は、口縁部から鈎取り付け位置対応部まではハケ調整、それ以下はユビオサエのちハケ調整する。外表面に煤が付着している。生駒西麓産である。

79～81は移動式甕である。79は口径27.7cm、高さ40cm、底径45.3cmの付底系の甕で、底部は貼り付け後ヨコナデ調整する。焚口の後側中位に突帯を巡らし、側面に小さい把手を貼り付ける。口縁部はヨコナデ、内面はハケ調整のちヘラケズリ、外面は全面ハケ調整を施す。底部には煤が付着し、内面には焦げ跡がある。80は付底系の甕の焚口部分で、幅は49.5cmある。側面に突起状の把手が付く。

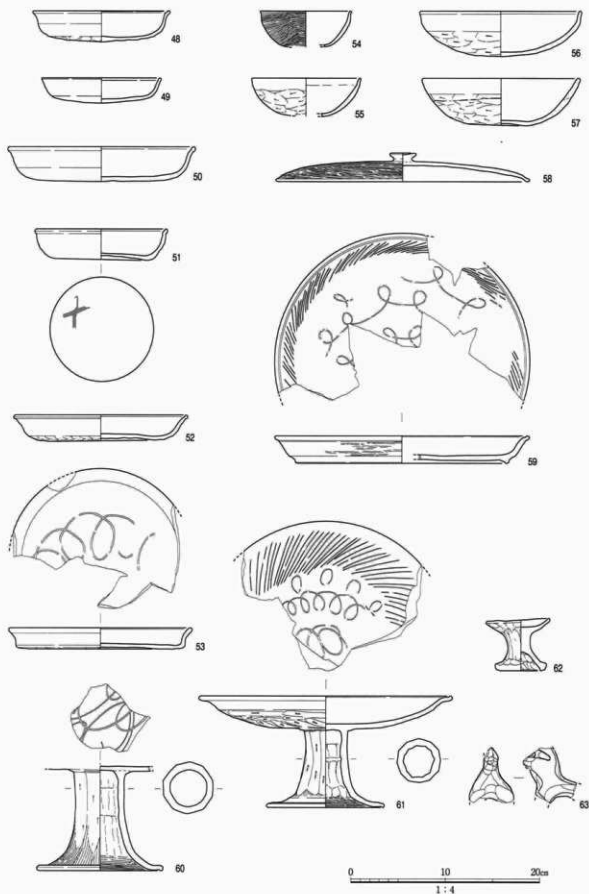


图25 SD601a出土土器(1)

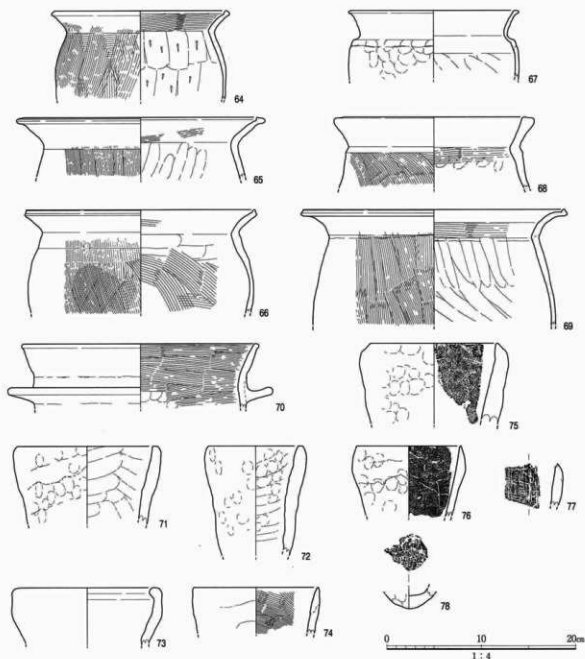


図26 SD601a出土土器(2)

底は貼り付けした後、ヨコナデ調整、外面は全面ハケ調整を施す。内面はユビオサエのちヘラケズリおよびナデ調整する。内面に焦げ跡がある。焼成は良好である。81は付底系の甕の焚口で、外面は全面ハケ調整を施す。底の下部には煤が付着している。なお、移動式甕はSD601aから27個体、さらにその他の遺構・層出土であるがSD601aに由来すると思われるもの18個体、計45個体が出土した。

71～78は製塩土器である。71は口径15cm、器高8cm以上で、深鉢形である。口縁部は外反し、器厚は底にいくに従って薄くなる。口縁端部に平坦面をつくる。体部外面はユビオサエ、内面はユビナデで平滑になっているが、粘土紐の凹凸が十分消されていない。外面には粘土紐痕跡が残る。積山分類1bで、淡路・播磨産と推定される。72は口径9.8cm、器高11.6cm以上で、器形は深鉢形、口縁部は



图27 SD601a出土土器(3)

やや外反し、器厚は底にいくに従って薄くなる。口縁端部はユビで整える。体部外面はユビオサエ、内面はナデ調整し平滑であるが、粘土紐の凹凸が十分消されていない。外面には粘土のひび割れがある。積山分類4aで、播磨産と推定される。73は口径約14.0cm、器高6.1cm以上で、器形は深鉢(円錐)形、口縁部はやや外反し、器厚は底にいくに従って薄くなる。口縁端部は平坦面があり、ユビで整える。体部外面はユビオサエ、内面はヨコナデで、平滑であるが、粘土紐の凹凸が十分消されていない。外面には粘土の皺・ひび割れがある。積山分類4aで、播磨産と推定される。74は口径約14cm、器高4.9cm以上、器形は碗形で、口縁部はやや外反する。口縁端部はユビで整える。体部外面はナデ、内面はヨコハケ調整である。体部外面は粘土紐接合痕跡が残っている。積山分類4cで、産地は不明であるが、大阪湾・紀伊周辺が候補にあがる。75～78は内面に布疋痕が残り、円筒形の器形となる。積山分類6aで、北九州・西部瀬戸内産と推定される。75・76は口径13.4cm、11cmで、器形は円筒形であり、口縁部はやや外反するが直立的で口縁端部は型作りのため薄くなって尖っている。体部外面はユビオサエし、内面は細かい布目疋痕がある。78は製塩土器の底部である。器形は円筒形で、底は尖り気味になる。外面はユビオサエおよびナデ調整で、内面には粗い布目疋痕がある。

63は土馬で、破損している。現状で高さ5.8cm以上、幅4.7cm以上である。一体作りの体部に顔と耳を貼り付け、目は竹管の刺突によって表現する。全体にナデ調整している。

b. 須恵器

須恵器は杯A90～93、杯B86～89、杯B蓋82～85、壺蓋94・95、小壺96、壺Q97・100、短頸壺99、把手付壺101・102、平瓶98、鉢103、甕104・105がある。

90～93は須恵器杯Aである。90は口径17.4cm、高さ3.8cm、底径15.0cm、91は口径15.6cm、高さ2.4cm、底径12.9cm、92は口径15.0cm、高さ1.8cm、底径13.2cmである。いずれも口縁部端部は丸く収め、口縁部の内外面はヨコナデ調整するが、底部は調整が十分でなく、ヘラケズリ痕跡や粘土の継ぎ目がある。93は口径19.8cm、高さ2.2cm、底径15.6cmである。口縁部の内外面はヨコナデ、底部はヘラケズリ調整を施す。

86～89は須恵器杯Bである。86は口径12.1cm、高さ3.8cm、高台径8.5cmで、口縁部と杯部の内外面はヨコナデ調整する。底部外面に重ね焼きの痕跡がある。87は口径14.3cm、高さ4.2cm、高台径10.3cmで、口縁部と杯部の内外面はヨコナデ調整するが、底部は調整が十分でなく粘土の継ぎ目が残る。88は口径14.9cm、高さ4.1cm、高台径10.5cmで、口縁部と杯部の内外面はヨコナデ調整する。底部の内面はナデ、底部の外面はヘラケズリのちナデ調整する。89は口径17.0cm、高さ5.3cm、高台径12.9cmで、杯部外面の中位に沈線を3条巡らす。口縁部から杯部の内外面および高台はヨコナデ、底部内面はナデ、底部外面はヘラ切りのちナデ調整する。

82～85は須恵器杯B蓋である。82は口径15.2cm、高さ3.3cm(つまみ含む)で、口縁端部は屈曲しない。口縁部の内外面はヨコナデ、口縁部外面からつまみ部まではヘラケズリ調整する。83は口径11.4cm、高さ1.5cm(つまみ含む)で、口縁端部はやや屈曲する。口縁部の内外面はヨコナデ、口縁部外面からつまみ部まではヘラケズリ調整する。84は口径14.2cm、高さ2.5cm(つまみ含む)、口縁端部はゆるやかにS字状に屈曲する。口縁部内外面・内面はヨコナデ、口縁部外面からつまみ部まではヘラケズリ調整

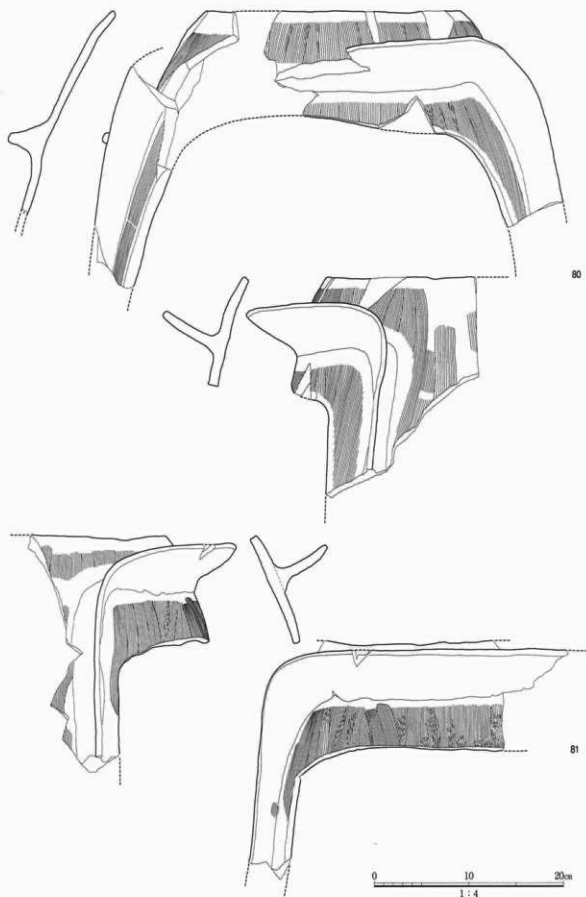


图28 SD601a出土土器(4)

する。口縁部内外面に、焼成時の重ね焼き痕跡がある。85は口径18.4cm、高さ1.3cm（つまみ含む）で、口縁端部はS字状に屈曲する。口縁部はヨコナデ、外面はヘラケズリ、内面はナデ調整で、器体の全体が扁平になっている。

94・95は須恵器壺蓋である。94は壺A蓋である。口径14.5cm、高さ2.2cm（つまみ含まず）で、口縁部の内外面はヨコナデ、体部内面はナデ調整する。天井部の全域に灰緑色の自然軸が掛かる。95は口径9.7cm、高さ3.5cmで、口縁部の内外面はヨコナデ、体部内面はナデ、天井部はヘラ切り後にナデ調整する。96は須恵器小壺で、口径3.3cm、体部の最大径7.6cm、高さ7.5cm、高台径4.1cmである。口縁部は外反し、丸く収める。体部外面の上部はヨコナデ、下部から高台の接合部まではヘラケズリ、内面はヨコナデ、高台はヨコナデ調整である。97・100は須恵器壺Qで、97は体部最大径10.8cm、高さ8.2cm以上、高台径5.2cmで、口縁部は欠けている。体部外面の上部はヨコナデ、下部から高台接合部まではヘラケズリ、体部内面はヨコナデ、高台はヨコナデ調整する。底部はヘラ切り痕がある。100は頸部径13.2cm、体部最大径18.1cm、高さ15cm以上、底径7.8cm、口縁部は欠けている。体部外面の上部はヨコナデ、下部から高台付近まではヘラケズリのちヨコナデ、体部内面はヨコナデ、高台はヨコナデ調整する。器体の内外面に自然軸が掛かる。99は須恵器短頸壺で、口径9.4cm、器高16.5cm、体部最大径20.5cm、底径11.2cmである。体部外面はヨコナデ、内面はナデ調整している。101・102は須恵器把手付壺Nである。102は把手のみの破片で、肩部に縦位に貼り付けている。体部の内外面はヨコナデ調整する。101は底部の破片で、底径10.6cm、器高7.1cm以上ある。底部は平底でケズリ調整、体部外面はケズリ、内面はヨコナデ調整しているが、粘土紐の凹凸が十分消されていない。底部のすぐ上に把手を2個、対向する位置に縦方向に貼り付けている。類例[向日市埋蔵文化財センター1990]を参考にと、体部下半と肩部の2個の把手は対向位置に取り付けられ、それぞれの組は上の方から見て直交に配される。98は須恵器平瓶で、口径6.0cm、瓶の高さ14.2cm、体部最大径12.4cmである。瓶外面の下半部はヘラケズリ調整、それ以外はヨコナデ調整する。98は本来はSD601bに属していた可能性が高い。

103は須恵器鉢で、口径18.0cm、器高10.5cmである。いわゆる鉄鉢で、口縁部は内湾し、端部は内傾する平坦面をなす。底部は尖り気味になる。口縁部はヨコナデ、体部外面は底まで細かいヘラケズリ調整で、内面はヨコナデ調整のち不定方向のナデ調整を施す。内外面、断面ともに灰色である。

104・105は須恵器甕である。104は口径16.9cm、器高12.8cm以上で、口縁部は「く」の字状に外反する。口縁部はヨコナデ、体部外面は頸部まではヨコナデ、それ以下は格子タタキのちカキメ調整する。内面は、頸部以下は当て具の同心円タタキの後ヨコナデ調整しているが、当て具痕跡は十分消されていない。頸部の内面以下は鉄軸を施している。105は口径22.0cm、器高9.7cm以上で、口縁部は「く」の字状に外反する。端部は内傾する平坦面をなす。口縁部はヨコナデ、体部外面は頸部まではヨコナデ、それ以下は平行タタキで整形する。頸部の内面以下は当て具の同心円タタキ痕跡が見られる。

以上、SD601a出土の土器の時期は、98を除けば、土師器・須恵器の形態、器種構成などからみて、長岡京期、難波Ⅴ新段階（8世紀末～9世紀初）と考えられる。

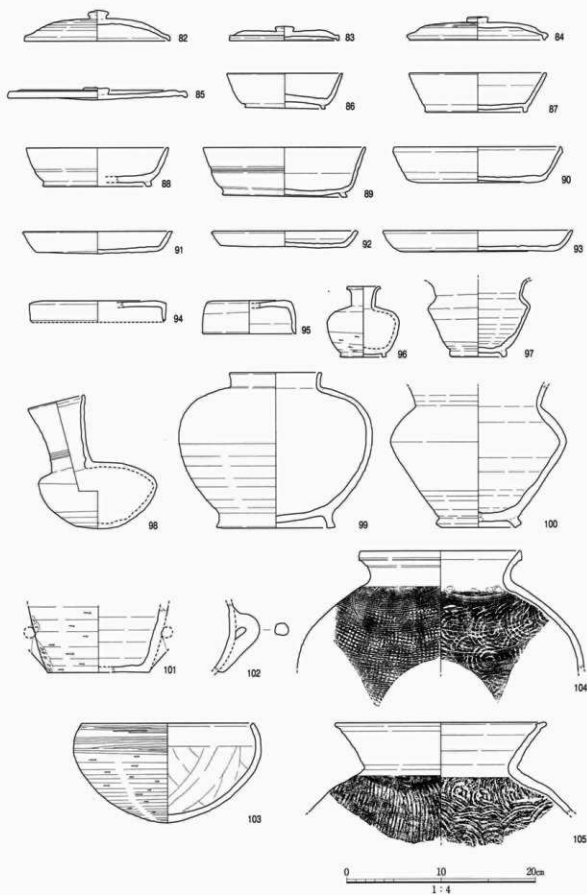


图29 SD601a出土土器(5)

3) 小結

調査区北部、特に西側を中心に、7世紀第2四半期から中頃にかけての遺物(土器、瓦、木製品)を包含する第12～10b層を確認した。各層から出土した遺物は、大きな時期差はなく、いずれも難波Ⅲ古段階～中段階(7世紀前～中葉)に相当する。土器・木器などは磨滅・細片化しておらず、現地性の高い資料と考える。また、古代の地層は、北東方向に緩やかに低く傾斜して堆積している。当時は大川に極めて近い場所にあったと考えられる。

第10a層上面では東西溝SD601a・b・cが造られた。SD601bからは土師器、須恵器、瓦、獣骨などが出土し、土器などの特徴から、難波Ⅲ中段階～新段階(7世紀中～後葉)と推定され、前期難波宮期に相当する。溝の長軸方向がほぼ正東西を向き、何らかの計画性を想定させる。恒常的な流水は現状では確認できないものの、底の高さは東が低く、東方への低地へ向っている。

SD601aはSD601bとほぼ同じ位置に築かれ、土器・瓦・竈などの遺物が一括して廃棄された状況で出土した。土器などの特徴から、難波Ⅴ新段階、長岡京期(8世紀末～9世紀初)と推定され、後期難波宮が廃絶した時期にあたる。SD601bとは百年以上の時期差があるが、途中の時期の遺物はまったく出土しなかった。同じ場所に作られたのは偶然の一致か、この東西線になにか特別な意味があったのか判断しがたい。機能時の状況は不明であるが、遺物量はSD601bが圧倒的に多く、大量の食器類とともに、竈が目立つ。

第3節 中世の遺構と遺物

中世の遺構は、中央部北寄り第8・9層が広がる範囲を中心に分布する。ここでは地層毎の遺構検出に努めたが、いずれも黒褐色細粒砂質シルトを基本とし、地層と遺構埋土が類似し、遺構面を特定することが困難な場合もあった。層中で検出される遺構や上面で把握できなかった遺構については、第10a層上面において最終的な遺構検出を行い、第9層中の遺構として報告する。また、豊臣期の造成により、中世遺構面が削平されている地域では、第6層基底面として取り上げた。

後述するように出土遺物はその大半が12世紀末～14世紀前半にある。なお、検出遺構からは中世の遺物に混じり、古代の遺物が多数出土したが、特記すべき遺物以外については、記述を省略する。

1) 第9層中の遺構と遺物

i) 柱穴(図30・31、図版2)

SP401 直径0.3m、深さ0.2mの円形の柱穴で、埋土は暗灰黄～オリーブ褐色細粒砂質シルトである。

SP402 直径0.2～0.3m、深さ0.1mの楕円形の柱穴で、埋土は暗灰黄色細粒砂質シルトである。

SP403 直径0.3m、深さ0.2mの円形の柱穴で、埋土は暗灰黄色細粒砂質シルトである。

SP407 直径0.4m、深さ0.3mの円形の柱穴で、埋土は黒褐色細粒砂質シルトである。

SP409 東側をSE111によって壊されているが、直径0.3m、深さ0.2mの円形の柱穴である。埋土はオリーブ褐色細粒砂質シルトである。

SP419 直径0.4～0.5m、深さ0.2mの楕円形の柱穴である。埋土は灰オリーブ色中粒砂質シルトで、土師器皿、瓦器碗が出土した。

SP422 直径0.3m、深さ0.1mの円形の柱穴で、埋土はオリーブ褐色細粒砂質シルトである。

SP423 直径0.4m、深さ0.1mの円形の柱穴で、埋土は暗灰黄色細粒砂質シルトで、底に石を敷いている。

SP424 直径0.1m、深さ0.1mの円形の柱穴で、埋土は暗灰黄色細粒砂質シルトである。

SP425 直径0.2m、深さ0.1mの円形の柱穴で、埋土は暗灰黄色細粒砂質シルトである。

SP426 直径0.4m、深さ0.1mの円形の柱穴である。埋土は暗灰黄色細粒砂で、土師器皿が出土した。

SP427 直径0.1m、深さ0.1mの円形の柱穴で、埋土は暗オリーブ褐色細粒砂質シルトである。

SP428 直径0.5m、深さ0.2mの円形の柱穴である。埋土は暗灰黄色細粒砂質シルトで、瓦器碗、瓦質土器羽釜が出土した。

SP429 直径0.4m、深さ0.2mの円形の柱穴で、埋土は灰褐～暗褐色細粒砂質シルトである。

SP432 直径0.1m、深さ0.1mの円形の柱穴で、埋土は暗オリーブ褐～オリーブ褐色細粒砂質シルトである。

SP433 直径0.3～0.4m、深さ0.1mの楕円形の柱穴である。埋土はにぶい黄褐色細粒砂質シルトで、土師器皿が出土した。

SP434 直径0.4～0.5m、深さ0.2mの楕円形の柱穴である。埋土は暗オリーブ褐～暗灰黄色細粒砂質シルトで、土師器皿が出土した。

SP435 直径0.2m、深さ0.1mの円形の柱穴で、埋土は灰黄褐色細粒砂質シルトである。

SP436 直径0.2m、深さ0.1mの円形の柱穴で、埋土は黒褐色細粒砂質シルトである。

SP437 直径0.3m、深さ0.1mの円形の柱穴で、埋土は暗オリーブ褐～褐色細粒砂質シルトである。

SP439 直径0.4m、深さ0.2mの円形の柱穴である。埋土は暗オリーブ色中粒砂で、土師器皿、瓦器碗が出土した。

SP440 直径0.3m、深さ0.2mの円形の柱穴

である。埋土は暗オリーブ褐～オリーブ褐色細粒砂質シルトで、土師器皿が出土した。

SP441 直径0.3～0.4m、深さ0.1mの円形の柱穴である。埋土は礫を含むオリーブ褐色細粒砂で、瓦器碗が出土した。

SP443 直径0.3m、深さ0.2mの円形の柱穴である。埋土は灰黄褐～暗灰黄色細粒砂質シルトで、土師器皿が出土した。

SP444 直径0.2m、深さ0.2mの円形の柱穴である。埋土は暗オリーブ褐色細粒砂質シルトで、土師器皿、瓦器碗が出土した。

SP447 直径0.4m、深さ0.1mの円形の柱穴で、埋土は暗褐色細粒砂質シルトである。

SP449 直径0.3m、深さ0.2mの円形の柱穴である。埋土はオリーブ褐～暗灰色細粒砂質シルトで

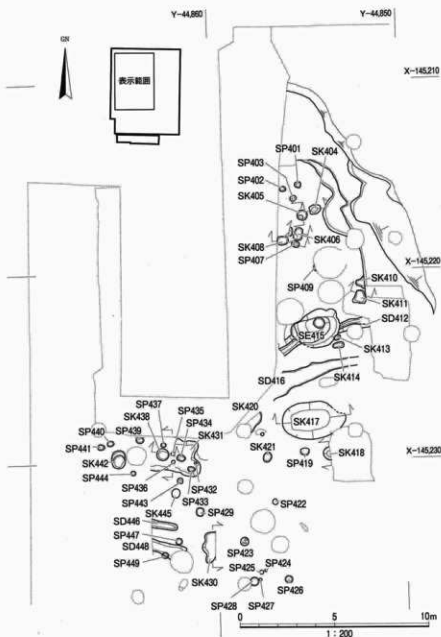


図30 第9層中遺構平面図

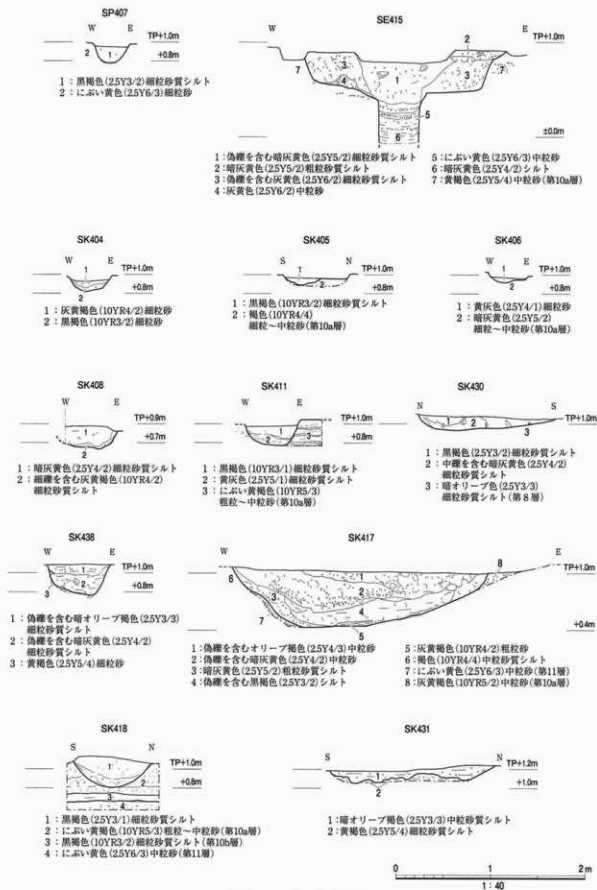


図31 第9層中遺構断面図

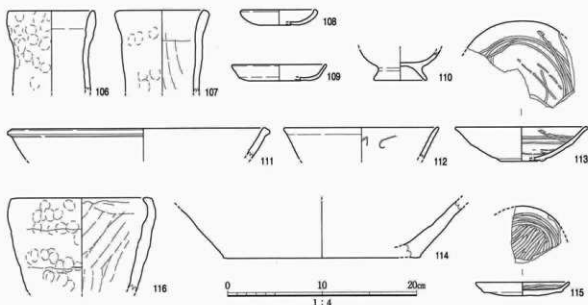


図32 第9層中遺構出土土器
SE415(108~115)、SD416(106・107)、SK445(116)

ある。

ii) 溝(図30・32、図版2・23)

SD412 長さ5.0m、幅0.3m、深さ0.1mの東西方向の溝で、一部をSE415に壊されている。埋土は暗黄灰色細粒砂質シルトで、底のレベルはわずかに西側が低い。瓦器碗、瓦質土器羽釜・甕が出土した。

SD416 長さ4.2m以上、幅0.8m、深さ0.1mの東西溝である。底のレベルはわずかに西側が低く、埋土は礫を含むオリブ褐〜ぶい黄褐色細粒砂質シルトである。古代の土師器杯、製塩土器106・107、須恵器杯蓋・壺・甕、平瓦、丸瓦のほか土師器羽釜が出土した。106・107は古代の製塩土器である。106は口径約9.0cm、器高8.5cm以上で、器形は円筒形、口縁部はやや外反するが直立的で、器厚は底に向かって薄くなる。口縁端部はユビオサエで整える。体部外面はユビオサエ、内面はナデ調整である。胎土に円磨された砂岩やチャートの礫を多く含む。107は口径約8.8cm、器高8.4cm以上で、106と同様な器形である。いずれも積山分類5c類となり、和泉・紀伊産で、8世紀末である。

SD446 長さ1.4m以上、幅0.4m、深さ0.1mの東西方向の溝で、埋土は暗褐色細粒砂質シルトである。

SD448 長さ1.8m以上、幅0.8m、深さ0.1mの東西方向の溝で、埋土は暗褐色細粒砂質シルトである。

iii) 井戸(図30~32、図版3・24)

SE415 最下段の井戸側に曲物を使った井戸である。上部大半を東西長2.6m、南北長2.0m、深さ1.2mの楕円形の井戸側の抜取り穴で壊されている。掘形は直径0.52m、深さ0.45mあり、底に井戸側を設置していた。曲物、木質は残存していない。抜取り穴の埋土は偽礫を含む暗灰黄色細粒砂質シルト、井戸側掘形の埋土は暗黄灰色シルトである。抜取り穴から土師器皿108・109・台付皿110、瓦器碗113・皿115、瓦質土器播鉢111、東播系須恵器鉢、常滑焼甕114、青磁碗112が出土した。

108・109は土師器皿である。108は口径7.6cm、器高1.6cm、底径4.8cm、口縁端部は丸く収める。灰白色である。109は口径9.8cm、器高1.7cm、底径6.5cm、口縁端部は丸く収める。ぶい橙色である。

両者ともに、口縁部内外面をヨコナデ調整しており、内面はナデ、外面は底部から体部下半をユビオサエのちナデ調整する。いずれも13世紀前半と推定する。110は土師器台付皿で、残存器高3.2cm、台脚部底径5.3cm、皿部の体部は丸味をもって立ち上がる。皿部の内外面はヨコナデおよびナデ調整、脚台は皿に貼り付け、内外面をヨコナデおよびナデ調整する。明黄褐色である。13世紀前半に位置づけられる。

113は瓦器碗で、口径13.5cm、器高3.6cm、高台径4.4cm、低い高台を貼り付ける。高台は断面三角形で、暗文は渦巻き状暗文である。和泉型Ⅲ-3期、13世紀前半である。115は瓦器皿で、口径9.6cm、器高1.4cm、底径3cm、口縁部を丸く収める。口縁部から体部側面の内外面をヨコナデ、底部外面はユビオサエのちナデ調整する。内底面に平行線状暗文を密に施す。13世紀前半である。111は瓦質土器搦鉢で、口径約26cm、器高3cm以上、口縁端部は平坦面があり一条の凹線が巡る。口縁部をヨコナデ調整している。13世紀前半である。

114は常滑焼甕の底部で、底径約20cm、体部の内外面とも整形痕をナデ消している。底部外面は粗面のままである。にぶい橙～にぶい褐色である。常滑9・5型式(13世紀第2四半期)である。

112は龍泉窯系青磁碗で、口径16.2cm、高さ3.3cm以上、内面に劃花文がある。明オリブ灰色の釉が掛かる。山本分類Ⅰ2a類で、D期(12世紀中～後半)にあたる。

iv) 土壌(図30～32・70、図版23・30)

SK404 東西長0.6m、南北長0.5m、深さ0.2mの楕円形の土壌で、埋土は灰黄褐色細粒砂～黒褐色粗粒砂である。

SK405 直径0.4m、深さ0.1mの円形土壌で、埋土は黒褐色細粒砂質シルトである。

SK406 東西長0.4m、南北長0.7m、深さ0.1mの長方形土壌で、埋土は黄灰色細粒砂である。

SK408 東西長0.6m、南北長0.5m、深さ0.2mの隅丸方形土壌で、埋土は暗灰黄～灰黄褐色細粒砂質シルトである。

SK410 東部が破壊されているが、現状では東西長0.7m以上、南北長0.5m、深さ0.1mの不整形な土壌で、埋土は黄褐色細粒砂質シルトである。

SK411 東西長0.6m、南北長0.3m、深さ0.3mの楕円形土壌で、埋土は黒褐～黄灰色細粒砂質シルトである。

SK413 東西長0.4m、南北長0.3m、深さ0.1mの楕円形土壌で、埋土は黄褐色細粒砂質シルトである。

SK417 東西長3.4m、南北長2.0m、深さ0.6mの楕円形土壌である。埋土は偽礫を含むオリブ褐～暗灰黄色中粒砂・砂質シルトで、土鍾324が出土した。

SK418 SK525によって壊されているが、現状は直径0.7m、深さ0.3mの円形の土壌で、埋土は黒褐色細粒砂質シルトである。

SK420 大半は調査区外に延びるが、現状は東西長0.4m以上、南北長0.9m以上、深さ0.1mの楕円形土壌で、瓦質土器足釜が出土した。

SK421 東西長0.4m、南北長0.5m、深さ0.4mの楕円形土壌である。埋土は暗灰黄色細粒砂質シルトで、瓦器碗(和泉型Ⅲ-2期)、常滑焼甕が出土した。

SK430 現状では長さ1.7m、幅0.7m、深さ0.1mの不整形な土壌で、埋土は黒褐～暗灰黄色細粒砂質シルトである。

SK431 東西長2.7m、南北長1.8m、深さ0.3mの不整形で浅い土壌である。埋土は暗オリーブ褐色中粒砂質シルトで、土師器皿、瓦器碗、瓦質土器足釜が出土した。

SK438 直径0.6m、深さ0.3mの円形土壌で、埋土は偽礫を含む暗オリーブ褐～暗灰黄色細粒砂質シルトである。

SK442 東西長0.7m、南北長1.0m、深さ0.4mの楕円形の土壌で、埋土は礫を含むオリーブ褐～暗灰黄色細粒砂である。

SK445 東西長0.5m、南北長0.4m、深さ0.2mの楕円形の土壌である。埋土は暗灰黄色細粒砂質シルトで、製塩土器116、瓦器碗、東播系須恵器鉢、白磁皿が出土した。116は深鉢形の製塩土器で、口径約15cm、器高10cm以上、口縁部は外反し、器厚は底に向かって薄くなる。口縁端部はユビオサエで平坦面に整える。体部外面はユビオサエ、内面はユビナデで平滑になっているが、斜め方向の粘土紐の凹凸が残る。外面にも粘土紐痕跡がある。積山分類1b類に属し、淡路・播磨産で、8世紀末に位置づけられる。

2) 第9層上面の遺構と遺物

第9層は調査区中央部西寄り、第10a層より狭い範囲で分布し、上面で柱穴、溝、井戸、土壌を検出した。

i) 柱穴(図33、図版2)

SP506 東西長0.4m、南北長0.3m、深さ0.3mの楕円形の柱穴で、埋土は灰黄褐色細粒砂質シルトである。

SP511 直径0.4m、深さ0.1mの円形の柱穴で、埋土は礫を含むオリーブ褐色細粒砂質シルトである。

SP512 直径0.4m、深さ0.1mの円形の柱穴である。埋土は礫を含むオリーブ褐色細粒砂質シルトで、瓦器碗(和泉型Ⅲ-2期)が出土した。

SP518 直径0.3m、深さ0.1mの円形の柱穴で、埋土は暗灰黄色中粒砂質シルトである。

SP519 直径0.3m、深さ0.1mの円形の柱穴で、埋土はオリーブ褐色中粒砂質シルトである。土師器皿が出土した。

SP522 直径0.3～0.4m、深さ0.1mの楕円形の柱穴で、埋土は黒褐色細粒砂質シルトである。

SP526 直径0.2m、深さ0.1mの円形の柱穴である。埋土は暗灰黄～黄褐色細粒砂質シルトで、瓦器皿が出土した。

SP527 直径0.3～0.4m、深さ0.1mの楕円形の柱穴で、埋土は暗灰黄～黒褐色細粒砂質シルトである。

SP531 直径0.3～0.4m、深さ0.2mの楕円形の柱穴である。埋土はオリーブ褐色細粒砂質シルトで、瓦器碗が出土した。

SP532 直径0.4m、深さ0.1mの円形の柱穴で、埋土は暗オリーブ褐色細粒砂質シルトである。

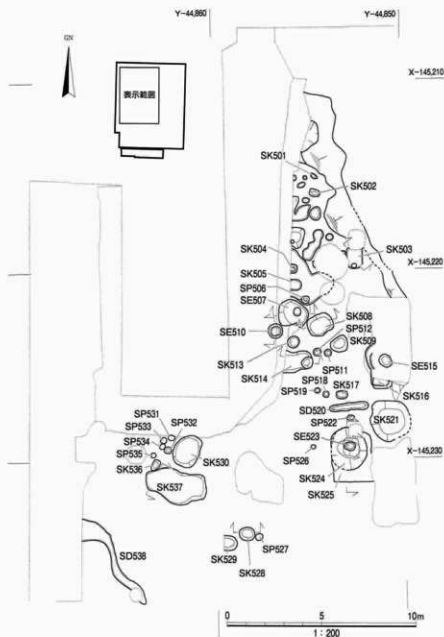


図33 第9層上面遺構平面図

SP533 直径0.3m、深さ0.2mの円形の柱穴である。埋土は暗オリーブ褐色細粒砂質シルトで、土師器皿、瓦器碗、備前焼甕が出土した。

SP534 直径0.3m、深さ0.2mの円形の柱穴である。埋土は暗オリーブ褐色細粒砂質シルトで、瓦器碗、瓦質土器羽釜が出土した。

SP535 直径0.3m、深さ0.1mの円形の柱穴である。埋土は暗オリーブ褐～にぶい黄灰色細粒砂質シルトで、瓦器碗が出土した。

ii) 溝(図33)

SD520 長さ2.1m、幅0.4m、深さ0.1mの溝である。埋土は黄灰色細粒砂質シルトで、備前焼甕、丸瓦が出土した。

SD538 総延長5.3m、

幅0.6m、深さ0.1mで、浅い蛇行する溝である。埋土はオリーブ褐～黒褐色細粒砂質シルトである。

iii) 井戸(図33・34・36～38・70、図版4・31)

SE507 最下段の井戸側に曲物を使った井戸で、上部大半を東西長1.6m、南北長1.3m、深さ0.8mの不整形な井戸側抜取り穴で壊されている。この土壌の底に井戸側(曲物)を設置した直径0.40m、深さ0.28mの掘形がある。土壌の埋土は暗灰黄色細粒砂質シルト、曲物内埋土は黒褐色シルト質粘土である。土壌から土師器皿、東播系須恵器鉢121、瓦器碗・皿、瓦質土器足釜、常滑焼甕が出土した。121は東播系須恵器鉢で復元口径33.9cm、高さ4.4cm以上、口縁端部はやや拡張している。森田福年の第2期2段階(13世紀初)～第3期1段階(13世紀後半)である。

SE523 曲物を井戸側(最下段)に使った井戸である。上部大半を東西長2.0m、南北長2.3m、深さ

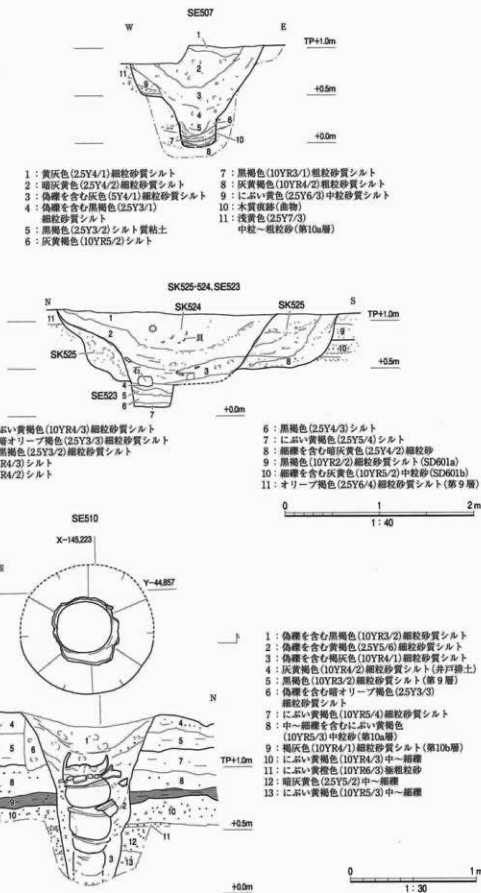


図34 第9層上面遺構断面図(1)

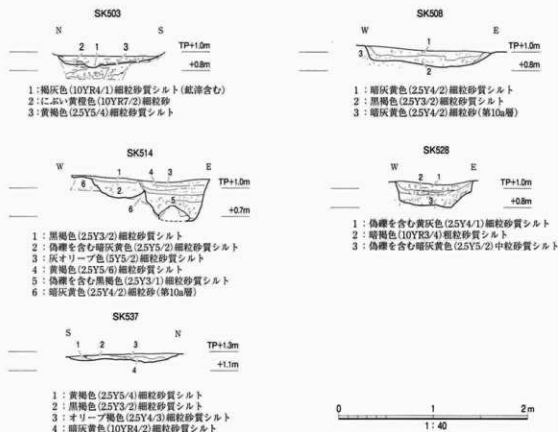
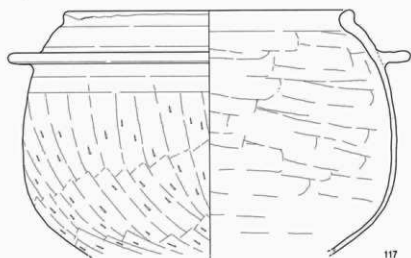


図35 第9層上面遺構断面図(2)

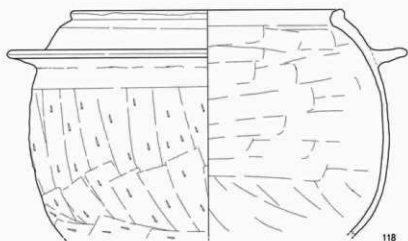
1.3mの楕円形の井戸側抜取り穴SK524で壊されている。SK524の底に、井戸側を埋設した直径0.42m、深さ0.25mの掘形が残っていた。曲物、木質は残存していなかった。掘形の埋土は黒褐色シルトである。掘形埋土から、土師器皿、瓦器碗(和泉型Ⅲ期)、備前焼甕が出土した。

SE510 上部径1.0m、下部径0.4m、深さ1.3m以上の円形の掘形に、土師器羽釜(117~120)を4段以上重ねて井戸側とした井戸である。羽釜内の埋土は偽礫を含む黒褐色細粒砂質シルト、掘形埋土は偽礫を含む褐色細粒砂質シルトである。井戸側外側に土器・瓦などの破片を裏込めとして入れている。土師器羽釜内からは土師器皿・羽釜、瓦器碗・皿、瓦質土器足釜・甕、備前焼甕、青磁碗、平瓦が出土した。羽釜の周囲からは土師器皿・羽釜、瓦器碗・皿、瓦質土器甕・足釜、常滑焼甕、平瓦、丸瓦、滑石製石鍋331が出土した。

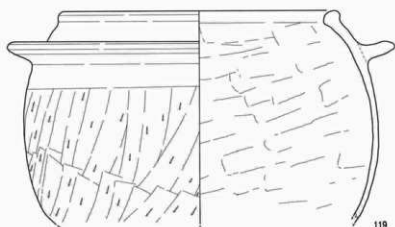
117~120は井戸側に使用していた土師器羽釜である。下から120・119・118・117の順に積んでいた。117は口径29.7cm、高さ25.7cm以上、鈎は最大径42.8cm、口縁部は内傾しながら立ち上がり、口縁端部は肥厚する。鈎は貼り付けてヨコナデする。体部外面のうち口縁部から鈎下部まではヨコナデ調整、それより下部は縦方向にヘラケズりする。内面は板状工具によりナデ調整する。内外面に煤が付着する。118は口径28.0cm、高さ23.9cm以上、鈎の最大径は42.4cmである。口縁部は内傾しながら立ち上がり、口縁端部はつまみあげるように肥厚する。口縁部は内外面ともにヨコナデし、鈎は貼り付けてヨコナデする。体部外面のうち口縁部から鈎下部まではヨコナデ、それより下部は縦方向にヘラケズりする。



117



118



119

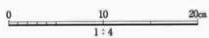


圖36 SE510出土土器(1)

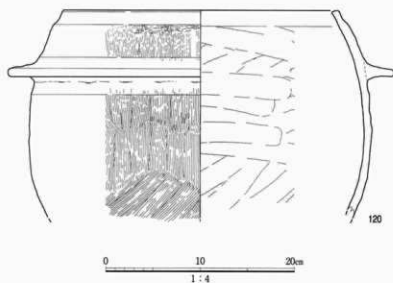


図37 SE510出土土器(2)

内面は板状工具によりナデ調整する。外面に煤が付着する。119は口径28.0cm、高さ23.9cm以上、鈐の最大径は42.4cmである。口縁部は内傾しながら立ち上がり、口縁端部はつまみあげて肥厚させ、平坦面をなす。口縁部は内外面ともにヨコナデし、鈐は貼り付けてヨコナデする。体部外面の下部は縦方向にヘラケズりする。内面は板状工具により

ナデ調整する。外面に煤が付着する。120は口径28.9cm、高さ21.9cm以上、鈐の最大径41.0cmである。口縁部は内傾しながら立ち上がり、口縁端部は平坦な面をなす。口縁部を内外面ともに強くヨコナデ調整し段がある。体部外面は縦方向のヘラ調整の後、鈐を貼り付けて強くヨコナデ調整する。内面は板状工具によりナデ調整する。内外面に煤が付着する。117～120の羽釜は、13世紀中葉～後葉に位置づけられるものであろう[大文協1982]。

SE515 直径約0.6m、深さ0.4mの円形掘形に井戸側を埋設した井戸である。井戸側板の木質は残っていなかったが「圧痕」と推定できる状況であり、おそらく曲物であろう。上部の大半は豊臣期の造成やSK516によって削平されている。

iv) 土壌(図33～35・38、図版24)

SK501 東西長0.4m、南北長0.2m、深さ0.1mの楕円形の土壌で、埋土は黒色細粒砂質シルトである。

SK502 東西長0.6m、南北長0.4m、深さ0.1mの楕円形の土壌で、埋土は偽礫を含む黒色細粒砂質シルト～炭・偽礫を含む暗灰黄色細粒砂質シルトである。

SK503 東西長0.8m、南北長1.2m、深さ0.1mの長方形の土壌で、埋土は褐灰色細粒砂質シルトである。

SK504 西部が調査区外に延びるが、現状は東西長0.5m以上、南北長0.4m、深さ0.1mの長方形の土壌で、埋土は暗灰黄色細粒砂質シルトである。

SK505 西部が調査区外に延びるが、現状は東西長0.6m以上、南北長0.6m、深さ0.1mの長方形の土壌で、埋土は暗灰黄色細粒砂質シルトである。

SK508 東西長1.4m、南北長1.1m、深さ0.2mの方形の土壌である。埋土は暗灰黄～黒褐色細粒砂質シルトで、瓦器碗、瓦質土器羽釜、平瓦が出土した。

SK509 東西長0.9m、南北長0.8m、深さ0.1mの浅い楕円形の土壌である。

SK513 直径0.6m、深さ0.2mの円形の土壌である。埋土は黒褐～黄灰色細粒砂質シルトで、土師

器羽釜、瓦器碗、瓦質土器羽釜、常滑焼甕が出土した。

SK514 西部が調査区外に延びるが、現状は東西長1.5m以上、南北長1.0m、深さ0.2mの長方形の土壌である。埋土は偽礫を含む暗灰黄～黒褐色細粒砂質シルトで、底に径30cmの石が埋まっており、備前焼甕が出土した。

SK516 東北側が残っていないが、現状は東西長1.0m以上、南北長2.1m以上、深さ0.5m以上の不整形な土壌で、埋土は黒褐色細粒砂質シルトである。井戸SE515の井側抜き穴の一部と考えられる。土師器皿・羽釜、東播系須恵器鉢、瓦器碗、瓦質土器鍋122、備前焼壺、常滑焼甕が出土した。122は瓦質土器鍋で、口径22.4cm、高さ4.1cm以上、口縁部は外反しながら立ち上がり、口縁端部は平坦な面をなす。口縁部はヨコナデ、頸部はユビオサエおよびナデ、内面はヨコナデ調整する。13世紀末～14世紀初頭と考えられる[京都市埋蔵文化財研究所2003]。

SK517 東西長0.6m、南北長0.4m、深さ0.1mの方形の土壌で、埋土は灰褐～灰黄褐色中粒砂質シルトである。

SK521 東西長2.0m、南北長2.2m、深さ0.4mの隅丸方形の土壌で、埋土は偽礫・礫を多く含む黒褐色細粒砂質シルトである。土師器皿・羽釜、東播系須恵器鉢、瓦器碗、瓦質土器足釜、備前焼鉢、丸瓦が出土した。

SK525 東西長2.1m、南北長3.0m、深さ0.8mの隅丸方形の土壌で、埋土は細礫を含む暗灰黄色細粒砂である。SE523およびSK524(SE523の抜き穴)によって大半が壊されている。SK525とSK524の出土遺物は分離できなかった。SK525・524からは土師器皿123・124、東播系須恵器鉢125、瓦器碗127・皿126、瓦質土器足釜128・火鉢129、常滑焼甕、白磁、平瓦、銭貨が出土した。

123・124は土師器皿である。123は口径8.4cm、器高1.8cmで、口縁端部を丸く収めるが、強いヨコナデを加えており、内外面に沈線が巡る。口縁部内外面はヨコナデ、底部内面はナデ、底部から体部下半の外縁はユビオサエ調整する。にぶい黄橙色である。灯明皿として使用している。124は口径9.3cm、器高1.4cm、底径5.1cmで、口縁端部は丸く収める。口縁部はヨコナデ、底部内面はナデ、底部から体部下半の外縁はユビオサエ調整する。にぶい黄橙色である。これらは13世紀前半と思われる。125は東播系須恵器鉢で、口縁部はまだ拡張していない。内外面をヨコナデ調整する。森田編年の第2期2段階(13世紀初)～第3期1段階(13世紀後半)である。127は瓦器碗で、口径14.4cm、器高4.3cm、高台径5.0cm、低い高台を貼り付ける。高台は断面三角形である。内底面の暗文は平行線状暗文である。和泉型Ⅲ-3期A類で、13世紀前半に相当する。126は瓦器皿で、口径8.8cm、器高1.7cm、底径4.6cm、口縁部を丸く収める。底部の外縁はユビオサエおよびユビナデ調整する。内底面の暗文は平行線状暗文である。13世紀前半頃と思われる。128は瓦質土器三足釜で、口径16.8cm、口縁部は内傾しながら立ち上がり、鈎をほぼ水平に貼り付け、これの下に脚を貼り付けている。丸味のある体部で、口縁部から鈎はヨコナデ、体部外面はナデ、内面は細かいヨコハケで調整する。外面に煤が付着する。13世紀代である。129は瓦質土器火鉢で脚が付く。内外面をヘラミガキ調整している。底径は12.2cmである。

SK528 東西長0.8m、南北長0.7m、深さ0.2mの楕円形の土壌で、埋土は偽礫を含む灰黄～暗灰黄色細・中粒砂質シルトである。瓦器碗が出土した。

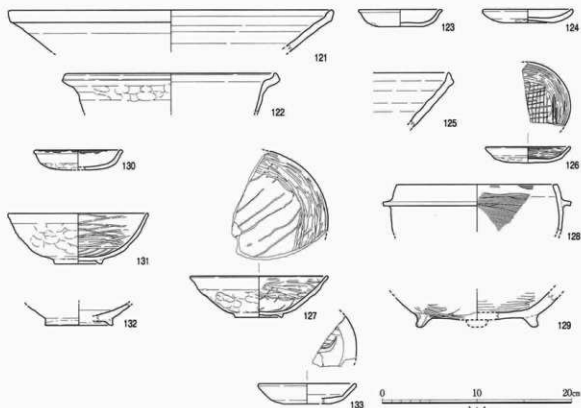


図38 第9層上面遺構出土土器・第9層出土土器
SE507(121)、SK516(122)、SK524・525(123~129)、第9層(130~133)

SK529 直径0.7~0.8m、深さ0.4mの楕円形の土壌で、埋土はオリブ褐〜黄灰色細粒砂質シルトである。瓦器碗、丸瓦が出土した。

SK530 東西長1.4m、南北長1.7m、深さ0.3mの楕円形の土壌で、埋土は偽礫を含む黄灰色シルト、暗灰黄色中粒砂質シルトである。土師器皿、瓦器碗、常滑焼甕が出土した。

SK536 東西長0.4m、南北長0.6m、深さ0.2mの楕円形の土壌で、埋土は暗オリブ褐〜黒褐色細粒砂質シルトである。瓦器碗が出土した。

SK537 東西長3.1m、南北長1.9m、深さ0.1mの不整形な浅い土壌で、埋土は黄褐〜黒褐色細粒砂質シルトである。

3) 第9層出土の遺物(図38・66・70、図版23・25・27・30)

第9層からは、中世の遺物では土師器皿・羽釜、瓦器碗・皿、瓦質土器羽釜、常滑焼甕、備前焼甕、青磁皿、古代の遺物では土師器杯A・杯B・皿A・碗・高杯・甕・竈・羽釜・甕、製塩土器、須恵器杯A・杯B・杯B蓋・壺L・壺E・壺A蓋・高杯・甕、緑釉陶器碗、軒平瓦294、平瓦が出土した。また、管状土鍾322が出土した。このうち、古代の土師器皿A130、緑釉陶器碗132、瓦器碗131、青磁皿133を図化した。

130は土師器皿Aで、口径9.0cm、器高2.1cm、口縁部を丸く収めている。口縁部の内外面から体部の内面をヨコナデ、底部外面はユビオサエの後、軽くナデ調整するが、ユビオサエ痕が十分消されて

いない。口縁部に煤が付着している。暗文はない。8世紀末に位置づけられる。132は緑釉陶器碗で、高台径6.9cm、高台は断面台形である。高台端部は露胎でそれ以外は全面にオリブ灰色の釉を施す。胎土は灰色で、1mm以下の長石を含み、硬質の焼成である。9世紀後半で、平安京近郊産と推定される。131は瓦器碗で、口径14.7cm、器高5.4cm、高台径4.9cm、低い高台を貼り付ける。高台は断面台形である。内底面の暗文は平行線状暗文である。和泉型Ⅲ-2期A類で、13世紀初頭である[森島康雄2005]。133は青磁皿で、口径10.1cm、器高2.2cm、底径5.1cm、口縁は丸く収める。底面は露胎で、それ以外は灰オリブ色の釉が掛かる。底部内面に劃花文様がある。山本分類皿Ⅰ類(D期、12世紀中頃～後半)である。

4) 第8層上面の遺構と遺物

第8層は調査区中央北部に分布し、上面で柱穴、土壌を検出した。

i) 柱穴(図39、図版2)

SP544 直径0.2m、深さ0.2mの円形の柱穴である。

SP553 直径0.3m、深さ0.1mの円形の柱穴で、埋土は黄褐色粘土粒を含む黒褐色細粒砂質シルトである。中世の土師器皿が出土した。

SP556 直径0.3m、深さ0.1mの円形の柱穴で、埋土は炭・偽礫を含む黄褐色細粒砂質シルトである。底に板石を敷いている。瓦器碗が出土した。

SP557 直径0.4m、深さ0.1mの円形の柱穴で、埋土は黄褐色粘土粒を含む暗オリブ褐色細粒砂質シルトである。底に板石を敷いている。瓦器碗が出土した。

ii) 土壌(図39～42・66、図版2～5・24・25・27)

SK540 東西長0.5m、南北長1.1m、深さ0.1mの不整形な土壌で、埋土は偽礫を含む黒褐～暗灰黄色細粒砂質シルトである。土師器皿136、瓦器碗、瓦質土器足釜・鉢、青磁碗(同安窰系)が出土した。136は土師器皿で、口径8.1cm、器高1.4cm、底径4.5cmである。にぶい黄橙色で、口縁部の内外面を強くヨコナデ調整し、底部内面はナデ、底部外面はユビオサエである。口縁端部は丸く収める。14世紀前半である。

SK541 東西長1.8m、南北長2.6m、深さ0.4mの長方形の土壌である。埋土は暗灰黄～黒褐色中粒砂質シルトである。土師器皿、瓦器碗(和泉型Ⅳ-1期、13世紀中頃)、土師器羽釜140、東播系須恵器鉢141、瓦質土器足釜・播鉢、常滑焼甕(常滑11・6a型式、13世紀第3四半期)、常滑焼甕(常滑10・5型式、13世紀第2四半期)、青磁碗(碗Ⅰ5類、13世紀前半)、白磁皿(皿Ⅸ1c類、13世紀中頃～14世紀初頭)、青磁小碗139が出土した。

140は土師器羽釜の口縁部および鐙である。口頸部はやや内傾し、口縁部は「く」の字形に短く外反する。鐙は貼り付けている。器体の内外面をヨコナデ調整する。外面に煤が付着する。13世紀前半であろう。141は東播系須恵器鉢で、口径30.0cm、口縁部はやや拡張しており、内外面をヨコナデ調整する。森田編年の第2期2段階(12世紀末～13世紀初)である。139は青磁小碗の底部破片である。高台部径2.5cm、高台端部は露胎で、そのほかは緑灰色の釉が掛かる。露胎と釉との境はにぶい赤褐色

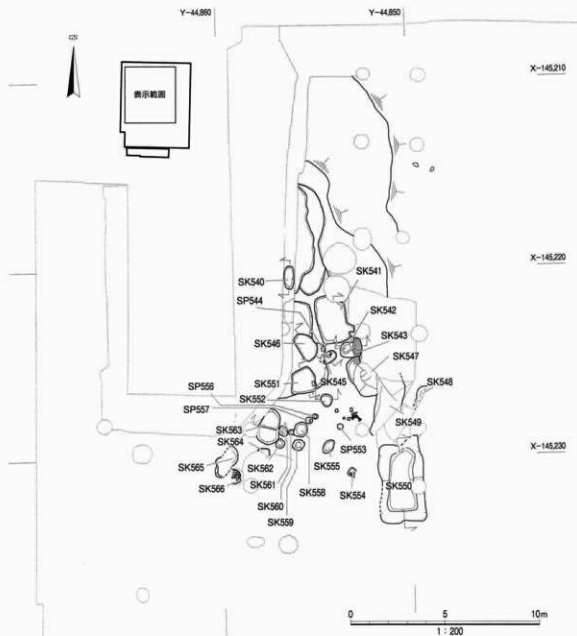


図39 第8層上面遺構平面図

になる。龍泉窯系の青磁である。山本分類小碗Ⅲ類で、F期(13世紀中～14世紀初頭)である。

SK542 東西長1.5m、南北長0.9m、深さ0.3mの楕円形の土壇で、埋土は焼土を含む暗オリーブ褐色細粒砂質シルトである。土師器皿、瓦器碗、常滑焼甕が出土した。

SK543 東西長0.5m、南北長1.3m、深さ0.4mの長楕円形の土壇で、SK542・SK547を切る。土壇内部にヤマトシジミの貝殻が充満していた(106頁参照)。瓦器碗が出土した。

SK545 東西長0.9m、南北長0.6m、深さ0.1mの楕円形土壇で、埋土は礫を含む黒褐色中粒砂質シルトである。土師器皿・羽釜、瓦器碗、瓦質土器足釜・羽釜が出土した。

SK546 東西長0.9m、南北長1.5m、深さ0.3mの楕円形の土壇で、埋土は暗オリーブ褐色細粒砂質シルトである。土師器皿・羽釜、東播系須恵器鉢、瓦器碗、瓦質土器足釜・甕、備前焼播鉢・甕、丸瓦、

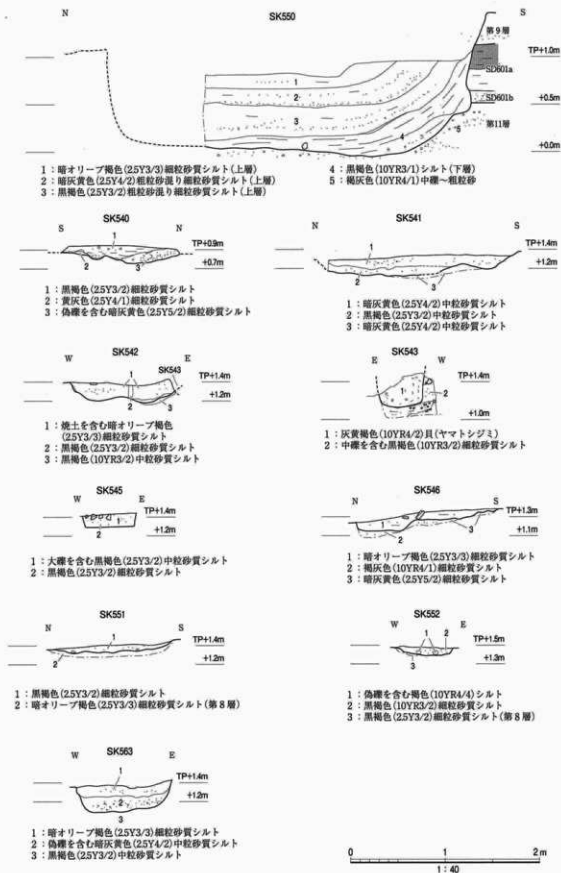


図40 第8層上面遺構断面図

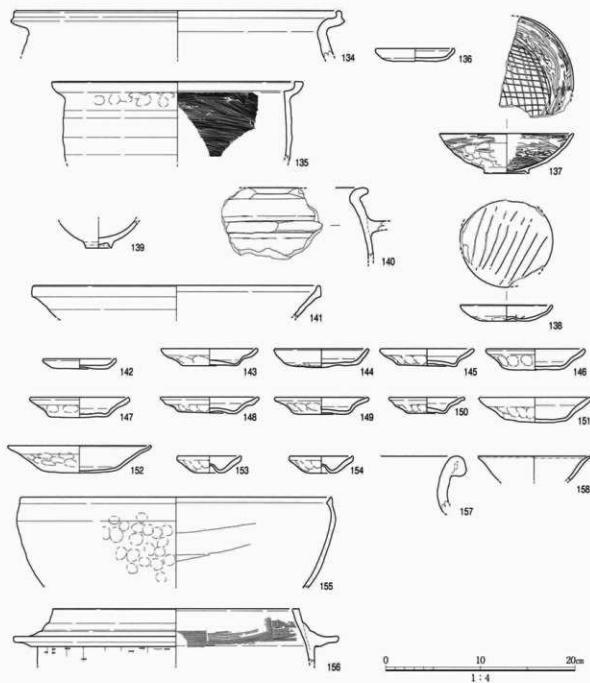


図41 第8層上面遺構出土土器

SK540(136)、SK541(139~141)、SK547(134)、SK550(142~158)、SK551(137・138)、SK563(135)

平瓦が出土した。

SK547 東西長1.3m以上、南北長2.4m、深さ0.4mの方形の土壇で、埋土は暗オリーブ褐色細粒砂質シルトである。SK549と切り合っていると考えられるが、断面観察では明瞭に分離できなかった。土師器皿、瓦器碗、瓦質土器足釜、常滑焼甕134が出土した。134は常滑焼甕で、口径34.1cm、口縁部は口縁部帯が1.2cmで、下方に垂下していない。上方への拡張はまだ弱い。常滑9・5型式(13世紀第2四半期)にあたる。

SK548 東西長0.4m以上、南北長1.3m、深さ0.4m以上の方形土壇である。

SK549 大半を欠損しているが、東西長1.7m以上、南北長3.2m以上、深さ0.5mの土壌である。本来は楕円形に近い形をしていた土壌であろう。SK547と切り合っていると考えられるが、断面観察では明瞭にできなかった。埋土は偽礫を含む黒褐色中礫～細礫質細粒砂質シルトで、土師器皿、瓦器碗(和泉型Ⅲ-3期、13世紀前半)、瓦質土器足釜、常滑焼甕、白磁四耳壺、平瓦、丸瓦が出土した。

SK550 東西長2.4m、南北長4.2m、深さ1.5mの長方形の土壌で、底は平である。埋土は大きく上下2層に分かれる。埋土の上層は暗オリーブ褐色・暗灰黄色・黒褐色粗粒砂混り細粒砂質シルトである。また、下層は黒褐色シルトである。上部をSX301の盛土造成で壊されており、また下層のSD601a・bを削平している。上層の特に上部から、土師器皿142～154をはじめとするまとまった量の土師器皿が、瓦器皿を伴って出土した。土師器皿はコンテナバット2箱分ある。また、上層下部・下層からは、土師器鉢155・羽釜、瓦質土器羽釜156・甕・搥鉢、備前焼甕157・搥鉢、常滑焼甕、青磁碗、白磁皿158のほか、古代の土師器、須恵器、製塩土器、軒丸瓦290、丸瓦、平瓦などが出土した

142～154は土師器皿である。142は口径7.4cm、器高1.1cm、底径5.8cmで、平底の体部から屈曲しながら口縁部が立ち上がる。口縁端部は丸く収める。口縁部はヨコナデ、底部外面はユビオサエ、体部内面はナデ調整する。外表はにぶい橙～にぶい黄橙色である。152は口径15.0cm、器高2.9cm、底径7.6cm、平底の体部から口縁部が屈曲しながら立ち上がる。口縁端部は内傾している。口縁部はヨコナデ、体部下半と底部外面はユビオサエおよびナデ、体部内面はヨコナデおよびナデ調整する。外表は淡黄橙～にぶい黄橙色である。143～151は平底の体部から段をなして屈曲しながら口縁部が立ち上がる。口縁端部を丸く収める。口縁部はヨコナデ調整し、口縁部外面下から底部にかけてナデ～ユビオサエ、底部外面はユビオサエで整えている。にぶい黄橙色である。口径が8cm前後、10cm前後、11cm前後にわかれる。153・154は、底中央部が急激に盛り上がり、口縁端部を丸く収める。いわゆる「へそ皿」で、口縁部内外面をヨコナデ調整する。外面はナデ～ユビオサエ調整する。153は灰白色、154はにぶい黄橙色である。142～154の土師器皿は、口径約11cm、灰白色で、暗文のない瓦器皿を伴う。天神橋遺跡(TJ00-2次)のSD477・SE202出土の土師器皿[大文協2002c]と比較すると、SK550の土師器皿は底部が小さく外側に屈曲して立ち上がる形態が主体を占めており、新しい傾向にある。天神橋遺跡は14世紀後半とされている。SK550出土の土師器皿は、瓦器皿と共伴することを考慮すると、14世紀末から15世紀初頭頃に位置づけられる

155は土師器鉢で、口径32.7cm、器高9.6cm以上、口縁部はやや内傾し、端部は平坦な面をなす。口縁部はヨコナデ、体部外面はユビオサエのちナデ、体部内面は強いヨコナデ調整する。14世紀前半頃であろう。156は瓦質土器羽釜で、口径25.9cm、胴の最大径は34.4cmあり、口縁部は内傾しながら立つ。口縁端部は平坦な面をなす。頸部に2条の凹線が巡る。胴を貼り付けてヨコナデする。内面はヨコハケおよびナデ、口縁部付近は内外ともヨコナデ、胴より下は横方向のヘラケズリ調整である。灰色で、断面は灰白色である。1mm以下の長石・石英・黒色粒・茶色粒を含む。14世紀代であろう[森島康雄2001]。157は備前焼甕で、口頸部はやや外反し、口縁部を折り曲げて玉縁状になる。口縁部は内外とも強いヨコナデ調整する。乗岡福年の備前中世3a期(14世紀前半～中)である。158は白磁皿で、口径11.7cm、灰白色の釉が掛かるが、口縁端部内面は釉を掻き取る。山本分類の白磁皿Ⅸ類(F期、13世

紀中～14世紀初頭)である。

SK551 東西長1.3m、南北長1.3m、深さ0.2mの方形の土壌で、埋土は黒褐色細粒砂質シルトである。土師器皿、瓦器碗137・皿138、瓦質土器足釜が出土した。137は瓦器碗で、口径14.0cm、器高4.2cm、高台径4.5cm、断面三角形の低い高台を貼り付ける。内底面の暗文は平行線状暗文である。和泉型Ⅲ-2期A類で、13世紀初頭である。138は瓦器皿である。口径9.6cm、器高1.7cm、底径5.4cm、口縁部は丸く収める。外面はユビオサエおよびユビナデ調整する。内底面の暗文は平行線状暗文である。13世紀前半頃であろう。

SK552 東西長0.6m、南北長0.7m、深さ0.1mの楕円形の土壌で、埋土は黒褐色細粒砂質シルトである。土師器皿、瓦器碗が出土した。

SK554 東西長0.5m以上、南北長0.5m、深さ0.1mの方形の土壌で、埋土は炭を含む黒褐色細粒砂質シルトである。瓦器碗が出土した。

SK555 東西長0.5m、南北長0.4m、深さ0.2mの楕円形の土壌である。埋土は偽礫を含む暗オリーブ褐色細粒砂質シルトで、土師器皿、瓦器碗(和泉型Ⅲ-3期)が出土した。

SK558 東西長0.7m、南北長0.8m、深さ0.1mの隅丸方形の土壌である。埋土は炭を含む黒褐色細粒砂質シルトで、土師器皿、瓦器碗、東播系須恵器鉢が出土した。

SK559 東西長0.7m、南北長0.6m、深さ0.1mの楕円形の土壌である。埋土は炭を含む黒褐色細粒砂質シルトで、土師器皿、瓦器碗が出土した。

SK560 東西長0.2m以上、南北長0.3m、深さ0.1mの楕円形の土壌である。埋土は暗オリーブ褐色細粒砂質シルトで、土師器皿、瓦器碗が出土した。

SK561 東西長0.6m、南北長0.5m、深さ0.1mの方形の土壌である。埋土は黒褐色細粒砂質シルトで、瓦器碗が出土した。

SK562 直径0.5m、深さ0.1mの円形の土壌で、埋土は炭を含む黒色細粒砂質シルトである。

SK563 東西長1.1m、南北長1.9m、深さ0.4mの方形の土壌である。埋土は暗オリーブ褐～暗灰黄色中・細粒砂質シルトで、瓦器碗、瓦質土器鍋135が出土した。135は瓦質土器鍋で、口径25.1cm、高さ8.5cm以上、口縁部は外反しながら立ち上がり、口縁端部は平坦面をなす。口縁部はヨコナデ、口縁部下の外面はユビオサエ・ナデ、内面はヨコハケ調整している。13世紀後半に位置づけられる。

SK564 東西長0.6m、南北長0.5m以上、深さ0.1mの方形の土壌である。埋土は暗オリーブ褐～暗灰黄色細粒砂質シルトで、土師器皿、瓦器皿、壁土が出土した。

SK565 東西長0.9m、南北長1.8m、深さ0.8mの不整形な土壌で、埋土は暗灰黄色細粒砂質シルトである。曲物などの井戸側痕跡は確認できなかったが、井戸側を抜き取った土壌の可能性があり、土師器皿が出土した。

SK566 直径0.8m、深さ0.3mの円形の土壌で、底に備前焼大甕159を据えていた。土師器皿、瓦器碗が出土した。159は備前焼甕である。口頸部はやや外反し、口縁端部を折り曲げて玉縁状になる。底部は平底である。口径53.8cm、器高84.5cm、底径41.2cm、体部最大径79.4cmである。口縁部はヨコナデ調整する。体部内外面は板状工具による強いナデ調整を施す。外表面は灰色である。乗岡編年の

中世2期b(14世紀前半)である。

5)第8層出土の遺物(図43・66・70、図版23・25・26・28・30・31)

第8層からは土師器皿・羽釜・甕、東播磨須恵器鉢、瓦器碗162・163・165～167・皿160・161・164、瓦質土器足釜176・羽釜177・甕(亀山焼)、備前焼甕、常滑焼甕179、青磁碗168～171、白磁碗172～174・皿、平瓦、丸瓦、土鍾320・325、石硯330が出土した。また、古代の遺物では、土師器、須恵器杯、製塩土器のほか、緑釉陶器碗175、移動式竈178、軒平瓦297、丸瓦、平瓦が出土した。

162・163・165～167は瓦器碗である。

162は口径12.0cm、器高3.1cm、底径3.4cm、低平な高台を貼り付けている。内面

の暗文は渦巻状暗文である。和泉型Ⅳ-

2期(13世紀中・後半)にあたる。163は口径13.9cm、器高4.4cm、底径3.5cm、扁平な高台を貼り付けている。内面の暗文は平行線状暗文である。和泉型Ⅲ-2期(12世紀末～13世紀初頭)である。165は口径14.2cm、器高4.8cm、高台径4.0cmで、低い高台を貼り付ける。高台は断面三角形である。内底面の暗文は平行線状暗文であるが簡単なもので、和泉型Ⅲ-3期(13世紀前半)である。166は口径13.0cm、器高5.2cm、高台径2.6cm、口縁部内端の角に一条の沈線が巡る。断面三角形の高台を貼り付けている。内面の暗文は連結輪状暗文である。大和型Ⅲ-A新(12世紀末～13世紀前半)である。167は口径15.1cm、器高4.9cm、高台径4.5cm、低い高台を貼り付ける。底部内面に平行線状暗文を施す。和泉型Ⅲ-2期A類(12世紀末～13世紀初)に当る。

160・161・164は瓦器皿である。160は口径9.0cm、器高2.1cmで、口縁部を丸く収める。底部外面はユビオサエおよびユビナデ調整し、内面の暗文は平行線状暗文である。161は口径8.5cm、器高2.2cm、口縁部は丸く収める。外面は口縁部を除いてユビオサエおよびユビナデ調整する。内面の暗文は平行線状暗文である。164は口径9.2cm、器高2.0cmで、口縁部を丸く収める。底部から急に口縁部に向けて立ち上がり、段ができる。底部外面をユビオサエ後ナデ調整する。内面の暗文は輪状文で、底部に平行線状暗文を施す。これらの瓦器皿は和泉型Ⅲ-1・2期(12世紀後半～13世紀初頭)に相当する。

176は瓦質土器三足釜である。口径18.0cm、胴部最大径23.5cm、口縁部は内傾しながら立ち上がり、口縁端部を丸く収める。鈎を上向きに貼り付け、そこに脚を貼り付ける。丸みのある体部で、口縁部から鈎はヨコナデ、体部外面はナデ、内面は細かいヨコハケで調整する。外面に煤が付着する。13世

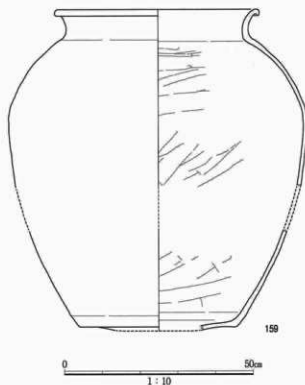


図42 SK566出土土器

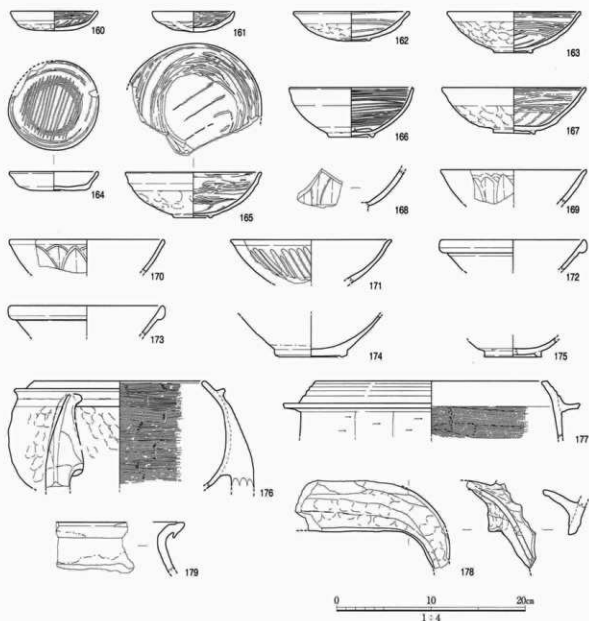


図43 第8層出土土器

紀後半であろう。177は瓦質土器羽釜である。口径24.4cm、鈎の最大径31.2cmで、口縁部は内傾しながら立ち上がり、口縁端部は平坦面をなす。頸部に3条の凹線を巡らす。鈎を貼り付けてヨコナデ、内面はヨコハケ、口縁部は内外面ともヨコナデ、外面は鈎より下はヘラケズリ調整する。内外面に煤が付着する。14世紀代であろう[森島康雄2001]。179は常滑焼甕である。口縁部は口縁部帯が2cmで、下方に垂下している。上方への拡張はまだ弱い。中野編年の常滑10・5型式(13世紀第2四半期)に当る。

168～171は龍泉窯系青磁碗である。168～170は鎚連弁文で、オリーブ灰色の釉が掛かる。山本分類の碗Ⅱ類(E期、13世紀初頭～前半)である。171は片連弁文で、復元口径16.7cm、オリーブ灰黄色の釉が掛かる。山本分類の碗Ⅰ類(C期、12世紀前半)にあたる。172～174は白磁碗である。172・173の口縁部は玉縁である。灰白色の釉が掛かる。174は底径6.5cm、高台と皿付は露胎で、それ以外は灰白色の釉が掛かる。これら白磁碗は山本分類の白磁碗Ⅳ類(C期、12世紀前半)に相当する。

175は緑釉陶器碗である。高台径5.9cm、断面台形の高台を貼り付ける。体部の内外面をヘラミガキし、高台や内外全面にオリブ黄色の釉を施す。胎土は灰白色で、2mm以下の長石を含み、硬質の焼成である。9世紀前半・中頃、京都近郊産と思われる。178は移動式竈である。焚口で、付底系の竈である。底は貼り付け、ヨコナデ調整する。底下部には煤が付着している。8世紀に属する。

6) 第6層基底面の遺構と遺物

第6層基底面で、中世以降の遺構を検出した。井戸、土壌、池状遺構がある。

i) 井戸(図44・45・47)

SE581 SK584の底で検出した井戸で、井戸側の最下段を確認した。直径54~62cm、高さ40cm以上の円形桶側の内に直径48~52cmの曲物が残っていた。曲物内埋土から土師器皿187、丸瓦などが出土した。187は土師器皿で、灯明皿として使用していた。口径11.0cm、器高1.5cm、底径7.1cmである。口縁部はヨコナデ、底部の内面はナデ、底部の外表面はユビオサエのちナデ調整している。にぶい黄橙色である。14世紀頃と考えられる。

SE582 SK584の底で検出した井戸である。最下段で、直径約44cm、高さ30cm以上の曲物が残っていた。曲物内埋土から青磁碗、瓦器碗、東播系須恵器鉢などが出土した。

SE585 上部は削平されているが、直径1.2m、深さ0.5mの井戸で、井戸側として曲物を用いる。曲物は径53cm、高さ約55cm分が残存していた。常滑焼堯の破片が出土した。

SE586 上部は削平されているが、直径0.42~0.47m、深さ0.40mの円形な掘形に井戸側として曲物を使用した井戸である。曲物の痕跡は径30cm、高さ約40cm分確認できる。

ii) 土壌(図44・45・47・66、図版27)

SK584 東西長4.8m、南北長3.5m、深さ1.4mの不整形な土壌で、埋土は黒褐色細粒砂質シルトである。SE581・582やSD601a・bを切っており、SE581・582の井戸側を抜き取った、抜き取り穴が複合している可能性が高い。平面的に明確に分けられなかったので、一括している。瓦器碗のほか、古代の土師器、須恵器杯、製塩土器188、軒丸瓦288などが出土した。188は製塩土器である。口径約17cm、器形は深鉢形である。口縁部はゆるやかに外反し、口縁部端部は平坦面をなす。体部外面はユビオサエ、内面はヨコナデで平滑にする。外面には粘土紐接合痕が見られる。積山分類4aに当たり、淡路・播磨産で、8世紀末に位置づけられる。

iii) その他の遺構(図44・46・47・66・70、図版5・25・27・31)

SX580 東西長6.0m、南北長5.1m、深さ0.5mの楕円形の池状遺構である。埋土はオリブ褐色細粒砂質シルト~黒褐色粘土質シルトである。埋没後、6h層が上部を覆っていた。SK550の東部を切る。出土遺物は、ほとんどが古代・中世のものであるが、中国産青花碗の細片が1点出土した。細片のため図化できず、時期も確定できないが、豊臣期のものであろう。この遺構は、豊臣期の大規模な土地造成に関わる遺構である可能性がある。

SX580は中世の地層やSD601a・bなどを壊しており、古代・中世の遺物が多数出土した。古代では土師器杯A・杯B・皿A・皿B180・碗・鉢185・高杯・甕・羽釜・竈、製塩土器181、須恵器杯H・

Y-44,870

Y-44,860

Y-44,850

Y-44,840

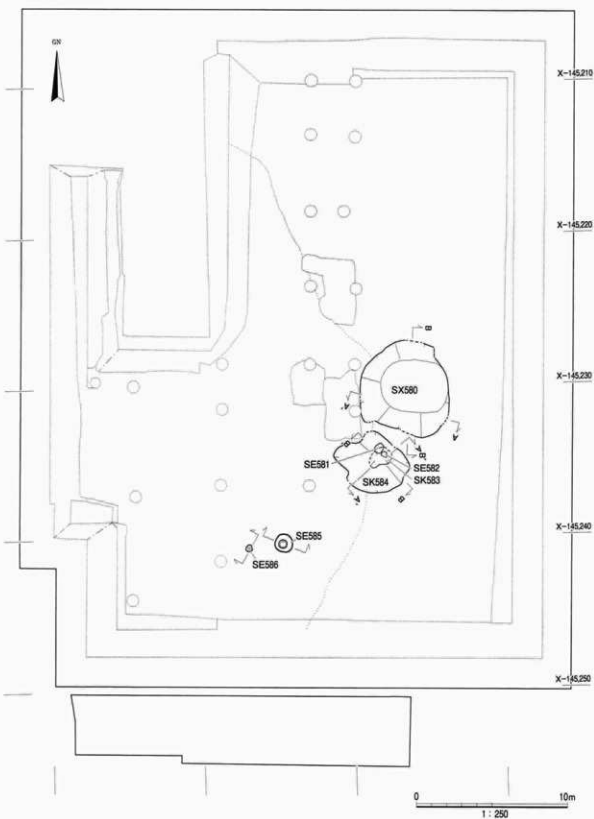


图44 第6層基底面遺構平面圖

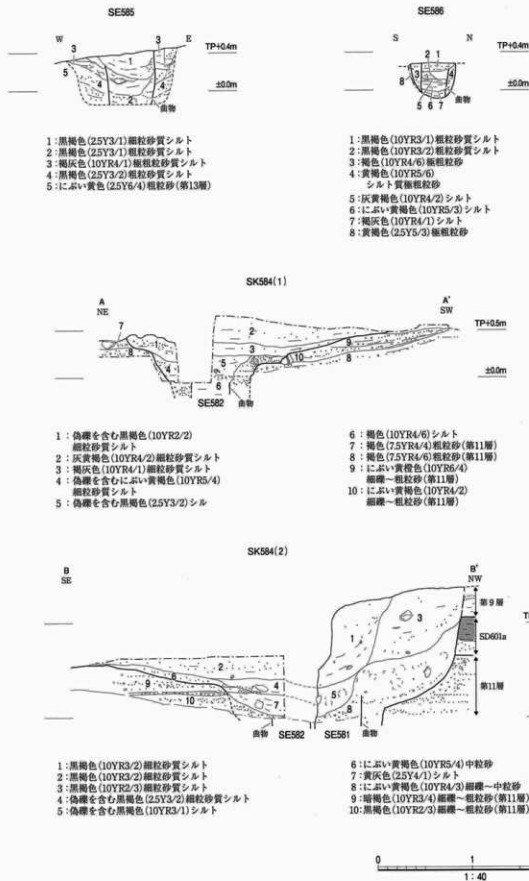


図45 第6層基底面遺構断面図

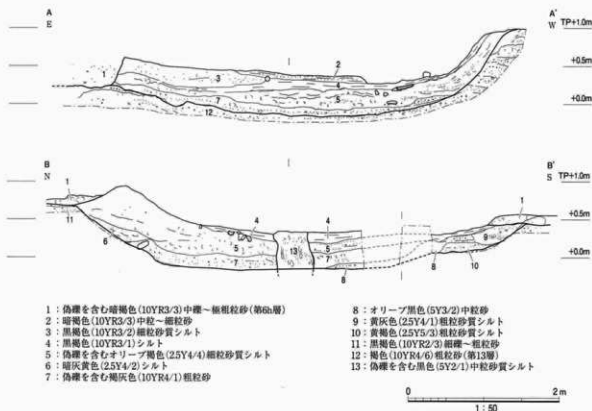


図46 SX580断面図

杯A・杯B・杯B蓋・杯G蓋・杯G身・鉢・壺E・壺L・把手付蓋・甕、軒丸瓦289、丸瓦、平瓦、埴が出土した。また、中世では土師器皿、東播系須恵器鉢(森田編年第二期～第2段階、12世紀末～13世紀初)、瓦器碗・皿、瓦質土器羽釜183・火鉢186・鉢・足釜・鍋・甕、常滑焼甕、備前焼甕・播鉢(乗岡編年近世1期b、16世紀第4四半期)、青磁碗184、白磁碗182・皿(皿Ⅸ1類、F期・13世紀後半)、中国産緑釉盤、丸瓦、平瓦、管状土鉢329、滑石製石鉢332、錢貨342・354・356が出土した。

180は土師器皿Bである。口径26.3cm、器高2.7cm、底径22.0cm、低い高台がつく。口縁端部は内に巻き込む。底面に螺旋状暗文、側面に斜放射状暗文、外面側面は強いヨコナデ、底部はユビオサエ・ヘラケズリ・ナデ調整を施す。外底部に墨書がある。185は土師器鉢である。口径40.1cm、口縁部は「く」の字状に外反し、端部は厚い。口縁部から頸部まで強くヨコナデ調整している。肩部以下はユビオサエのちヘラケズリ、口縁部から頸部内面までヨコナデ調整、それ以下はナデ調整する。181は製塩土器である。口径約9cm、器高6.2cm以上、器形は円筒形で、口縁部はやや外反するが直立的で口縁端部はやや内湾する。型作りのため口縁端部は薄い。体部外面はユビオサエで整える。内面は粗い布の布目圧痕がある。積山分類6aで、北九州・西部瀬戸内産である。180・181・185は8世紀末に位置づけられる

183は瓦質土器羽釜である。復元口径19.0cm、胴最大径24.0cm、口縁部はやや内傾しながら立ち上がり、口縁端部は平坦な面をなす。頸部に浅い凹縁が3条走る。胴を貼り付けてヨコナデする。口縁部は内外ともヨコナデ、内面はヨコハケ、外面は胴より下はヘラケズリ調整する。体部の外面に煤が付着する。特に胴の下が顕著である。14世紀であろう。182は白磁碗で、口径12.6cm、明オリブ灰

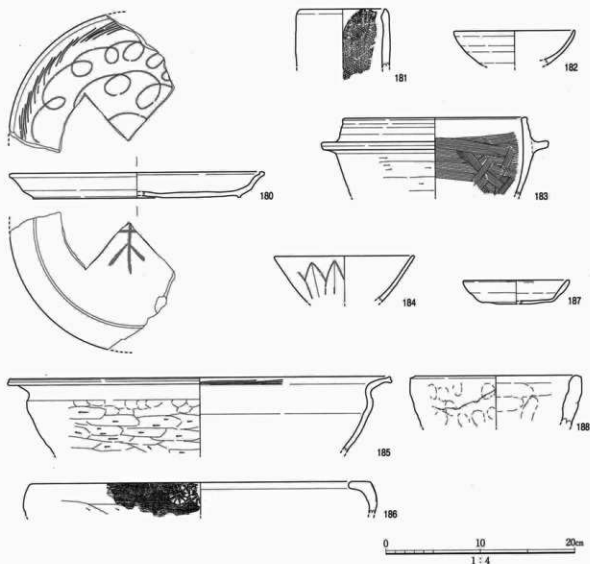


図47 第6層基底面遺構出土土器
SX580(180~186)、SE581(187)、SK584(188)

色の釉が掛かるが、口縁部の釉を掻き取っている。山本分類白磁碗Ⅸ類(F期、13世紀中～14世紀初頭)に当る。184は龍泉窯系青磁碗である。口径14.5cm、鎗連弁文で、オリーブ灰色の釉が掛かる。山本分類の青磁碗Ⅱ類(E期、13世紀初頭～前半)に当る。186は瓦質土器火鉢である。口径35.4cm、口縁部を内側に拡張しており平坦な面をなす。口縁部の外面に菊花文のスタンプを押す。口縁部は内外ともヨコナデ、外面はヘラミガキ調整する。内外面は灰色、断面は灰白色である。14世紀前半頃であろう。

7)小結

第9層中では、柱穴、溝、土壌、井戸、第9層上面では、柱穴、溝、土壌、井戸、第8層上面では柱穴、溝、土壌、貝土壌、埋甕遺構、井戸などを検出した。いずれの面でも、柱穴が多数存在し、掘立柱建物が存在したことは間違いないが、建物の復元までには至らなかった。

出土遺物は中国産陶磁器を除けば、一部14世紀後半～末があるものの、ほとんどは12世紀末から14世前半に位置づけられ、遺構もその時期に収まるものとみられる。この年代幅を第9層中、第9層上

面、第8層上面の個々の遺構に当てはめるのはむずかしいが、各層の遺構のうち、検出面・時期が確実な遺構を選ぶと、第9層中ではSE415、第9層上面はSE507・510、第8層上面はSK563・550となる。これらの遺構から出土する遺物の年代は、SE415は12世紀末～13世紀前半、SE507は13世紀後半、SE510は13世紀中～後葉、SK563は13世紀後半、SK550下層は14世紀前半、SK550上層上部は14世紀末～15世紀初頭頃である。これらを手掛かりに推定すれば、第9層中遺構が12世紀末～13世紀前半、第9層上面遺構が13世紀中～後葉、第8層上面遺構が13世紀後半～14世紀前半の年代を与えることができ、一部、SK550上層上部が14世紀末～15世紀初頭頃になる。

また、第6層基底面で検出した遺構のうち、井戸についてはどの層の上面遺構に相当するかは断定できなかったが、SK584については第8層上面と推定される。また、池状遺構SX580も第8層上面と推定されるが、出土遺物に1点ではあるが中国産青花碗があり、豊臣前期以降の土地造成に際して掘削された遺構である可能性がある。

第4節 豊臣期の遺構と遺物

豊臣期の遺構は、この地域全体の造成工事に関連する遺構とこの盛土・整地土の上に構築された柱穴・土塹などの遺構とに大別される。前者を豊臣期Ⅰ段階、後者を豊臣期Ⅱ段階の遺構群として報告する。

Ⅰ段階の遺構には、造成計画の基軸となる土手状遺構、砂で盛土を行うための枠(以下、「盛土区画」と呼ぶ)があり、盛土区画は礎石列・柱(跡)・杭(跡)・板(痕跡)・粘土枠などから構成される。このうち遺構として明確に認識できるのは、礎石列と粘土枠である。これまでほとんど知られていない事例であるため、はじめに全体的な状況、次に個々の遺構の記載を行う。

1) 豊臣期Ⅰ段階の遺構

i) 盛土以前の状況(図48)

調査地で確認された大規模な造成は、①低地を埋め立てる整地、②全体を嵩上げするための盛土造成の2段階からなる。①は調査区東部に広がる第6h層の分布で全体の状況が把握できる。

第6h層堆積直前の調査区東部は低地となっていた。第6h層下面の標高は、調査区北壁付近では、TP+0.2m、東壁中央付近ではTP+0.1m、東南部ではTP-0.4m以下であり、低地は東南部に向けてさらに深くなっている。中央部以西の造成以前(第8層上面)の標高は北側でTP+1.4m、中央付近ではTP+1.7mであり、微高地と低地の比高は1.2m以上あった。この低地は本来の自然地形がどこまで反映されているか、不明であるが、調査区中央北部の東北辺は開削されており、かなり人の手が加わっている。

低地は初め、偽礫を多量に含む第6h層で埋められ、その後、河成の砂礫層である第6g層が最大厚80cm堆積した。その結果、東壁付近では盛土以前の高さはTP+0.7~0.8mとなったが、それでも中央付近では微高地と低地では約1mの比高があった。これが土手状遺構SX301が構築される直前の状況である。

ii) 盛土の構造と過程(原色図版5、図版8~10))

SX301の方向は大川の流路とほぼ並行する。また、その延長は当時浜堤があり、方向

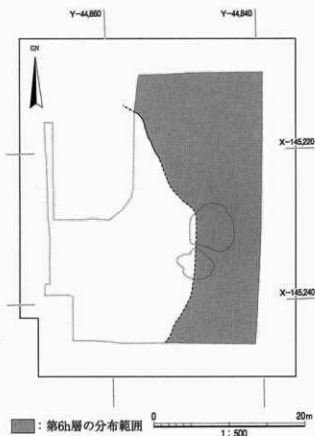
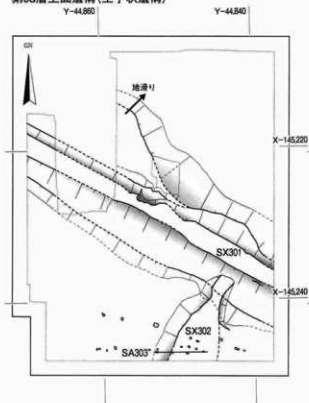
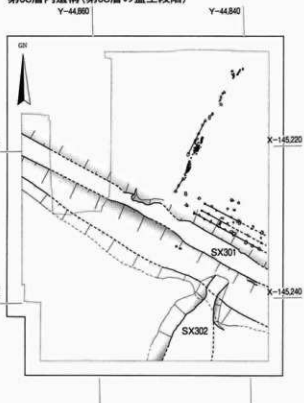


図48 第6h層の分布範囲

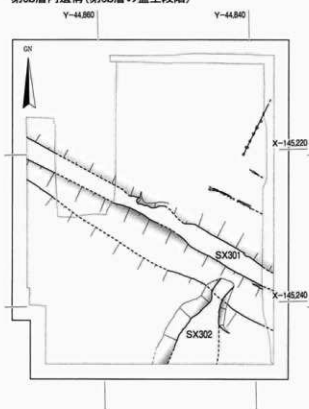
第6d層上面遺構(土手状遺構)



第6c層内遺構(第6c層の盛土段階)



第6b層内遺構(第6b層の盛土段階)



第6a層内遺構(第6a層の盛土段階)



0 20m
1 : 500

図49 盛土の工程

の選定にあたっては、旧地形の高いところを意識的に選択した可能性が考えられる。SX301が築かれた後はこの軸を中心として、垂直方向となる北東および南西方向にSX301の高さまで最大3mの盛土が2～3段階に分けて計画的に積み上げられていた。盛土の主体は調査区西部・西南部では黒褐色細粒砂質シルト(泥)、それ以外では中～細粒砂(川砂)である。川砂で盛土を行う調査区東部では、細粒砂質シルトや中粒砂混りのシルトを固めて作った仕切り板(以下、「粘土枠」と呼ぶ)を検出し、この枠の内部に砂を充填させ、盛土を行う工法を確認した。とりわけ、盛土上部(第6a層)・中部(第6b層)に顕著に認められた。

この枠工法はSX301に対して垂直方向に、幅3～4m、長さ3～6mの長方形区画を作るもので、粘土枠は概ね厚さ3～5cm前後で、最も高いものでは約1.4mあった。礎石の上に立てた柱や杭に、板や格子状の材を釘で固定し、その骨格に粘土を貼り付ける例も見られた。砂の盛土の上面も細粒砂質シルト層で覆い、あたかも砂を直方体にバックして、土地全体を嵩上げしているような状況であった。OS86-22次調査などの地層調査記録では、その後も盛土には川砂を多く用い、最終的に細粒砂質シルト～粘土質シルトによって整地され、その上位に豊臣期の生活面が築かれていた。以下、個々の遺構の特徴について記載する。

iii) 土手状遺構(図10・12・14・49、原色図版4、図版7)

SX301 調査区を北西-南東方向(N60°W)に横断する土手状の盛土遺構で、長さ40m以上、上幅2.5m、下幅14.0m、高さ2.0～3.0mである。断面は等脚台形状を呈し、上端はほぼ平坦である。轍のような跡は確認できなかった。SX301は東・西壁・中央南北地層断面で観察されるように、概ね2段階にわたって形成されている。初めに約半分の大きさの土手を北側に設け、次にその南に付加している。調査区東壁付近では土手基底の標高はTP+0.7mであり、川砂を主体に約2.1m盛土していた。中央以西では土手基底の高さはTP+1.7mで、第8・9層が土手の土台となり、盛土はSX301以南の第8層以下が充てられた可能性が高い。SX301の北側は旧地形を活かし、概ねTP+1.6m前後の高さで、最大7.5m幅の平坦面を形成している。その北東面では全体に北東方向の地滑りが観察できた(図版6)。時期は第6b層の堆積直後であり、その要因には急勾配な加工面や、地震などの外圧が考えられる。

SX302 調査区東部でSX301の南側に取り付け、一段低い土手であり、長さ12.0m以上、最大上幅5.0m、最大下幅16.0m、高さ1.3mである。川砂を主体に最大1.5m盛土されていた。造成の大区画、あるいはSX301頂部への作業道の機能が考えられる。

南壁近くの上面で東西方向の礎石列SA303を検出した。4基の礎石を確認し、その柱間は約2mである。

iv) 盛土区画・粘土枠・礎石列ほか(図49～53、原色図版5、写真9、図版8～12)

第6a・b層では、礎石列・粘土枠・集石遺構などが確認された。以下では、粘土枠が明瞭に確認された場合に「盛土区画」と呼び、礎石列のみの場合は他の遺構の可能性もあることから、「礎石列」と表現する。粘土枠は後世の遺構によって破壊されているものも少なくなく、ここでは遺存状態の良いものの、特徴的なものを中心に記載する。

a. 第6c層内遺構(第6c層の盛土段階)

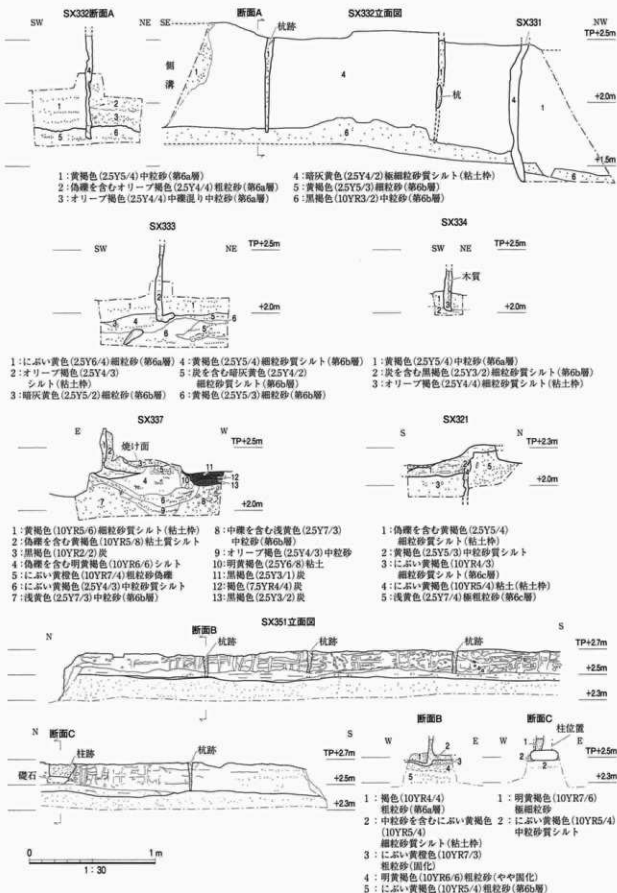


図50 粘土枠立面・断面図



①SX321 断面 (南東から)



⑤SX339 枕跡・釘検出状況 (南東から)



②SX333 断面 (南東から)



⑥SX351 検出状況 (西から)



③SX333 検出状況 (南西から)



⑦SX351 検出状況 (東から)



④SX335 断面 (南西から)



⑧SX351 断面 (南から)

写真9 粘土棒の状況

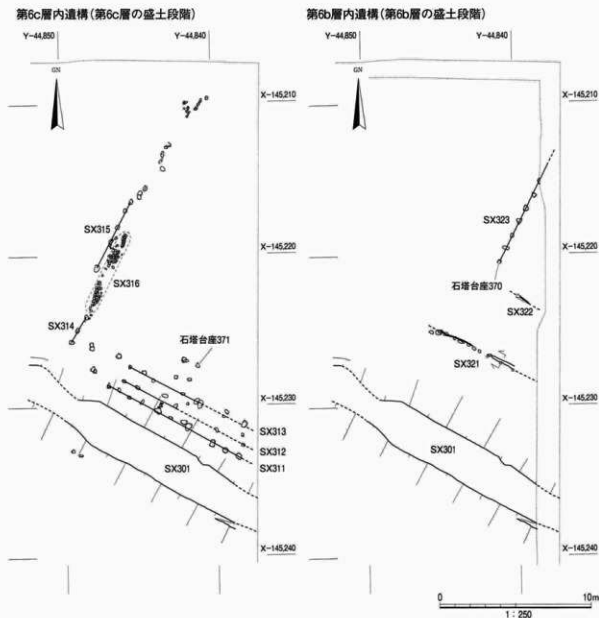


図51 第6b・c層内遺構平面図

調査区東部中央のSX301北側斜面では、約40個の礎石がSX301に平行あるいは直交するように検出された。全体で一つの構造物となる可能性もあるが、南北4mの間で、高低差が最大1.0mあり、ここでは東西方向の礎石列として取り扱う。なお、礎石の一つに石塔台座371が転用されていた(図版31)。

SX311 SX301に平行する礎石列で、長さ9.8m以上、調査区外に延びる。一辺30～50cmの礎石11個からなり、柱間は0.7～1.9mである。上面の高さはTP+2.0～2.1mである。

SX312 SX301に平行する礎石列で、長さ9.0m以上、調査区外に延びる。現状ではSX311より疎らで、一辺30cm前後の礎石5個からなり、柱間は0.9～3.0mである。上面の高さはTP+1.7～1.8mである。

SX313 SX301に平行する礎石列で、長さ8.6m以上、調査区外に延びる。一辺30～50cmの礎石8

個からなり、柱間は0.9～2.0mである。上面の高さはTP+1.4m前後である。

SX314 SX301に垂直方向の礎石列で、長さ2.0mである。一辺40cm前後の礎石からなり、柱間は約1.0mである。SX316とはほぼ軸が揃い、一連の遺構の可能性もある。

SX315 SX301に対して垂直方向の礎石列で、長さ5.0mである。一辺30～50cmの礎石5個からなり、柱間は0.6～2.0mである。

SX316 直径10～20cmの礫が帯状に集積した遺構で、長さ5.7m、幅0.7mである。北の軸線上にも疎らながら、礫群が存在し、一連の遺構の可能性はある。

b. 第6b層内遺構(第6b層の盛土段階)

SX321 SX301に平行する礎石列ならびにそれに付属する粘土枠で、礎石列は長さ5.8m、合計11個確認でき、東8個の柱間は0.4～0.6mと密に配していた(写真9①)。粘土枠は厚さ約5cm、高さ1.0mあり、SX301側に若干傾していた(図12、原色図版5)。SX321東部の粘土枠は、下位にある第6c層内の粘土枠と接合していた。

SX322 SX301に平行する粘土枠で、長さ0.5m分を検出した。SX321との距離は4.3mである。

SX323 SX301に対して垂直方向の礎石列で、長さ6.0m以上、調査区外に延びる。一辺30～50cmの礎石7個からなり、柱間は1.0m前後である。粘土枠は確認できなかった。南端の礎石に石塔台座が転用されていた。

c. 第6a層内遺構(第6a層の盛土段階)

調査区全体で最も多くの盛土区画が確認できた。SX301北側では、SX331～340、SX341～349の二群、南側では、SX351～357の一群が検出された。

SX331 SX301に対して垂直方向の粘土枠で、総長17.2m以上と最も長く、盛土区画全体の主要軸を構成したものと考えられる。付随する礎石は南部について、3つ確認できたのみである。粘土枠は厚さ7cm前後、高さは最大1.1mである。

SX332 SX301に平行し、SX331に取り付く粘土枠で、長さ1.9mまで確認した。高さは最大0.9mで、2箇所径6cmの切れ目があり、うち一箇所杭を検出した。東側では粘土枠は確認できないものの、盛土が明らかに異なり、本来の枠の幅は約2.5mであったことがわかる。

SX333 SX331に取り付く粘土枠で、長さ1.5mを確認した。高さは最大0.6mである。(写真9②) SX332と同様、枠の幅は、約2.5mである。2箇所杭跡となる幅4cmの切れ目を確認した。また、粘土枠の北面は平滑であるのに対し、南面は準大の粘土塊が押しつぶされている状況を確認できた(写真9③)。北側から川砂に圧着させながら、粘土枠を立てていった状況が推定できる。

SX334 SX331に取り付く粘土枠で、長さは3.7m、SX335に取り付く西半分の高さは0.6m、東半分は0.3mと段差があった。東部では直径10cmの柱跡を検出した(図版10)。縄のような圧痕も5条ほど確認でき、粘土の付着をより強固にする工夫であろうか。また、西部では断面観察の結果、粘土枠の内部に板の痕跡を確認した(図50)。板を挟んで、その両面から粘土質シルトを貼り、枠を作成した場合もあったと考えられる。

SX335 SX334に取り付く粘土枠で、長さは2.1m、最大高は0.8mである。SX334と作る区画では

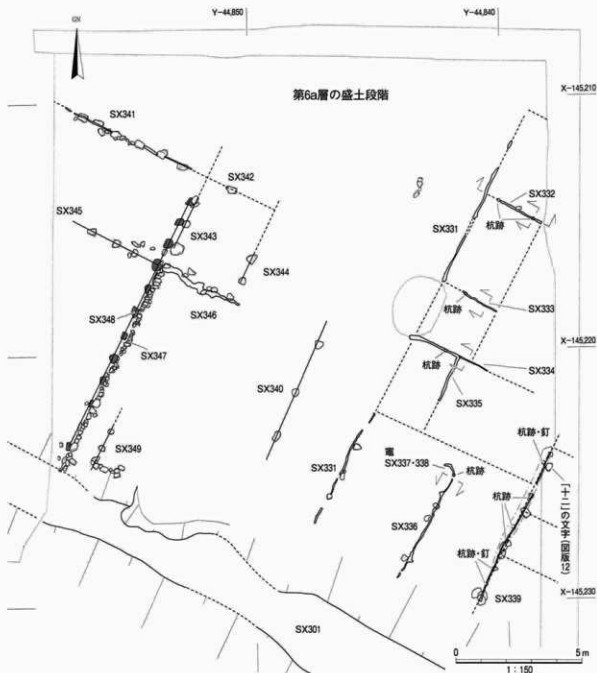


図52 第6a層内遺構平面図(1)

上面を厚さ10cmのシルトを貼り、川砂を密閉している状況が良く観察できた(写真9④、図版10)。

SX336 SX301に対して垂直方向の区画の一边で、3個の礎石と粘土枠からなる。長さは5.0mで、粘土枠の高さは概ね0.4mである。礎石は一辺40cm前後を用い、柱間は1.0m弱と1.9mである。

SX337・338 SX336北端部に作られた2連の竈である。現状でそれぞれ幅0.8m前後、高さ0.3mである。竈を作るために地下にシルトを20cmほど厚く貼っており、粘土枠を作る前に竈設置が計画されていたことがわかる(図50・52、図版9)。壁体はSX336の立ち上がりを利用しつつ、粘土を付加して補強されていた。

SX339 SX301に対して垂直方向の盛土区画の一边で、8個の礎石と粘土枠からなる。長さは6.7m

以上で、調査区外に延びる。礎石は一辺25～40cmで、柱間は0.5～1.5mである。粘土枠は厚さ4cm前後、高さは概ね0.3mである。4箇所で杭跡を検出し、それぞれで釘が一本出土した(写真9⑤)。

SX340 SX301に対して垂直方向の礎石列で、長さは4.1mである。一辺40cm前後3個の礎石からなり、柱間は1.9mと2.2mである。

SX341 SX301に平行する盛土区画の一辺で、6個の礎石と粘土枠からなる。長さは4.3m以上で、調査区外に延び

る。礎石は一辺30～40cmで、柱間は0.8～1.0mである。粘土枠は厚さ8cm、最大高は1.4mである。

SX342 礎石1個のみだが、SX341の東延長に位置し、盛土区画の一部と判断した。

SX343 SX301に対して垂直方向の礎石列で、長さは2.1mである。一辺30～50cmの3個の礎石からなり、柱間は1.0mと1.1mである。

SX344 SX301に対して垂直方向の礎石列で、長さは約1.0mである。一辺30cmと50cmの2個の礎石からなる。SX342・343と盛土区画を作るとすれば、東西長2.9m、南北長3.0mの規模が復元できる。

SX345 SX301に対して平行する礎石列で、長さは2.9mである。一辺25～40cmの礎石4個からなり、柱間は0.8～1.1mである。

SX346 SX301に対して平行する盛土区画で、4個の礎石と粘土枠からなる。長さは3.4mで、礎石は一辺20～30cmを用い、その間は0.8～1.2mである。SX345と異なり、粘土枠が目立つが、SX345の延長上に位置し、一連の造作かも知れない。

SX347・348 SX347とSX348は一連の造作と考えられるが、説明の便宜上分けて記載する。SX347はSX301に対して垂直の礎石列と石垣状の施設からなる(図版11)。長さ9.0mにわたり、一辺20cm前後の石を中心に粘質土を用い、3段前後積み上げ、西北側に面を揃えた石垣状の構造物をつくる。なかに一辺40cm前後、厚さ20～30cmの大型の石の礎石を2個配し、柱間は概ね2.0mである。SX343ともほぼ同じ軸上にあり、一連の造作かもしれない。SX348はSX347に西側で接して、0.2～0.3m深く検出された礎石列で、長さは10.9mである。礎石間は南端が2.0mである以外は、この半分の1m弱である。SX347の2個の礎石とも対となる位置にも配され、一体の構造物であることは明白であるが、どのような上部構造となるのか良く分からない。平行する礎石列が見られないことから、

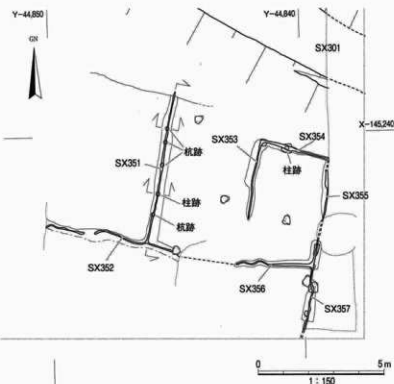


図53 第6a層内遺構平面図(2)

建物ではなく、盛土区画と判断した。他の盛土区画とは異なる堅牢な基礎であり、東に9.8m離れて平行するSX331同様、盛土区画の基本軸であったと考えられる。

SX349 SX347に平行する礎石列で、3個の礎石を検出した。長さは1.3m、礎石間は、0.5mと0.8mである。東側に径20cm前後の石を10数個を用い、「コ」の字形に配する石列を検出した。

SX351 調査区東南部で検出した盛土区画で、粘土枠と礎石1個からなる。主軸の方向がSX301に対して垂直でなく、北でやや西に振るのは、下位にある土手状遺構SX302に影響されたものと考えられる。粘土枠は厚さ3cm、長さ6.1mで、高さは概ね40cm前後である(写真9⑤)。粘土枠の東面は平滑であるが、西面は枝状の圧痕が顕著である(図50、写真9⑥・⑦、図版10)。圧痕は幅1~3cm、深さ1cm前後で、その間隔は垂直方向で5~10cm、水平方向では3~5cmである。粘土枠には、柱跡(礎石配置)と杭跡となる切れ目が5箇所あり、杭跡では釘が出土した。こうした状況から枝を交差させた木舞を柱・杭で固定して基本的な枠組みを作り、粘土質シルトを東側から押し付けて、仕切りを作成した状況が復元できる。

SX352 SX351の南に取り付く盛土区画で、粘土枠と礎石1個からなる。粘土枠は厚さ3cm、現状の長さ5.2mで、高さは30~40cmである。西端では北側に傾き、杭跡が確認できた。

SX353~356 調査区で検出された最も遺存状態の良い盛土区画で、南北の長さ4.8m、東西幅3.0mである。粘土枠は厚さ3~5cm、高さ20~40cmである。SX354の西端、中ほど、SX355の南端の2箇所で礎石を検出した。

SX357 SX355の延長で検出した盛土区画で、粘土枠と礎石1個からなる。現状で長さは2.5m以上、調査区外に延びる。粘土枠は厚さ最大10cmで、高さは最大1.5mに及ぶ。ほかの粘土枠と比べて、非常に堅固であり、何らかの施設の枠として使われた可能性が高い。

2) 整地土・盛土出土の遺物

i) 第6h層出土の遺物(図54・68・70~72、表3、図版23・25・26・29~31)

第6h層は古代・中世の遺構や包含層を崩して造成した地層で、その時代の土器・瓦などの遺物を多量に含んでいる。地層の堆積年代の指標となる、最も新しい遺物としては、豊臣前期に位置づけられる軒丸瓦308があり、そのほかでは15・16世紀の時期とみられる花崗岩製石臼369がある。

そのほか古代~中世の遺物のうち、特記すべきものについて報告する。189は土師器皿Bである。口径25.3cm、器高3.8cm、底径22.3cm、低い高台がつく。底部内面の中央に螺旋暗文、これの外側に放射状暗文、側面に斜放射状暗文を施す。底部外面はヘラミガキ調整し、ヘラ記号がある。8世紀末に位置づけられる。190は製塩土器である。口径約10.8cm、器高8.1cm以上、形は深鉢(円錐)形である。口縁部はやや外反し、器厚は底に向かって薄くなる。体外外面はユビオサエ、内面はヨコナデして平滑であるが、粘土紐の凹凸が十分消されていない。外面には粘土の皸・ひび割れがある。積山分類4aの播磨産で、8世紀末に位置づけられる。191は緑釉陶器碗である。口径13.0cm、体内外面をヘラミガキし、全面にオリーブ灰色の釉を掛ける。胎土は灰白色で、密であり、硬質の焼成である。9世紀中頃、平安京近郊産であろう。194は黒色土器杯A類である。口縁部は欠損しているが、この近くは

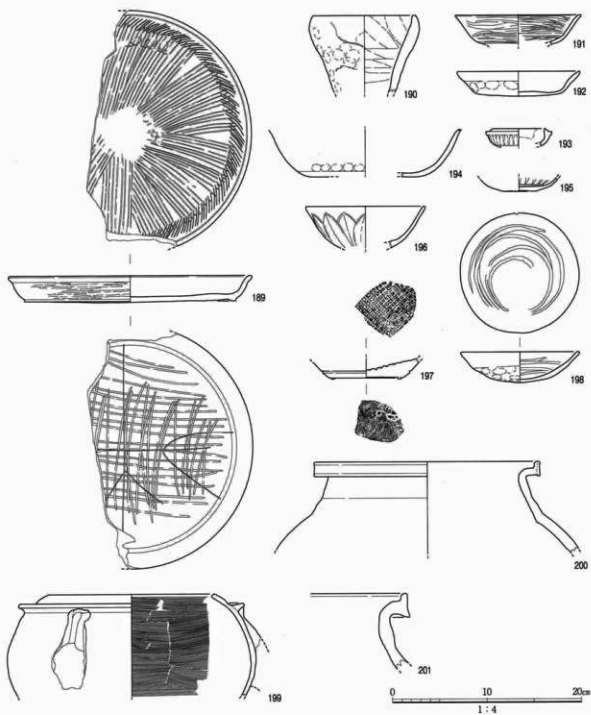


図54 第6h層出土土器

径約20cm、体部外面はヘラケズリのちナデ、底部はヘラケズリ、内面はヘラミガキ調整する。内面は黒褐色、外面は橙色、断面は灰色である。8世紀末～9世紀前半に位置づけられる。

192は土師器皿である。口径12.8cm、器高2.6cm、底径9.0cm、口縁端部は丸く収める。口縁部はヨコナデ、底部内面はナデ、底部から体部外面下半はユビオサエ調整する。にぶい橙色である。13世紀末～14世紀前半のものである。198は瓦器碗である。口径12.4cm、器高3.3cm、高台はない。底部内面の暗文は粗い渦巻き状暗文である。口縁部はヨコナデ、それ以外はユビオサエで整えている。和泉型

IV-3期(13世紀末～14世紀初)に当る。199は瓦質土器三足釜である。口径17.5cm、胴部最大径26.3cm、高さ10.8cm以上、口縁部は内傾しながら立ち上がり、端部を丸く収める。鐏を水平より上向きに貼り付けたあと、脚を付ける。丸味のある体部で、口縁部から鐏はヨコナデ、体部外面はナデ、内面は細かいヨコハケで調整する。外面に煤が付着する。13世紀前半頃であろう。200・201は常滑焼で、壺200と甕201である。壺200は口径23.4cm、口縁部は口縁部帯が1.5cmで、下方に垂下してなく、上方への拡張は弱い。中野編年常滑10・5型式(13世紀第2四半期)に当る。甕201の口縁部は口縁部帯が2.5cmで、下方に垂下している。上方への拡張はまだ弱い。中野編年常滑11・6a型式(13世紀第3四半期)に当る。197は瀬戸焼陶器卍皿である。底径約8cm、内面に格子目を入れて描目している。内面に灰白色の釉を掛けているが、底部外面は露胎で、底部外面に回転糸切り痕跡がある。14世紀前半に位置づけられる。195は中国産白磁皿である。底径3.2cm、灰白色の釉が掛かるが、底部は露胎である。内面に印花文がある。山本分類白磁皿Ⅶ類(E期、13世紀初頭～前半)に当る。196は青磁碗である。口径12.4cm、鎔連弁文で、明緑灰色の釉が掛かる。山本分類碗Ⅲ類(F期、13世紀中～14世紀初頭)にあたる。193は青白磁合子の身である。口径5.6cm、高さ1.85cm以上、明緑灰色の釉が掛かるが、受部と底部は露胎である。断面は灰白色で緻密である。13世紀前半頃と考えられる。

ii) 第6e～g層出土の遺物(図55・66・68・70、図版25・27・28・30・31)

SX301の盛土(第6e・f層)とその直下の第6g層から出土する遺物のほとんども、古代～中世の遺物であったが、一部で豊臣期の遺物が出土している。

207・208・211・214・215は瀬戸美濃焼陶器である。215は天目碗で、口径11.2cm、器高5.9cm、底径4.5cm、にぶい黄褐色の釉を施す。高台付近と高台部は露胎である。214は碗である。口径10.7cm、高さ4.9cm以上、浅黄色の釉を施すが、高台は露胎である。207・208は丸皿である。207は口径9.8cm、器高7.1cm、底径5.5cm、全面施釉するが、底部外面は露胎である。内面には4個のトチン跡が、底部外面にはワトチ痕がある。208は口径8.0cm、器高2.0cm、底径4.4cm、全面施釉する。内面には4個のトチン跡が、底部外面にはワトチ痕がある。211は折縁皿で、口径14.5cm、高さ3.5cm、底径7.2cm、内面の口縁部折縁面に櫛描波状文を巡らす。全面にオリブ色の釉を施すが、皿付けは露胎である。底部外面にワトチ痕がある。212は瓦質土器火鉢である。高さ7.5cm以上で、内面はナデ、外面はヘラミガキ調整し、脚が付く。216は瓦質土器甕である。口径35.0cmで、口縁部は外反し、端部は玉縁状に丸くなる。体部外面には横方向の粗い平行タキが、内面には細かいヨコハケ調整が施される。表面は灰色、断面は灰白色である。

そのほかの遺物は古代～中世に属し、このうち特記すべきものについて、報告する。210は須恵器壺である。頸部から肩部にかけての破片で、頸部径17.2cm、器高8cm以上、体部外面は頸部以下は平行タキのち横方向の板状工具による粗いヨコナデ、内面は肩部付近までヨコナデ、それ以下はヨコナデ調整しているが、同心円の当て具痕跡が残る。体部外面には灰オリブ色の自然釉が掛かる。軟質な焼成である。時期は決定しがたいが、7～8世紀のものであろう。202・204～206は土師器皿である。202は口径15.1cm、器高1.7cm、底径10.9cm、灰白色で、内外面をヨコナデ調整している。底が盛り上がり、口縁端部は丸く収める。灯明皿として使用されており、14世紀に位置づけられる。204

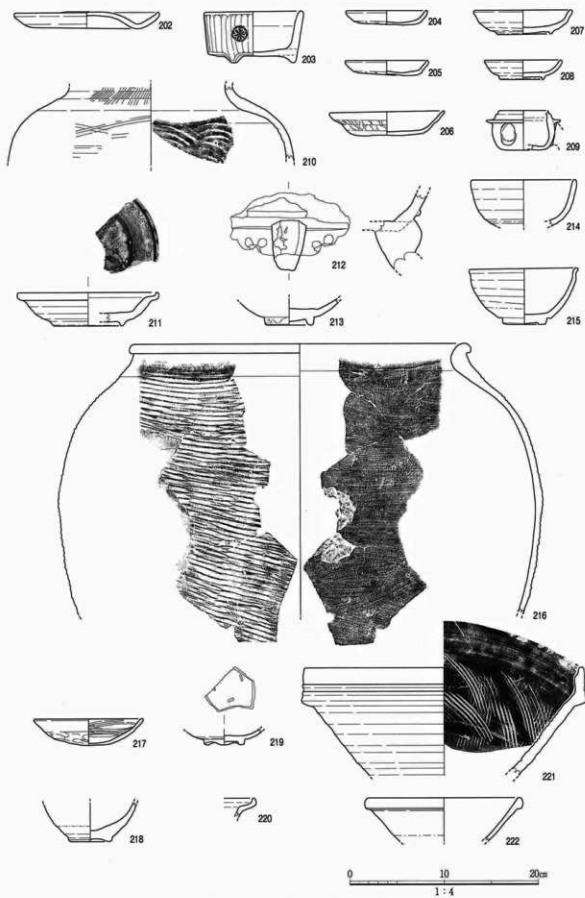


图55 第6e~g層・第6c層出土土器
第6e~g層(202~216)、第6c層(217~222)

は口径8.4cm、器高1.5cm、灰白色で、口縁部はヨコナデ、底部外面にかけてはユビオサエで整えており、口縁端部は丸く収める。灯明皿として使用している。205は口径8.5cm、器高1.6cmで、にぶい橙色である。口縁部をヨコナデ調整するか特に外面を強くヨコナデ調整するため、ユビオサエで整えた底部との境に段が生じている。口縁端部は丸く収める。206は径12.0cm、高さ2.6cm、底径4.0cm、口縁部は丸く収める。口縁部はヨコナデ、底部外面はユビオサエで整える。内外面とも、にぶい黄褐色である。204～206は14世紀のものであろう。209は小型の瓦質土器三足釜である。口径5.1cm、高さ4.2cm以上、底径3.1cmである。口縁部と鐏はヨコナデ、内面はナデ、鐏以下はナデ、底部はユビオサエのちナデ調整する。鐏以下に煤が多量に付着している。普通サイズの例を参考にすれば、13世紀前半～中頃であろう。203は瓦質土器香炉である。口径9.9cm、高さ5.4cm、底径8.6cm、口縁部と内面側面はヨコナデ、底部内面はナデ、体部外面は縦方向のヘラミガキ、底部外面はユビオサエのちナデ調整する。3脚を貼り付けて、周辺はヘラケズリ調整する。体部外面に菊花文様のスタンプを6個配する。14世紀頃と推定する。213は青磁碗である。底径4.7cm、オリーブ黄色の釉が掛かる。高台・畳付けは露胎である。山本分類Ⅱ類(E期、13世紀初頭～前半)に当る。

iii) 第6c層出土の遺物(図55・69・70、図版25・30・31)

第6c層の堆積年代を考える上で指標となる最も新しい遺物は肥前陶器碗218、備前焼播鉢221がある。218は器高4.7cm以上、底径4.1cmで、削り出し高台である。灰釉の灰オリーブ色の釉を施すが、体部下半と高台部は露胎である。221は備前焼播鉢で、口径29.2cm、高さ11.4cm以上、播目は斜め交差している。

そのほかの遺物は古代～中世に属し、このうち特記すべきものについて、以下に報告する。217は瓦器碗で、口径11.3cm、器高2.8cm、高台はない。内面に連結輪状暗文を施す。口縁部はヨコナデ、体部から底部外面はユビオサエのあとナデ調整する。和泉型Ⅳ-3期B類(13世紀後半～14世紀初頭)に当る。

219・220・222は中国産磁器である。222は白磁碗で、口径16cm、高さ4.6cm以上、口縁部は玉縁状になる。灰白色の釉が掛かるが、外面下半は露胎である。山本分類Ⅳ類(C期、12世紀前半)に相当する。219も白磁碗である。器高1.7cm以上、底径3.4cm、灰白色の釉を掛けているが、体部下半と高台部は露胎である。見込みに重ね焼きの胎土目状の痕跡がある。高台裏は3箇所以上の袈りが入る。森田分類D類[森田勉1982]で、14世紀後半以降である。220は青磁皿で、器高2cm以上、オリーブ灰色の釉を施す。断面は灰白色であり、緻密である。

iv) 第6b層出土の遺物(図56・68～70・72、表3、図版25・26・28～30)

第6b層の堆積年代を考える上で新しい遺物群としては、瀬戸美濃焼陶器223～226、肥前陶器鉢230・233、中国産磁器227・228・234・235、土師器239～241、備前焼232・236・237、瓦質土器238がある。

223～226は瀬戸美濃焼陶器である。天目碗223は鉄釉で、黒褐色の釉を施す。外面下部・高台部は露胎である。皿225は口径9.8cm、高さ2.4cm、底径5.3cm、灰釉でオリーブ黄色の釉を施す。畳付け・高台内は露胎である。高台内にワトチ痕がある。226は小型皿で、口径8.3cm、器高2.3cm、底径5.4cm、

口縁部に煤が付着しており、灯明皿として使用された。にぶい黄橙色の釉は高台皿付けにも及ぶ。断面は浅黄橙色で粗い。230は肥前陶器鉢である。口径18.7cm、器高3.4cm以上、オリーブ灰色の灰釉が掛かる。口縁部内面には無釉部がある。233は肥前陶器鉢である。口径11.2cm、高3.9cm以上で、褐色の釉を口縁端部とこれの内面に掛ける。外面は露胎であろうか。227・228・234・235は中国産磁器である。青花皿234は高さ2cm以上、底径3.7cmで、全面に灰白色の釉を施釉する。高台皿付に重ね焼きの痕跡がある。青花皿Cである。235は青花碗で、高さ3.8cm以上、明緑灰色の釉を施釉する。内外面に文様がある。228は白磁碗である。底部破片で、器高1.6cm以上、底径2.2cm、底部内面は蛇の目釉剥ぎ、高台皿付けは露胎である。227は白磁輪花皿で、口径14.8cm、高さ2.0cm以上である。花卉数は14枚あり、灰白色の釉で、貫入がある。

239～241は土師器である。239は大和型鍋で、口径33cm、器高9.9cm以上、口縁部は外反し小さく立ち上がる。口縁部内外はヨコナデ、体部外面・内面はユビオサエ後ナデ調整する。外面に煤が付着しており、特に口縁部に著しい。内面にも焦げた跡がある。240は羽釜である。口径22.2cm、高さ14.2cm以上で、口縁部は外反し端部を少しつまみあげて平坦面をつくる。鐙は体部最大径よりやや下に付ける。口縁部、鐙付近はヨコナデ、体部内面はユビオサエのち縦方向～横方向にナデを施す。体部外面はユビオサエのち横方向～斜め方向にナデ調整する。体部外面に煤が付着する。241は火鉢である。口径37.7cm、高さ17.2cm以上で、口縁部は内側に傾き、端面をなす。口縁部はヨコナデ、内面は横方向のハケ、外面は縦方向にハケ調整する。内面に煤が付着している。238は瓦質土器灯火具(瓦燈)である。口径19.7cm、器高7.4cm、底径14.0cm、灯火皿部は口径7.6cmである。全体をヘラミガキおよびヨコナデ調整で仕上げる。

232・236・237は備前焼である。皿232は口径9.8cm、高さ2cm、底径4.8cmで、底部に糸切り痕がある。口縁部と内外面はヨコナデ、底部外面はヘラケズリ調整する。236は搦鉢である。口径25.6cm、器高10.3cm、底径10.8cmで、口縁部は大きく立ち上がり、外側に3条の凹線が巡る。口縁部内面の直下に稜がある。桴目は斜め方向に交差し、左まわり(反時計回り)に刻んでいる。237は片口鉢である。口径16.0cm、器高6.6cm、底径6.4cmで、口縁部と内面はヨコナデ、体部外面はヘラケズリ調整する。

そのほか、第6b層からは古代～中世の遺物も多く出土している。特記すべき遺物を報告する。229は中国産白磁皿の底部の破片である。底径5.0cmで、灰色の釉が掛かるが、底部と体部外面下半は露胎である。底部裏面に墨書がある。山本分類皿Ⅹ類(F期、13世紀中～14世紀初頭)である。231は青磁碗である。口径16.0cm、高さ5.0cm以上で、口縁部は外反する。オリーブ灰色の釉が掛かる。山本分類碗Ⅲ類(C期、11世紀後半～12世紀前半)である。このほか、銭貨338・340・345・351・360・363・366・367が出土している。

v) 第6a層出土の遺物(図57・68～70・72、表3、図版29・30)

第6a層からは土師器皿257、瀬戸美濃焼陶器242～246、肥前陶器碗252・255、中国産青花碗247・青花皿248～250・白磁251・253・254、土師器焼塩小壺256・火鉢258・262・小型羽釜265・焙烙、瓦質土器羽釜261・灯火具(瓦燈)266、備前焼壺259・大平皿260・264・搦鉢・鉢・徳利、丹波焼搦鉢263、軒平瓦315など豊臣期の遺物のほか、弥生土器甕267、鬼瓦318、管状土鉢328、銭貨341・346・

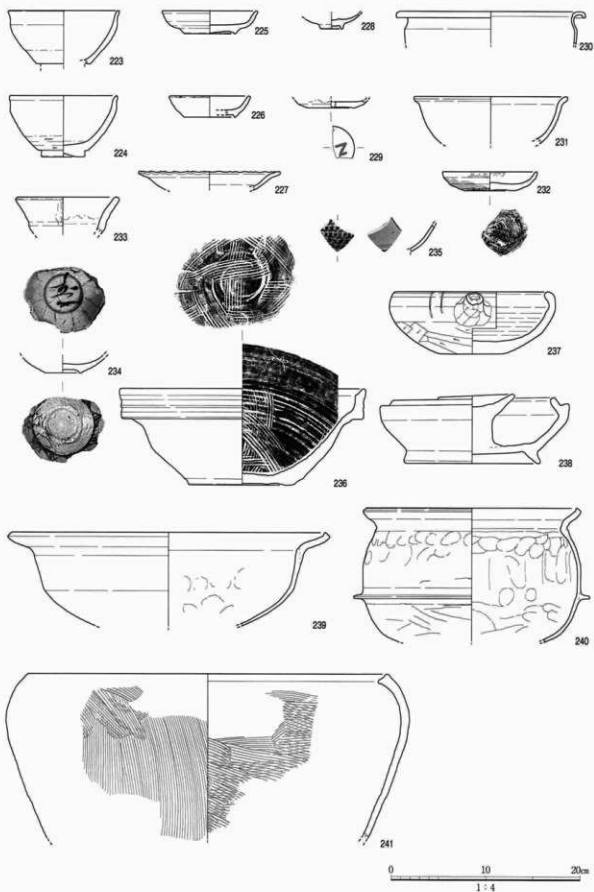


圖56 第6b層出土土器

349・350・355・359・364が出土した。

242～246は瀬戸美濃焼陶器である。242は小型の天目碗である。口径7.4cm、高さ4.1cm、底径2.4cm、削り出し高台で、褐色の釉を施す。外面下半と高台部は露胎である。243・246は丸皿である。243は口径9.7cm、高さ2.4cm、底径5.2cm、基筈底で、オリーブ黄色の釉を施す。見込みは内壳し、高台内は露胎である。高台内にワトナ痕がある。246は口径9.9cm、器高2.2cm、底径4.8cm、オリーブ黄色の釉を掛ける。見込みは釉剥ぎし、高台は露胎である。高台の内面に墨書「大一 源三 大一」がある。244は折縁皿である。口径10.6cm、高さ2.7cm、底径5.8cmで、浅黄色の釉を施す。畳付けは露胎で、高台内にワトナ痕がある。245は鉄釉の端反皿である。口径9.6cm、高さ2.3cm、底径5.6cmで、褐色の釉を掛け、高台は露胎である。底部裏面に糸切り痕、見込みには胎土目が残る。

252は肥前陶器碗である。高さ3.1cm以上、底径4.2cm、高台は三日月高台で、黒褐色の釉(鉄釉)を掛けるが、体部外面下半・高台は露胎である。255は肥前陶器碗で、口径11.2cm、高4.5cm以上、灰オリーブ色の釉を内外面に掛ける。碗下部と高台は露胎である。

247～251・253・254は中国産磁器である。247は青花碗である。口径11.3cm、器高5.4cm、底径4.3cmで、灰白色の釉を掛ける。畳付けと高台内は露胎である。粗製の青花碗である。248～250は青花皿である。248は口径9.1cm、高さ2cm、底径5.6cmで、灰白色の釉を掛ける。畳付けと高台内部は露胎で、青花b1群に属する。249は口径9.8cm、器高2.7cm、径2.6cmである。基筈底で、明緑灰色の釉を掛けるが、高台は露胎である。250は高さ1.4cm、底径5.8cmである。灰白～明オリーブ灰色の釉を施す。畳付けは釉剥ぎしている。高台内に銘があり、内面には草花、鳥の文様がある。251は白磁皿である。口径11.4cm、器高2.8cm、底径6.2cmで、全面に灰白色の釉を施すが、畳付け部分を釉剥ぎする。端反り皿で、森田分類白磁皿E-2b類(16世紀)である[森田勉1982]。253は白磁稜花皿である。口径12.8cm、高さ2.2cm以上である。花卉数8枚の輪花で、全面に灰白色の釉を施す。254は白磁端反皿で、口径10.4cm、器高3.1cm、底径3cmである。基筈底で、灰白色の釉を掛ける。高台部は露胎である。森田分類白磁皿E-3類(16世紀)である。

256～258・262・265は土師器である。256は焼塩壺で、口径3.1cm、高さ7.2cm、底径3.1cmである。表面が摩耗して調整が不明瞭である。内外面は暗灰黄色である。257は土師器皿で、口径25.1cm、高さ2.4cm、底径8.8cmである。口縁部は内外面はヨコナデ、底部は内面ナデ、外面はユビオサエのチナデ調整する。内面に煤が多量に付着している。258・262は火鉢である。258は口径21.4cm、高さ7.3cm、底径17.8cmで、口縁部はまっすぐ立ちあがり、広い平坦面をなす。口縁部はヨコナデ、内底面はナデ、体部の外面はナデ調整し、3脚を貼り付ける。262は口径24.7cm、高さ9.3cm、底径15.4cmで、口縁部は内側に折り曲げる。底部に脚を貼り付けるためのキザミメがあり、3脚が復元できる。口縁部はヨコナデ、体部外面と底部はヘラケズリ、内面をヨコハケののちナデ調整する。口縁部の内面に顕著に煤が付着している。265は小型の羽釜で、口径6.0cm、器高7.4cm、底径7.7cmである。口縁端部は平坦で、全体をヨコナデ調整で仕上げる。底部以外の外面には煤が付着し、内面は焦げている。261は瓦質土器羽釜である。口径22.2cm、鈎の最大径が36.5cmで、口縁部はまっすぐ立ちあがり平坦面をなす。鈎より上は太い凹線が2条巡る。口縁部と鈎の下まではヨコナデ、内面はヨコナデ、鈎の下は横方向に

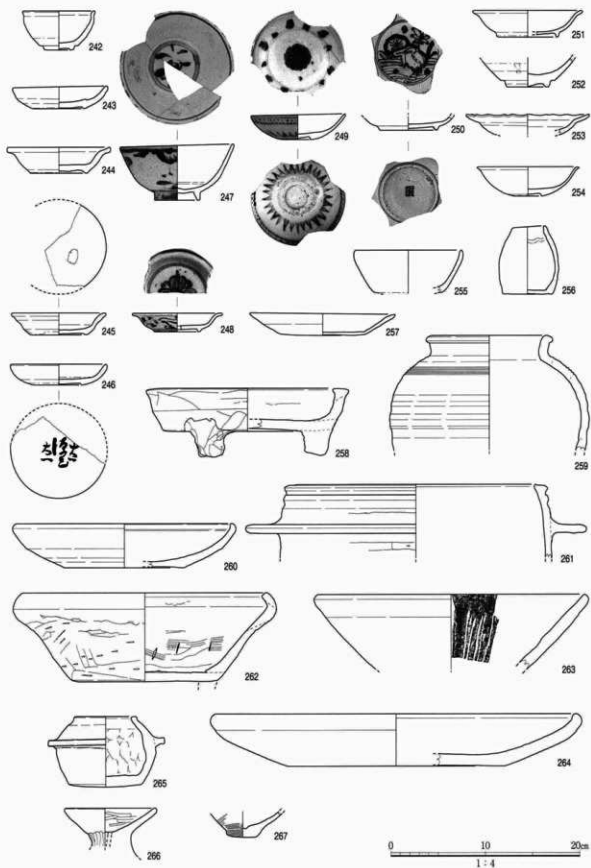


图57 第6a层出土土器

ヘラケズリ調整する。16世紀のものだろう。266は瓦質土器灯火具(瓦燈)である。高杯状受部の破片で、高さ5.1cm以上、口径9.3cm、受部中央に径3mmの孔がある。杯部内面はヘラミガキ、杯部外面はナデ、脚部外面はヘラミガキ調整している。杯部の内外面には多量の煤が付着している。

259・260は備前焼である。259は壺で、口径12.0cm、高さ12.2cm以上ある。短い頸部はほぼ直立し、口縁部は丸く肥厚する。肩部に4条の櫛描直線文が巡る。1mm以下の長石・石英・黒色粒を含む。260・264は大平皿である。260は口径22.8cm、高さ4.7cm、底径12.2cmで、内外面をヨコナデ、外面下部はヘラケズリを施す。口縁部と内面に自然釉が掛かり、にぶい赤褐色である。264は口径38.0cm、高さ5.5cmで、口縁部と内面に灰オリブ色の自然釉が掛かる。外面は赤褐色である。263は丹波焼播鉢である。

口径28.2cmで、播目は1本引きである。外面は暗赤褐色である。

このほか、弥生土器甕267が出土した。底径3.2cm、高さ2.7cm以上で、外面はタタキ、内面はクモの巣状にナデ調整する。外面面にはにぶい黄橙色で、弥生時代末(庄内式)である。

vi) 第6a'層出土の遺物(図58、図版26)

第6a'層からは古代～中世遺物のほか、土師器皿、瀬戸美濃焼陶器天目碗・丸皿・折縁ソギ皿268・瓶、肥前陶器碗・皿270・徳利、中国産青花皿・青花碗・白磁、土師器羽釜・甕・鉢、瓦質土器甕、備前焼花瓶269・皿・播鉢、丹波焼播鉢が出土した。

268は瀬戸美濃焼陶器折縁ソギ皿である。口径11.4cm、高さ2.5cm、底径5.7cmで、浅黄色の釉を施す。畳付けと見込みは露胎である。見込みは輪状に釉剥ぎし、折縁にソギを入れる。270は肥前陶器皿である。口径20.4cm、高さ4.2cm以上で、破片部分には全面に薬灰釉(灰白色)を施釉する。269は備前焼花瓶である。掛花生として口縁部から1.8cm下の位置に孔がある。口径7.1cm、高さ15.5cm、底径7cmで、内外面をヨコナデ、底部外面は横方向のヘラケズリ、底部の裏はヘラ切りのちナデ調整する。底部表面に2本のヘラ記号と墨書「上」がある。外・内面は褐灰色である。

3) 豊臣期第Ⅱ段階の遺構と遺物

調査開始面は調査区東部の三分の一が、第6a層のほぼ上面、それ以外は第6a'層中であり、検出面が異なるが、ここでは本来の遺構面である第6a'層上面遺構として一括して報告する。第6a'層上面遺構には、柱穴、穴蔵、土蔵などがある。

遺構は調査区のなかでは地域的なまとまりがあり、i)北部、ii)中央部、iii)西部、iv)東南部、v)南区の地域ごとに報告する。また、遺構からは古代～中世の遺物が混在して出土したが、遺構の時期

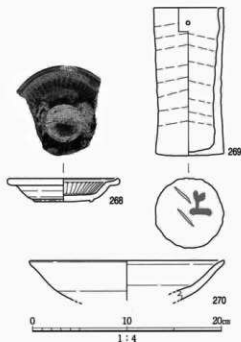


図58 第6a'層出土土器

の指標となる16世紀以後の遺物に限定して報告する。

i) 北部(図59・60、図版12)

a. 櫓

SA201 南北方向の礎石列である。現存する礎石は1個で、礎石採取り穴を6基検出した。礎石を据え付けるための溝を掘り、さらに穴を掘って礎石を据え付ける。溝は現状では、幅1.1m、長さ9.7m以上、深さ約0.3mである。方向は北で東に26°振る。第6a層中で確認した遺構の方向と違い、第6a層以下の盛土造成に関連する遺構の方向と同じで、造成に関連する遺構の可能性もある。溝内から施釉陶器細片が出土した。また、礎石採取り穴から中国産青花碗・皿、平瓦が出土した。

SA202 南北方向の礎石列で、現存する礎石は5個である。柱間は1.0mである。方向は第6層の盛土造成に関連する遺構の方向と同じなので、造成に関連する遺構の可能性もある。

SA203 東西方向の礎石列で、礎石を5個検出した。柱間が2.2m～3.9mである。方向はほぼ正方形で、櫓あるいは建物の一部の可能性がある。上位層で確認している豊臣期の礎石建物SB601[大文協2003、図77]と同様な方向を示す。

b. 土壇

SK204 東西長1.3m、南北長1.7m、深さ0.3mの楕円形土壇で、埋土は焼土・炭混り土である。豊臣後期に属する瀬戸美濃焼陶器志野向付、肥前陶器碗・鉄絵鉢のほか、中国産白磁・施釉陶器、備前焼浅鉢、丹波焼播鉢、軒丸瓦、丸瓦が出土した。

SK205 東西長0.7m、南北長0.6m、深さ0.4mの楕円形土壇で、埋土は炭を含む明黄褐色粘質土である。

ii) 中央部(図59～62、図版13・15・17)

a. 柱穴

SP216 直径0.4m、深さ0.2mの円形の柱穴で、埋土は褐色中粒砂である。

SP228～233 SP228は直径0.3m、深さ0.2mの円形の柱穴で、埋土は偽礫を含む灰黄褐～にぶい黄褐色中粒砂である。SP229は東西長0.3m、南北長0.5m、深さ0.2mの楕円形の柱穴で、底に礎板石を置く。埋土は褐色中粒砂である。SP230は直径0.3m、深さ0.1mの円形の柱穴で、埋土は偽礫を含むにぶい黄褐色粗粒砂である。SP231は東西長0.3m、南北長0.3m、深さ0.1mの楕円形の柱穴で、埋土は炭・偽礫を含む褐～にぶい黄褐色粗粒砂である。SP232は東西長0.4m、南北長0.3m、深さ0.2mの楕円形の柱穴で、埋土は偽礫を含む褐～にぶい黄褐色粗粒砂である。SP233は東西長0.3m、南北長0.2m、深さ0.1mの楕円形の柱穴で、埋土は暗褐～褐色中粒砂質シルトである。以上の柱穴は直径0.3m、深さ0.2mの柱穴で、一連の遺構とみると、櫓・塀が考えられる。柱間は1.4～1.5mで、方向は東で南に5～6°振る。SK222～224に関係する遺構の可能性もある。

b. 土壇

SK206 東西長0.8m、南北長0.7m、深さ0.3mの隅丸方形の土壇で、埋土に中礫が多量に混入する。

SK207 東西長0.5m、南北長1.1m、深さ0.2mの楕円形の土壇で、埋土は礫を含む褐色極粗粒砂である。

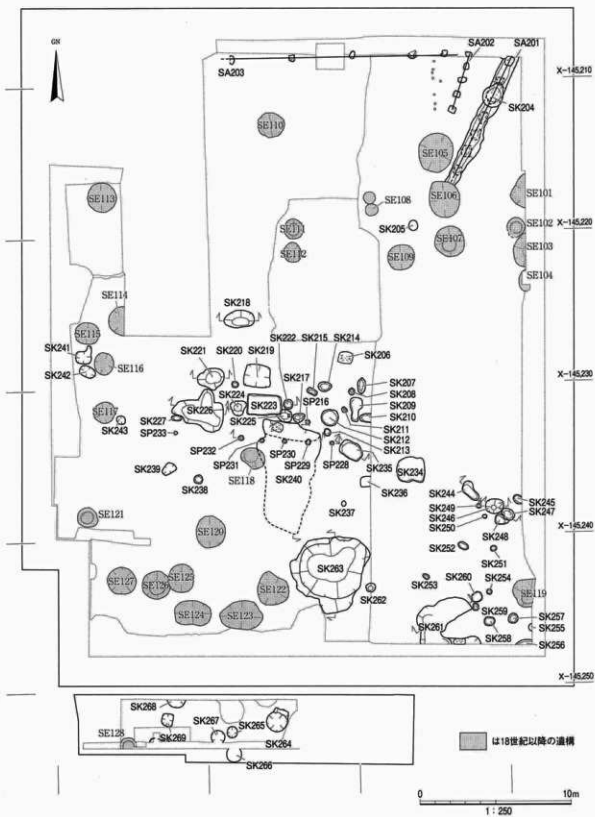


图59 第6a'层上面遗构平面图

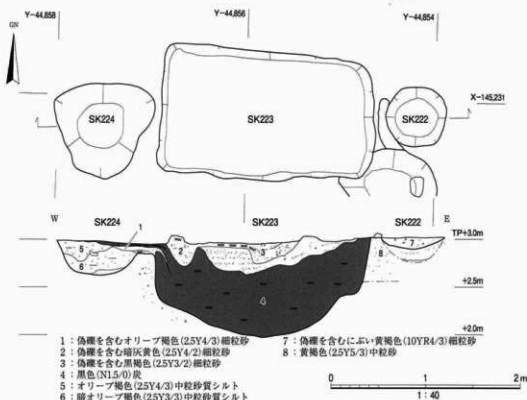
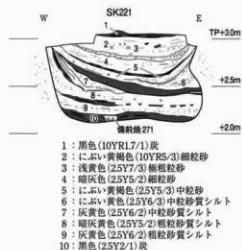


図60 第6a'層上面遺構平面図・断面図

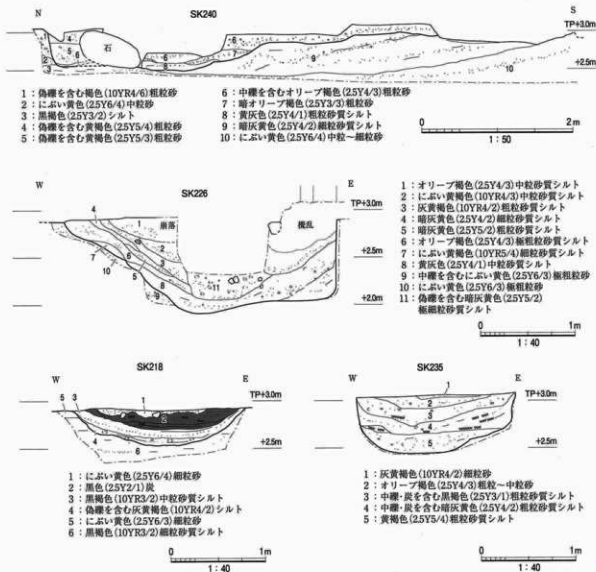


図61 第6a'層上面遺構断面図(1)

- SK208 直径0.4m、深さ0.2mの円形の土壌で、埋土は礫を含むにぶい黄褐色極粗粒砂である。
- SK209 東西長0.9m、南北長1.5m、深さ0.3mの楕円形の土壌で、埋土は礫を含む灰黄褐色極粗粒砂である。
- SK210 東西長0.8m以上、南北長0.6m、深さ0.3mの楕円形の土壌である。埋土は焼土含むにぶい黄褐色中粒砂で、土師皿と銭貨が出土した。
- SK211 東西長0.3m、南北長0.4m、深さ0.1mの楕円形の土壌である。
- SK212 直径1.1m、深さ0.1mの円形の土壌である。
- SK213 東西長0.3m、南北長0.4m、深さ0.1mの楕円形の土壌で、埋土は焼土を含む暗赤褐色極粗粒砂である。
- SK214 東西長0.8m、南北長0.6m、深さ0.3mの楕円形の土壌で、埋土は炭を含む黄褐色粗・中粒砂である。

SK215 東西長0.7m、南北長0.3m、深さ0.2mの長方形の土壌で、埋土はにぶい黄褐色中粒砂である。土師器皿が出土した。

SK217 東西長0.8m、南北長0.6m、深さ0.3mの楕円形の土壌で、埋土はオリブ褐色細粒砂である。

SK218 東西長1.9m、南北長0.9m、深さ0.6mの楕円形の土壌である。炭層、中粒砂質シルト層、細粒砂層が互層をなして堆積している。平瓦、丸瓦が出土した。

SK219 東西長1.2m、南北長1.1m、深さ0.7mの穴蔵である。埋土は、大礫を含むにぶい黄褐色中粒砂、オリブ褐色中粒砂、暗灰色中粒砂である。四面の壁とも下半部は石積、上半部は瓦積、瓦は丸瓦・平瓦が多いが、豊臣後期の軒丸瓦(左巻き三巴文)、軒平瓦(均整唐草文)も使用している。床面に礎石や柱穴はない。東西長1.7m、南北長1.7m、深さ0.7mの穴を掘り、その内に構築している。埋土から備前焼播鉢・壺、肥前陶器碗272・皿、土師器焼塩壺蓋、丸瓦、平瓦、銭貨、鉄釘が出土した。272は、高さ4.4cm以上、底径3.3cm、高台は削り出しである。灰オリブ色の釉(灰釉)を施す。体部外面下部と高台は露胎である。石組みの穴蔵は17世紀後半からみられるとされ[豆谷浩之2010]、徳川期の可能性がある。

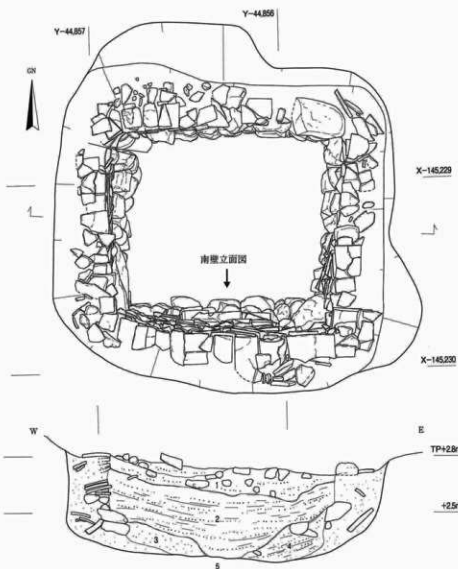
SK220 東西長0.5m、南北長0.4m、深さ0.2mの楕円形の土壌で、埋土は炭を多量に含む褐〜にぶい黄橙色細粒砂である。

SK221 東西長1.5m、南北長1.3m、深さ0.9mの不整形な土壌である。埋土は炭・砂・砂質シルトの互層が堆積する。土師器皿、瀬戸美濃焼陶器天目碗・丸皿、中国産白磁皿、土師器播鉢、瓦質土器甕、備前焼播鉢271が出土した。271は備前焼播鉢で、口径24cm、高さ10.6cm、底径8cmである。口縁部内面に煤が付着している。播目は斜めに交差する。

SK222~224 SK223は東西長2.3m、南北長1.4m、深さ1.0mの長方形の土壌である。埋土の上部は炭・焼土・偽礫を含む細粒砂、下部には約0.6mの厚さで細かく砕いた炭層が堆積していた。炭層のなかに銅が溶けた滓が少量混じっている。土師器皿、瀬戸美濃焼陶器天目碗、中国産施釉陶器壺・青花、土師器焙烙、備前焼播鉢、丸瓦、平瓦、銭貨、埴壁、銅滓が出土した。SK224はSK223の西側に接する位置にある土壌で、東西長1.0m、南北長0.8m、深さ0.3mである。埋土は炭・焼土を含む中粒砂質シルトである。瀬戸美濃焼陶器天目碗、肥前磁器碗、土師器焼塩壺、丸瓦が出土した。SK222はSK223の東側に接する位置にある土壌で、東西長0.6m、南北長0.6m、深さ0.3mである。埋土は炭・焼土・偽礫を含む細粒砂である。SK222~224は、位置関係や埋土に炭・焼土を多量に含むことが共通しており、SK223を中核とした一連の遺構であろう。

SK225 東西長0.5m、南北長0.3m、深さ0.2mの楕円形の土壌で、埋土はにぶい黄褐色極粗粒砂である。土師器皿、瀬戸美濃焼陶器天目碗、瓦質土器が出土した。

SK226 東西長3.4m、南北長2.4m、深さ0.9mの不整形な土壌である。複数の土壌が切り合っている可能性があるが、断面観察では確認できなかった。炭を含む極粗粒砂層、偽礫を含む極粗粒砂質シルト層、中粒砂質シルト層が累重する。瀬戸美濃焼陶器丸皿、土師器羽釜273、瓦質土器鉢が出土した。273は口径21.6cm、器高6.6cm以上で、口縁部は外反する。口縁部はヨコナデ、体部内面はナデ、鋳以下はヘラケズリ調整する。体部外面に煤が付着し、内面は焦げている。



- 1 : 大礫を含むにぶい黄褐色(10YR5/4)中粒砂
- 2 : 浅黄色(2.5Y7/4)とオリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂
- 3 : 暗灰黄色(2.5Y5/2)粗粒~中粒砂
- 4 : 黄褐色(2.5Y5/6)粗粒~中粒砂
- 5 : にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂(第6a層)

0 1m
1 : 20

図62 SK219平面図・断面図

SK227 東西長0.6m、南北長0.5m、深さ0.1mの楕円形の土壌である。

SK234 東西長1.8m、南北長1.7m、深さ0.2mの隅丸方形の土壌である。丸・平瓦の破片が多量に出土した。穴蔵の可能性はある。

SK235 東西長1.6m、南北長1.0m、深さ0.6mの隅丸方形の土壌である。埋土には炭が混じる。土師器皿、軒丸瓦、平瓦が出土した。

SK236 東西長0.7m以上、南北長0.7m、深さ0.2mの方形の土壌で、土師器皿、備前焼擂鉢、平瓦が出土した。

SK237 直径0.3m、深さ0.1mの円形の土壌である。

SK238 東西長0.6m、南北長0.5m、深さ0.1mの楕円形の土壌で、埋土は礫を含むオリブ褐色極粗粒砂である。

SK239 東西長0.9m、南北長0.9m、深さ0.2mの方形の土壌で、瀬戸美濃焼陶器天目碗、肥前陶器皿、備前焼擂鉢が出土した。

SK240 東西長4.0m、南北長7.2m、深さ0.3mの規模である。炭、偽礫・炭を含む中粒砂、偽礫を含む粗粒砂～粗粒砂質シルト層が累重する。なお、SK240を切るSE118から信楽焼四耳壺368が出土した。

iii) 西部(図59)

SK241 東西長1.3m、南北長1.1m、深さ0.4mの不整形な土壌で、埋土は暗灰黄～オリブ褐色中粒砂・中粒砂質シルトである。

SK242 東西長1.3m、南北長0.7m、深さ0.4mの楕円形の土壌で、埋土は炭を含む暗灰黄～黒褐色細粒砂質シルトである。青花皿が出土した。

SK243 東西長0.7m、南北長0.6m、深さ0.2mの楕円形の土壌である。

iv) 東南部(図59・63～65、図版14・16・26・29)

SK244 東西長1.4m、南北長0.7～1.0m、深さ0.6mの楕円形の土壌である。埋土は細粒砂質シルト、細粒砂、偽礫を含む中粒砂である。土師器皿、中国産青花皿、土師器甕・鉢、備前焼擂鉢、巻貝(サザエ)が出土した。

SK245 東西長0.6m以上、南北長0.5m、深さ0.3mの楕円形の土壌で、埋土はにぶい黄褐～灰黄褐色中粒砂である。

SK246 東西長1.1m、南北長1.0m、深さ1.1mの楕円形の土壌である。炭・焼土を含む細粒砂質シルト、偽礫を含む細粒砂、偽礫を含む中粒砂がレンズ状に堆積する。土師器皿・甕、備前焼擂鉢、軒丸瓦、平瓦、銭貨、とりべ(銅付着)、鋳造関係炉壁が出土した。

SK247 東西長0.8m、南北長0.6m、深さ0.5mの楕円形の土壌である。埋土は炭を含む細粒砂質シルト、偽礫を含む中粒砂である。中国産青花碗・大皿、備前焼擂鉢・德利・壺、巻貝が出土した。

SK248 東西長0.8m、南北長0.8m、深さ0.2mの方形の土壌で、埋土は明黄褐色中粒～細粒砂である。

SK249 直径0.4m、深さ0.1mの円形の土壌で、埋土は炭を含む暗灰黄色中粒～細粒砂である。朝鮮王朝陶器が出土した。



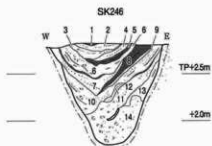
- | | |
|-------------------------------|--------------------------------|
| 1: 中礫を含むオリブ褐色(2.5Y4/4)細粒砂 | 8: 炭を含むオリブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂質シルト |
| 2: 中礫を含む褐色(10YR4/4)細粒砂 | 9: 中礫を含む黄褐色(2.5Y5/4)細粒砂質シルト |
| 3: 中礫を含む黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂 | 10: 中礫を含むオリブ褐色(2.5Y4/4)細粒砂 |
| 4: 暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂質シルト | 11: 中礫を含む黄褐色(2.5Y5/4)中粒砂(第6a層) |
| 5: 中礫を含むオリブ褐色(2.5Y4/4)細粒砂質シルト | 12: 黄褐色(2.5Y5/4)中粒砂(第6a層) |
| 6: オリブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂質シルト | 13: オリブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂(第6a層) |
| 7: 黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂質シルト | 14: 暗オリブ褐色(2.5Y3/3)中粒砂 |



- | | |
|---------------------------|-------------------------------|
| 1: 炭を含む黒褐色(2.5Y3/2)細粒砂 | 7: オリブ褐色(2.5Y5/4)シルト |
| 2: 灰黄褐色(2.5Y5/4)シルト | 8: 偽礫を含むオリブ褐色(2.5Y4/4)シルト |
| 3: にぶい黄褐色(2.5Y3/3)シルト | 9: 偽礫を含むにぶい黄色(2.5Y6/3)シルト |
| 4: 黒褐色(2.5Y4/3)炭 | 10: 偽礫を含むオリブ褐色(2.5Y4/3)シルト |
| 5: 黒褐色(2.5Y4/2)細粒砂質シルト | 11: 黄灰色(2.5Y5/1)中粒砂質シルト(第6a層) |
| 6: 焼土を含む黒褐色(2.5Y6/3)シルト偽礫 | 12: オリブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂 |



- | |
|----------------------------|
| 1: オリブ褐色(2.5Y4/4)細粒砂質シルト |
| 2: 暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂質シルト |
| 3: 黒褐色(2.5Y3/1)細粒砂質シルト |
| 4: にぶい黄色(2.5Y6/4)細粒砂質シルト |
| 5: 暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂 |
| 6: 暗オリブ褐色(2.5Y3/3)細粒砂 |
| 7: 偽礫を含む暗オリブ褐色(2.5Y3/3)中粒砂 |
| 8: オリブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂 |
| 9: 黄褐色(2.5Y5/6)細粒砂 |
| 10: 暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂 |



- | |
|----------------------------|
| 1: 黒褐色(2.5Y3/2)細粒砂質シルト |
| 2: オリブ褐色(2.5Y4/4)細粒砂質シルト |
| 3: 暗オリブ褐色(2.5Y3/3)細粒砂質シルト |
| 4: 黄褐色(2.5Y5/4)細粒砂質シルト |
| 5: オリブ褐色(2.5Y4/3)炭 |
| 6: 偽礫を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂 |
| 7: 偽礫を含むオリブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂 |
| 8: 黒褐色(10YR2/2)炭 |
| 9: 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルト |
| 10: 偽礫を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂 |
| 11: 偽礫を含むオリブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂 |
| 12: 偽礫を含む暗灰黄色(2.5Y4/1)中粒砂 |
| 13: 偽礫を含む黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂 |
| 14: 偽礫を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂 |



- | |
|---------------------------|
| 1: 暗オリブ褐色(2.5Y3/3)細粒砂質シルト |
| 2: オリブ褐色(2.5Y4/4)中粒砂 |
| 3: 偽礫を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂 |

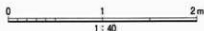


図63 第6a'層上面遺構断面図(2)

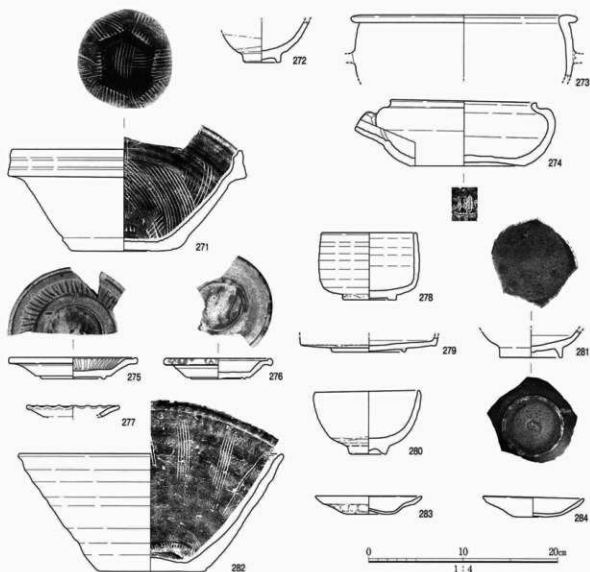


図64 第6a'層上面遺構出土土器(1)

SK219(272)、SK221(271)、SK226(273)、SK263(274~283)、SK264(284)

SK250 直径0.3m、深さ0.1mの円形の土壇である。

SK251 直径0.3m、深さ0.1mの円形の土壇である。内部に土師器甕285を据えていた。285は土師器甕の底部で、底径約28cm、高さ7cm以上である。外面底部は粗面、一部ヘラケズリ、体部外面は平行タタキ、内面はハケ、底部内面はナデ調整する。

SK252 東西長0.3m、南北長0.5m、深さ0.1mの楕円形の土壇で、埋土はオリブ褐色中粒砂である。

SK253 東西長0.4m、南北長0.3m、深さ0.1mの楕円形の土壇で、埋土はオリブ褐色極粗粒砂である。

SK254 直径0.3m、深さ0.1mの円形の土壇で、埋土は炭を含む灰黄褐色細粒砂である。銭貨が出土した。

SK255 直径約0.4m、深さ0.1mの円形の土壇である。

SK256 東西長1.2m以上、南北長0.5m以上、深さ0.4mの楕円形の土壇である。

SK257 東西長0.6m、南北長0.7m、深さ0.2mの楕円形の土場で、埋土は暗オリーブ褐色中粒砂質シルトである。中国産青花、平瓦が出土した。

SK258 東西長0.8m、南北長0.5m、深さ0.2mの楕円形の土場で、埋土は灰黄褐色中粒砂質シルトである。

SK259 東西長0.4m、南北長0.4m、深さ0.1mの楕円形の土場で、埋土は明黄褐色中粒砂で、最下部は炭層である。

SK260 東西長0.7m、南北長0.6m、深さ0.2mの楕円形の土場で、埋土は黒褐～オリーブ褐色極粗粒砂である。志野焼、備前焼播鉢が出土した。

SK261 調査区東南隅で検出した不整形な土場で、調査区外に延びる。土場北部の規模は東西長3.6m、南北幅約3.0m、深さ0.4mになる。複数の土場が切り合っている可能性が高いが、断面観察では確認できなかった。炭、焼土、焼けた粘土塊、礫、砂、偽礫を含むシルトが累重している。土師器皿、瀬戸美濃焼陶器天目碗・天目小碗・折縁皿・丸皿、肥前陶器碗、中国産青花碗・青花大皿(粗製品)・白磁、土師器鍋・移動式竈286、備前焼壺、加工円盤(瀬戸美濃焼陶器天目碗転用)、軒丸瓦、丸瓦、平瓦、銭貨が出土した。286は土師器移動式竈である。幅39.5cm、奥行27.6cm、高さ23.4cmで、表面をハケ調整しており、脚が付く。

SK262 直径0.6m、深さ0.5mの円形の土場で、瀬戸美濃焼陶器志野向付、軒平瓦、軒丸瓦、丸瓦が出土した。

SK263 東西長5.3m、南北長5.0m、深さ1.0mの不整形な土場である。中礫を含む細粒砂、中礫を含む細粒砂質シルト、炭を含む細粒砂質シルト、中礫を含む細粒砂が累重していた。土師器皿283、瀬戸美濃焼陶器天目碗・折縁ソギ皿275・折縁皿276・ヒダ皿277・志野焼碗278・志野焼鉢279、肥前陶器碗280、朝鮮王朝磁器碗281、土師器羽釜・鍋・鉢、瓦質土器羽釜、備前焼片口鉢274・甕・播鉢・德利・小壺、信楽焼播鉢282、丹波焼播鉢、軒丸瓦、軒平瓦314、丸瓦、平瓦、銭貨263、巻貝が出土した。

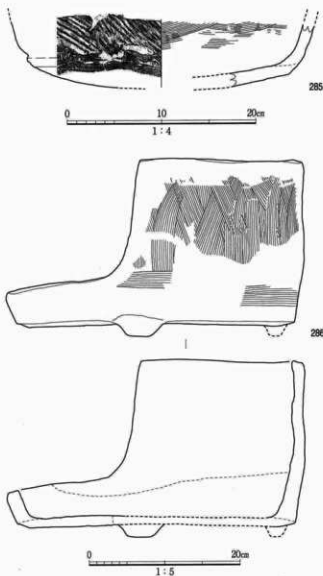


図65 第6a'層上面遺構出土土器(2)
SK251(285)、SK261(286)

283は土師器皿で、口径11.1cm、器高1.9cm、底径4.4cmである。口縁部はヨコナデ、体部外面下部から底部はユビオサエ、底部内面は強いユビナデおよびナデ調整する。浅黄橙～灰色(底部)である。275～279は瀬戸美濃焼陶器である。275は折縁ソギ皿である。口径13.2cm、器高2.3cm、底径6.6cmで、浅黄色の釉(灰釉)を施す。見込みは内禿(輪ハゲ)で露胎である。内面の文様はヘラ彫り(ソギ)している。高台内にワトチ痕がある。口縁端部の一部に煤が付着しており、灯明皿に転用している。276は折縁皿で、口径11.0cm、器高2.2cm、底径5.6cmで、明黄褐色の釉を施す。見込みは内禿(輪ハゲ)である。高台内にワトチ痕がある。口縁端部の一部に煤が付着しており、灯明皿に転用している。277はヒダ皿である。口径9.5cm、器高1.2cm以上で、褐色の釉(鉄釉)を施す。278は志野焼碗で、口径15.1cm、器高7.0cm、底径12.1cmで、灰白色の釉が全面に掛かるが、高台付近から底部外面は露胎である。底部は輪高台である。279は志野焼鉢で、器高1.7cm以上、底径7.6cm、灰白色の釉(長石釉)を施す。高台および底部は露胎である。280は肥前陶器碗で、口径10.8cm、高さ6.8cm、底径3.7cm、灰オリーブ色の釉を施す。外面下部と高台は露胎である。

281は朝鮮王朝磁器碗である。器高3cm以上、底径6.6cmで、外面には灰白色、内面には灰オリーブ色の釉を施す。見込みに9箇所の砂目痕、畳付けに10箇所の砂目痕がある。274は備前焼片口鉢で、口径15.1cm、器高7.0cm、底径12.1cm、口縁部はヨコナデ、体部外面下半は回転ヘラケズリ、内面はナデ、底部はヘラケズリ調整する。内面には赤褐色の自然釉が付着する。282は信楽焼描鉢である。口径27.8cm、器高12.5cm、底径11.3cmで、口縁部は斜めに直線的に立ち上がり、端部を丸く収める。内外面は回転ナデ調整、底部は不調整である。描目は直線の5本単位で、底部内面にまで及ぶ。橙色である。

v)南区(図59、図版18)

SK264 東西長1.3m、南北長1.4m、深さ0.5mの楕円形の土壌で、土師器皿284が出土した。284は土師器皿で、口径10.5m、高さ2.2cm、底径3.3cm、口縁部はヨコナデ、内面はナデ、外面は底部までナデ調整する。外面は灰白色、内面は黄灰色である。

SK265 直径0.8m、深さ0.1mの円形の土壌である。

SK266 直径0.9m、深さ0.2m以上の円形の土壌である。

SK267 直径0.8m、深さ0.4mの円形の土壌である。

SK268 直径1.2m、深さ0.4mの円形の土壌である。

SK269 東西長0.8m、南北長0.8m、深さ0.3mの隅丸方形の土壌である。

4)小結

整地土・盛土の出土遺物の検討からは、第6h層は豊臣前期以降、その上位層の第6a'～g層についても、新しい遺物群の大半は豊臣期、なかでも前期が多い。造成時期を考える上で問題となるのが、最新要素をもつ肥前陶器と志野焼である。志野焼は細片のため図化していないが、肥前陶器218・230・233・252・255・270は碗・皿・鉢が出土している。これらの遺物はこれまでの研究成果からは、豊臣後期初頭の時間幅で捉えられ得るものと考えられてきた。ただし、第6層自体が広大な面積・土量

の調査であり、遺物については上位層からの混入の可能性も否定できず、不確定な要素が残る。

また、造成年代に関わる情報は地層からも得られている。第6b・c層で観察された著しい地形変形からは、大きな地震による揺れがあったものと考えられる。豊臣期の大地震の候補としては、天正地震(1586(天正13)年)、慶長伏見地震(1596(文禄5)年)、慶長大地震(1605(慶長9)年)が挙げられる。

出土遺物の年代観、地震痕跡の年代を文献史料に現れる史実の実態と整合的に説明させることは、現状ではまだ資料が欠けていると言わざるを得ないが、ここでは第6a'～g層に見られるような造成は、1598(慶長3)年から翌年にかけて行われた「大坂町中屋敷替」に伴う造成を最有力候補としつつ、課題も残されていることも指摘しておきたい。なお、SX301造成前の第6h層の整地についてもSX301以降の造成と一連の事業である可能性が高いと考える。

大規模な造成にあたっては、SX301を基軸として、区画を設けながら段階的に盛土する状況が明らかになった。区画は柱・杭に横板を設置して、枠を作り、それに粘土を貼り付けた形が基本であったと考えられるが、板の代わりにSX351のように木舞を用いるもの、SX333のように何も用いないと考えられるものもあった。また、粘土枠の底部の形状についても、断面が逆「T」形が一般的であるもの、SX333のように「L」形や、SX332・334のように「I」形も見られ、個々にみれば、多様な造作方法があったことが伺える。

また、第6a'層上面(層中を含む)で検出した遺構には、櫓・土塙・穴蔵・埋甕などがあるが、北部のSA201～203、南部中央の穴蔵SK219を除けば、ほとんどが土塙である。井戸や建物などは検出していない。土塙のなかで、SK218・221・223・246の埋土には炭・焼土、特に炭が多量に層をなして堆積している。また、SK223から銅滓、SK246から銅が付着した「とりべ」が出土した。一連の土塙は、銅に関係した作業に関連した遺構と推定できる。こうした土塙は、特に南部中央と東南部に集中している。とりわけ、南部中央の土塙群は、狭い範囲に集中しており、なかでも中核施設と推定されるSK222～224の南側には櫓(SP228～233)がある。南部中央と東南部の場所が作業の中心地であったであろう。櫓の方向は東で南に5～6°振る。この方向は直上層で確認している礎石建物SB505(豊臣後期の屋敷地)[大文協2003]などと同方向を示している。

これら第6a'層で検出した一連の遺構の時期は、穴蔵SK219以外は出土遺物等から見て、豊臣後期と考えられる。

第5節 瓦埴・土鍾・石製品・銭貨・貝類

この節では遺構・地層から出土した瓦・土鍾・石製品・銭貨・貝類をまとめて報告する。混入品と考えられるものの遺構の情報は図のみに記載する。

1) 瓦埴(図66～69、図版27～30)

287～306は古代の瓦埴である。287～289は素弁蓮華文軒丸瓦である。287はSD601b出土の素弁蓮華文軒丸瓦(弁間点珠)である。弁が二弁のみで、中房は残っていない。径17.2cm、弁の割り付けから判断して、八弁に復元できる。外縁は幅1cm・高さ1cm、弁端は反り、中央に竅が通る。弁間には径0.8cmの点珠がある。瓦当外縁は丁寧にヘラケズリシナデ調整している。丸瓦との接合位置は高く、裏面に幅0.5cmの細溝を掘って丸瓦を差し込んでおり、丸瓦の先端は凹凸面ともに削っている。表面・断面は灰白色で、胎土は細かいが1mm前後の長石・雲母を含み、焼成は堅緻である。奈良県明日香村豊浦寺出土軒丸瓦ⅣE型式[花谷浩2000]に類似する。288・289は素弁蓮華文軒丸瓦(弁端点珠)である。288は弁が二弁のみで、中房は残っていない。范は摩耗し傷んでいるらしく、形崩れしている。復元径約16cm、厚さ1.5cmである。弁の割り付けから判断して、八弁に復元できる。外縁は幅0.5cm、高さ0.4cmで、弁端には点珠がある。瓦当裏面は盛り上がり、回転ナデ調整している。表面・断面は灰白色で、胎土は1mm以下の長石・石英・黒色粒を含み、焼成はやや軟質である。四天王寺創建瓦と同范と考えられる。289は弁が二弁のみであり、中房は残っていない。復元径約16cm、厚さ1.5cm、弁の割り付けから判断して、八弁に復元できる。外縁は幅0.5cm、高さ0.4cm、弁端に点珠がある。瓦当外縁は丁寧にヘラケズリシナデしている。丸瓦との接合位置は高く、裏面に丸瓦を差し込んでおり、丸瓦の先端は凹面を削っている。瓦当裏面は回転ナデ調整している。表面・断面は灰白色で、胎土は3mm以下の長石・石英・黒色粒を含み、焼成はやや軟質である。四天王寺創建瓦と同范と考えられる。以上の瓦は7世紀第2四半期に位置づけられる。

290は複弁蓮華文軒丸瓦で、後期難波宮の6303に当たる。外区の破片で、弁・中房は残っていない。線鋸歯文・圏線・珠文・圏線が残る。径16.0cm、外縁は幅0.9cm、高さ0.8cmで、瓦当外縁は丁寧にヘラケズリシナデしている。丸瓦との接合位置は高く、瓦当面に溝などを穿たないで丸瓦と接合している。表面は灰色、断面は灰白色で、胎土は細かく、1mm前後の長石・石英を含み、焼成は堅緻である。291・292は重圏文軒丸瓦である。291は後期難波宮の6016に当たる。径約17.7cmで、圏線は断面が半円形で突出し、内径は第1圏線が3.5cm、第2圏線が7.6cm、第3圏線は12.1cmである。また、外縁～第3圏間は第2圏～第3圏間や第1圏～第2圏間よりも狭い。瓦当裏面に溝を掘って接合している。表・断面にはぶい黄橙～灰白色で、胎土に粗い砂粒を含み、焼成はやや甘い。292は後期難波宮の6015に当たる。径約17.1cmで、第1圏内に「右」左字陽文がある。「右」左字が右に約90°振れるものをAとすると、Aに当たる。圏線は断面が半円形で突出し、内径は第1圏線が3.4cm、第2圏線が7.1cm、第3圏線は11.4cmである。外縁は圏線より高く突出している。丸瓦部凹凸面ともナデ調整し、焼成は



图66 出土瓦(1)

SD601b (287), SD601a (291·293)、第9層(294)、SK550(290)、第8層(297)、SK584(288)、
SX580(289)、SX301(292·296·298)、第0層(295)

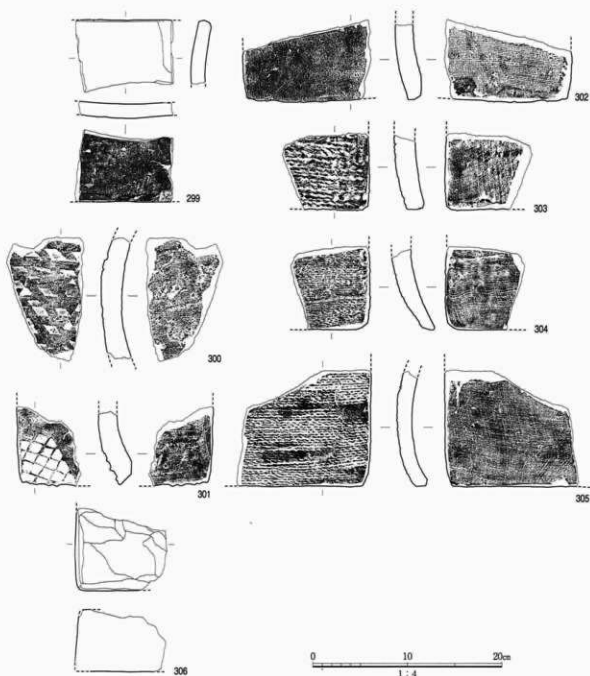


図67 出土瓦(2)
第12層(299)、SD601a (300~306)

堅緻である。

293・294は重圏文軒平瓦である。293はSD601aから出土し、後期難波宮の6573に当たる。瓦当の厚さは5 cm以上で、圏線は断面が低い台形で突出する。圏線は2条で両端は開放である。瓦当脇の外縁が2段になっている。范に厚さ1 cm程の粘土を詰めてから平瓦を接合している。顎部の平瓦凸面に縄タタキ痕跡がある。側面はヘラケズリ調整する。表面は灰色、断面は灰白色で、胎土は3 mm以下の長石・石英・黒色粒を含み、焼成はやや軟質である。294は後期難波宮の6572A [大文協1995]に当たる。瓦当の厚さ6.8 cm、圏線は断面が半円形で突出する。直線顎に近い曲線顎である。范に厚さ1 cm程の

粘土を詰めてから平瓦部を接合し、頸部は帯状の粘土を貼り付けて、端部をナデて段を作り出すが、緩やかである。表・断面ともに灰色で、焼成は軟質である。凹面は、瓦当面近くはヨコナデするがそれ以外は縦方向にヘラケズリ調整し、凹面側の側面を面取りして、凸面・側面に縦方向のヘラケズリ調整を施す。

299～305は平瓦である。299は第12層から出土した平瓦である、凸面はタタキ締めた後にナデ調整で完全にすり消す。凹面はナデてすり消すが部分的に布目が残る。側面は分割破面をヘラケズリするが、破面が一部残る。分割裁線は凹面側から入れる。分割突起痕跡(分割界点)[八幡市教育委員会1985]がある。色は灰色で焼成は堅緻である。桷桹板痕跡は確認していないが、分割突起の存在から、粘土板桶巻作りと考えられる。7世紀第2四半期に位置づけられる。

300～306はSD601aから出土した平瓦である。300は長さ8.2cm以上、幅13cm以上、厚さ2.3cmである。凹面は布目痕跡が残存し、桷桹板痕跡がある。凸面は格子タタキののちナデ調整する。端面・側面は欠けている。301は長さ6.8cm以上、幅8.4cm以上、厚さ1.6cmである。凹面はヘラケズリし、布目はかすかに残存し、桷桹板痕跡は不明である。凸面は格子タタキである。狭端面・側面はヘラケズリする。焼成は堅緻である。302は長さ13.6cm以上、幅8.7cm以上、厚さ1.9cmである。凸面はタタキ締めた後にナデ調整で完全にすり消す。凹面は布目痕跡がある。狭端面・端面は、ヨコナデ、側面はヘラケズリし、凹面側は幅広くヘラケズリで面取りする。分割裁線や分割破面は残っていないが、分割突起痕跡(分割界点)がある。色は灰白色で焼成は堅緻である。分割突起の存在から、粘土板桶巻作りと考えられる。表面・断面は灰白色、3mm以下の長石・石英・雲母を含む。303は長さ9.2cm以上、幅8.1cm以上、厚さ2.1cmである。凹面は布目痕跡が残存し、桷桹板痕跡は不明である。凸面は縦方向の粗い縄タタキ、広端面・側面はヘラケズリし、面取りはわずかに行う。304は長さ8.4cm以上、幅8.3cm以上、厚さ2.0cmである。凹面は粗い布目痕跡が残存し、桷桹板痕跡はない。凸面は縦方向の縄タタキ、一部ナデ調整する。端面・側面はヘラケズリしているが、隅部縁や端面縁はユビオサエし、隅部が丸みをもつ。一枚作りであろう。305は長さ14.2cm以上、幅12.2cm以上、厚さ1.2cmである。凹面は布目痕跡が残存し、桷桹板痕跡はない。凸面は縦方向の縄タタキで整形する。端面・側面はヘラケズリ、側面はヘラケズリで面取りする。おそらく一枚作りであろう。302は7世紀第2四半期、300・301・303～305は後期難波宮期に位置づけられる。

306はSD601aから出土した埴である。破片なので全形は不明である。磨滅が激しく調整痕跡が残っていない。厚さ6.6cm、表面は灰白色、断面にはぶい橙色、2mm程の長石・雲母・シャモットを含み、後期難波宮期に位置づけられる。

295～298は奈良時代末～平安時代前期の瓦である。295は複弁蓮華文軒丸瓦である。内区は複弁八弁蓮華文で間弁がない。外区は1条の圈線で区画し、まばらな間隔で珠文が巡る。径約15cm、厚さ2.2cm、外縁は幅幅1.4cm、高さ1.2cmである。瓦当外縁は丁寧にヘラケズリしナデているが磨滅で不明な点が多い。瓦当面縁から高さ1.2cmの範囲に范型痕跡がある。丸瓦との接合部分は残っていない。表面・断面は灰黄色、胎土は1mm以下の長石・石英・雲母・黒色粒を含む。296～298は均整唐草文軒平瓦である。296・297は四周に珠文が巡る均整唐草文軒平瓦で、中心飾は垂線1本である。296は曲線頸

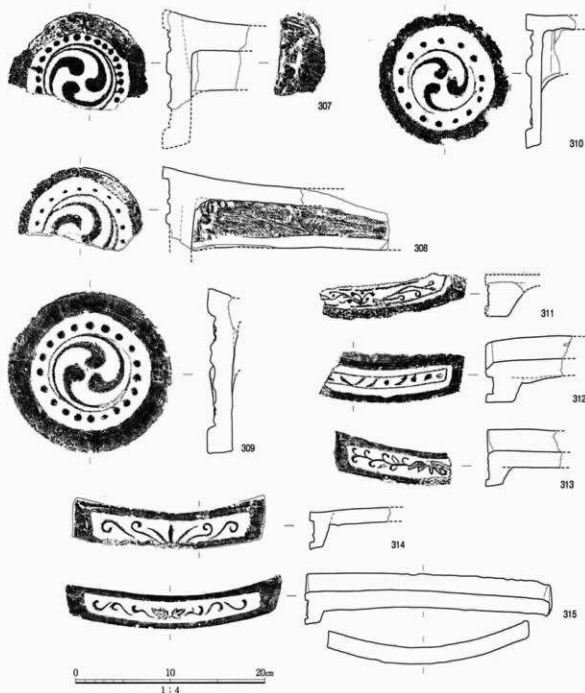


図68 出土瓦(3)

第6h層(308)、SX301(311)、第6b層(307・309・312・313)、第6a層(315)、SK263(314)、SE108(310)

であるが、瓦当面付近は平坦面があり段頸の要素もある。范に厚さ2 cm程の粘土を詰めてから平瓦を接合し、頸部は断面3角形状の粘土を貼り付けて、端部をナデで段を作り出すが、緩やかである。表・断面ともに灰色で、焼成はやや軟質である。平瓦部凹面の瓦当面近くはヨコナデ、側面はナデ調整するが、それ以外は布目痕がある。凸面は磨滅が著しく調整は不明である。297は范に厚さ1 cm程の粘土を詰めてから平瓦部を接合し、頸部は断面3角形状の粘土を貼り付けて、端部をナデで段を作り出すが、緩やかである。表・断面ともに灰色で、焼成はやや軟質である。平瓦部凹面の瓦当面近くはヨ

コナデするが、それ以外はナデ消さず、布目が明瞭に残る。凸面はナデ消す。296・297と同様な瓦はOS86-35次[大文協2003、図227-54]、OS86-6次[大文協2003、図6-15]、OS86-20次[大文協2004b、図40-108]、OS97-1次[大文協1999a、図27-156]、OS10-10次[市教委・大文研2012、図8-7]、大坂城跡(大阪府警本部敷地)[大阪府文化財センター2002、図396-48]で出土している。298は均整唐草文軒平瓦で、平瓦部の長さ20.3cm以上、瓦当部の厚さ7.5cm・長さ16.7cm以上である。文様は4単位の唐草文で、中心飾りは不明である。四周に珠文帯を巡らす。曲線類で平瓦に三角状の帯粘土を貼り付けて瓦当にしている。瓦当部付近はヨコナデ、平瓦凹面の瓦当部付近は横方向にヘラケズリ調整する。凹面には布目が残る。凸面は縦方向のヘラケズリでタタキなどの痕跡はない。側面はヘラで整形する。295-297は奈良時代末～平安時代初期、298は平安時代前半であろう。

311・312は中世の軒平瓦である。311は均整唐草文軒平瓦である。瓦当厚さ3.5cm以上、長さ4cm以上である。3単位の唐草文、中心飾りは花開き形を呈し、四周に圏線を巡らす。段額で平瓦に台形状の幅広粘土帯を貼り付けて瓦当にしている。平瓦は脱落しているが、平瓦に格子状のヘラ刻み目を入れ、接着に備えている。瓦当部付近はヨコナデ調整する。瓦当部側面はヘラで整形する。312は均整唐草・連珠文軒平瓦で、瓦当の厚さ4.2cm、長さ10cm以上である。4単位の唐草文、3単位の珠文で、中心飾りはない。四周に圏線を巡らす。段額で平瓦に台形状の幅広粘土帯を貼り付けて瓦当にしている。瓦当部付近はヨコナデ、平瓦凹面の瓦当部付近は横方向のヘラケズリ、それ以外は縦方向のヘラケズリ・ナデ調整しており布目は残っていない。凸面は縦方向のヘラケズリ調整でタタキなどの痕跡はない。平瓦側面や瓦当部側面はヘラで整形する。

307-310・313-315は豊臣期の瓦である。

307-310は左巻き三巴文軒丸瓦である。307は第6b層から出土した。復元珠文30個で、圏線はない。瓦当径14.4cm、丸瓦部残り9cmである。丸瓦の取り付け位置はあまり高くなく、接合粘土は少ない。瓦当外縁の丸瓦部はヘラケズリを行う。丸瓦部凸面は縦方向のヘラケズリ、瓦当裏面はナデ、丸瓦部凹面はヘラケズリ調整しているが、布目が残っている。308は第6h層から出土した。復元珠文18個で、圏線はない。径13.3cm、厚さ2m、丸瓦部残り23.9cmである。丸瓦の取り付け位置はあまり高くない。接合粘土は多い。瓦当外縁の丸瓦部は縦方向のヘラケズリを行う。側面もヘラケズリしている。瓦当表面はナデ、丸瓦部凹面はナデ調整しているが、布目や糸切り痕がある。309は第6b層から出土した。珠文20個で、圏線はない。径17.5cm、厚さ2.72mである。瓦の取り付け位置は高く、接合のための粗いヘラキザミが入る。接合粘土は少ない。瓦当外縁や裏面はナデ調整する。2次的に火を受け瓦当表面に煤が多量に付着している。310の珠文は15個で、径14.1cm、厚さ1.6cmである。丸瓦の取り付け位置は高く、接合粘土は少ない。瓦当外縁の丸瓦部は縦方向のヘラケズリを行う。

313-315は均整唐草文軒平瓦である。313は第6b層から出土した。瓦当幅21.4cm、厚さ3.3m、長さ8cm以上である。蔓状唐草文で、中心飾りは4葉の木の葉文である。段額で平瓦に帯粘土を貼り付けて瓦当にしている。瓦当部付近はヨコナデ、平瓦凹面はナデ、凸面は縦・斜め方向にナデ調整する。側面はヘラで整形したのちナデ調整を施す。同様な例は大坂城跡(大阪市中央体育館地域)[大文協1992、図面106の3626・3627]で出土している。314は瓦当幅20.4cm、厚さ3.5mである。3単位の唐

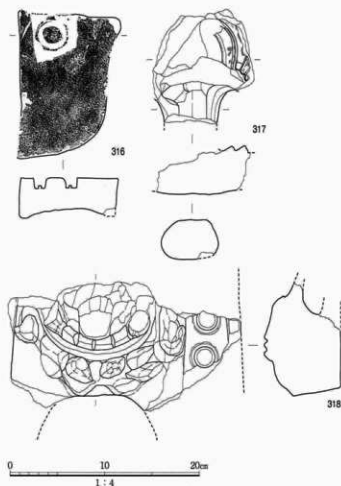


図69 出土瓦(4)

第6c層(316)、第6b層(317)、第6a層(318)

6b層から出土した鬼瓦である。長さ12.1cm以上、幅10.8cm以上、高さ5.1cm以上、厚さ4.5cmである。ヘラケズリして面を仕上げる。波状文様部分には金箔が残存し、表面は暗灰色、断面は灰白色である。また、3mm以下の長石・チャート・雲母を含み、焼成はやや軟質である。豊臣期に位置づけられる。318は6a層から出土した鬼瓦である。幅24.7cm以上、高さ13.7cm以上、厚さ1.0~7.5cmである。舌・歯・牙・髭を表現している。周囲は竹管刺突の珠文を巡らせ、棟用に下端部を半円形に挟む。裏面はヘラケズリで面を仕上げ、把手を作るため裏面中央を挟って作り出している。表面は灰黄褐色、断面はにぶい黄橙色である。13~14世紀であろうか。

2) 土鍾(図70、図版30)

319・320は有溝土鍾である。319はSD601aから出土した。長さ7.4cm、幅3.7cmで、にぶい橙色である。320は長さ6.8cm、幅3.1cm、重さ54.0gで、にぶい黄橙色である。

321~329は管状土鍾である。321はSD601aから出土した。長さ7.4cm、幅3.6cm、孔径1.2cm、重さ87.7gで、ユビオサエのちナデ調整している。灰白色である。322は第9層から出土した。長さ7.6cm、直径約3.9cmである。半分しか残存していないが、現状の重さは70.5gで、灰白色である。323は半分の破片で、長さ2.8cm以上、径3.2cm、孔径1.0cm、重さ27.3gである。ユビオサエのちナデでおり、橙

草文、中心飾り縦棒1本である。段頸で瓦当に平瓦を接合し少量の接合粘土で仕上げる。平瓦凹面は縦方向のヘラナデ、凸面は横方向にヘラナデ調整する。315は瓦当幅21cm、厚さ3.4cm、長さ25.9cmである。3単位の唐草文、中心飾りは笹形文で、段頸で平瓦に帯粘土を貼り付けて瓦当にしている。瓦当部付近はヨコナデ、平瓦凹面は横方向のナデ、凸面は縦・斜め方向にナデ調整する。側面はヘラで整形する。307~309・313・315は豊臣前期、310・314は豊臣後期に位置づけられる。

316~318は鬼瓦である。316は第6c層から出土した板状の瓦である。大型珠文が1個残る破片で、長さ10.8cm以上、厚さ4.2cmである。珠文は竹管の刺突で作る。裏面は横方向に幅のあるヘラケズリで仕上げる。鬼瓦で、向かって左側下端隅部であろうか。317は第

色である。324は長さ6.1cm、径3.5cm、重さ72.3g、橙色である。325は第8層から出土した。長さ約6.9cm、直径約2.1cm、現存重量20.8g、橙色である。326は長さ5.0cm、径1.0cm、孔径0.3cm、重さ4.8gである。ユビオサエのちナデ調整し、にぶい橙～橙色である。327は長さ4.9cm、径1.1cm、孔径0.2cm、重さ4.6gである。ユビオサエのちナデ調整し、にぶい黄橙色である。328は長さ4.35cm、径1.2cm、孔径0.3cm、重さ5.7gである。ユビオサエのちナデ調整し、黄橙色である。329は長さ3.7cm、径0.9cm、孔径0.3cm、重さ2.9gである。ユビオサエのちナデ調整し、にぶい黄橙～灰色である。

3) 石製品(図70・71、表2、図版31)

石製品には硯330、石鍋331～336、石臼337などがある。

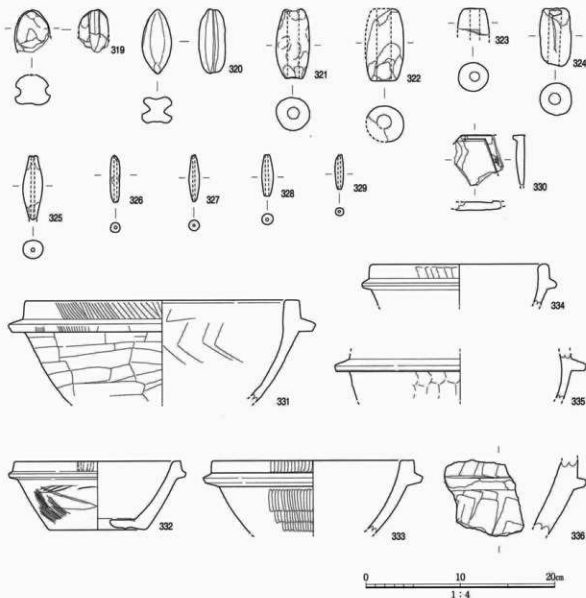


図70 土鍾・石硯・石鍋

SD601a (319・321)、SK417(324)、SE510(331)、第9層(322)、第8層(320・325・330)、SX580(329・332)、第6h層(323・327)、SX301(326・333)、第6c層(334)、第6b層(335・336)、第6a層(328)

表2 矢穴計測表

遺物番号	矢穴番号	縦方向(上端) (a 寸法)	縦方向(下端) (a' 寸法)	横方向 (b 寸法)	深さ (c 寸法)	矢穴間隔 (d 寸法)	矢穴型式
337	①	14.0	8.8	—	2.9	—	先Aタイプか
	②	12.0	9.7	—	4.2	3.4	
	③	12.5	9.5	—	5.0	2.0	
	④	13.0	8.6	—	4.5	2.3	
	⑤	12.0	8.5	—	3.9	2.5	
	⑥	12.0	9.7	—	6.0	2.0	
	⑦	(5.0)	(6.6)	—	5.0	2.0	

*単位はいずれもcm

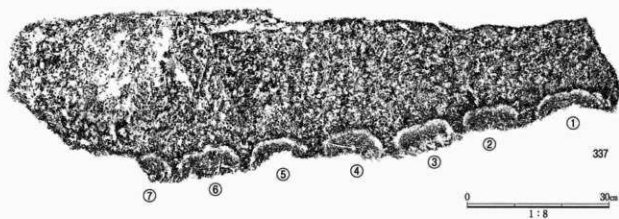


図71 矢穴のある石材

330は第8層から出土した石硯である。破片で、平面形は方形と推定される。陸の部分は縁より2mm深く、縁には波文を線刻している。陸部はよく摺り込まれている。側面・底面は粗面のままで、ケズリ調整していない。残存現状の重さは37g、灰赤色で、赤間石と推定される。

331～336はいずれも滑石製石鍋である。331はSE510から出土し、口径28.8cm、高さ10.9cm以上で、鍋が口縁部直下にほぼ水平につく。外面は鍋より上は縦方向のケズリ、鍋より下は横・斜め方向のケズリ、内面はケズリ調整する。外面に煤が付着する。332はSX580から出土し、口径17.5cm、高さ7.3cm、底径10.4cmである。鍋が口縁部直下にほぼ水平につく。外面は縦方向のケズリ調整、内面はケズリ調整、外底面は仕上げしていない。外面に煤が付着し、内面は焦げている。333は口径21.1cm、高さ7.7cm以上である。鍋はほぼ水平につく。外面は縦方向にケズリ調整する。334は口径17.8cm、高さ4.4cm以上である。鍋が口縁部直下にほぼ水平につく。外面は鍋より上は縦方向のケズリ、鍋より下は縦方向のケズリ、内面はケズリ調整する。335は鍋の径26.5cmである。鍋がやや下向きにつく。外面は縦方向にケズリ調整し、煤が付着する。336は高さ8cm以上である。鍋が口縁部直下にほぼ水平につく。外面は縦方向のケズリ、内面はケズリ調整する。331・333は木戸編年3-a-2(13世紀中頃)[木戸雅寿1995]・草戸第2型式(13世紀中頃)[鈴木康之1998]、332・334～336は木戸編年3-b(13世紀後半)・草戸第3型式(13世紀後半)である。

369は第6層から出土した石臼(挽臼)である。径32cm、高さ11.5cmの花崗岩製の白臼である。物受皿は周囲に幅6cm、高さ3cmの縁が巡っており、縁寄りに径約5cmの物配り孔がある。臼の側面中位には片側に3.8cm×4.3cm、深さ2cmの方形引手穴がある。摺り面側には摺り目が刻まれている。分割域は8分割で副溝は4本である。中心軸は下臼に固定する形態で、軸受部に径2.5cm、深さ2cmの穴が開いている。摺り目から見て、左回りの臼である。同形態の草戸千軒町遺跡[広島県草戸千軒町遺跡調査研究所1995]の出土例や大坂城跡(大阪府警本部敷地)[大阪府文化財センター2002]出土例を参考にすれば、15～16世紀を中心とした時期と考えられる。

370・371は花崗岩製の方形台座で、370はSX323で礎石に転用されていた。37cm×37cm、高さ12cmである。371は第6層内で礎石に転用されていたものである。24.6cm×25.6cm、高さ9cmである。いずれも複弁蓮華文様を彫り出しており、大きさなどから言って、おそらく五輪塔の台座であろう。おおよそ、15～16世紀頃と推定される。

337は第6層から出土した花崗岩石材である。何に使用されたかは不明である。長さ128cm、幅35cm、厚さは38cmである。石材の1辺には矢穴列が認められる。矢穴上端縦方向(長辺)の長さは12.0～14.0cmで、深さは2.9～6.0cmとばらつきが大きい。また、各矢穴の間隔は2.0～3.4cmと比較的狭い。こうした形態的特徴から、これらの矢穴は石造物系とされる先Aタイプに属するものと思われる[森岡秀人・藤川祐作2008]。なお、先Aタイプの存在期間は13～16世紀とされている。

4) 銭貨(図72、表3)

銭貨は計61点出土した。本来の場所から二次的に移動したものがほとんどである。銭種が特定できた31点は、表3のとおりである。

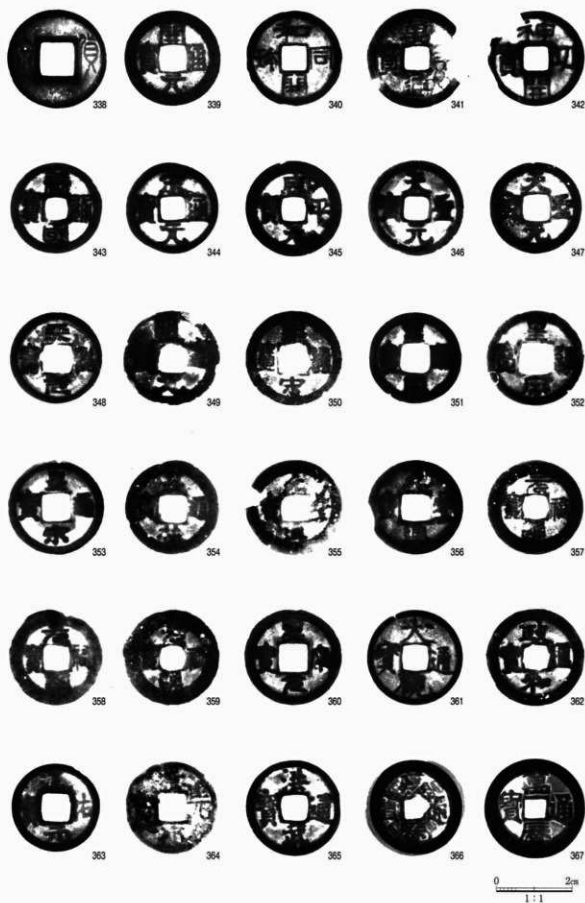


圖72 出土錢貨X線写真

表3 出土銭貨一覧表

掲載番号	銭種	出土層位・遺構	径 (cm)	備考
338	貨泉	第6b層	2.3	
339	開元通寶	SX334	2.5	
340	和同開珎	第6b層	2.5	
341	萬年通寶	第6a層	2.6	
342	神功開寶	SX580	2.5	
343	唐国通寶	SK263	2.4	
344	宋通元寶	第6h層	2.4	
345	咸平元寶	第6b層	2.5	
346	天聖元寶	第6a層	2.5	
347	天聖元寶	SE110	2.4	
348	天聖元寶	SK524・525	2.4	元豊通寶と重なる。
349	明道元寶	第6a層	2.5	
350	皇宋通寶	第6a層	2.5	
351	皇宋通寶	第6b層	2.4	
352	皇宋通寶	第6h層	2.5	
353	皇宋通寶	第6g層	2.5	
354	嘉祐通寶	SX580	2.5	
355	元豊通寶	第6a層	2.5	
356	元豊通寶	SX580	2.5	
357	元祐通寶	SK254	2.5	
358	元祐通寶	第6h層	2.5	
359	元祐通寶	第6a層	2.5	
360	聖宋元寶	第6b層	2.5	
361	大觀通寶	埋戻土	2.5	
362	政和通寶	SX339	2.6	
363	淳祐元寶	第6b層	2.3	
364	景定元寶	第6a層	2.4	
365	洪武通寶	第0層	2.3	
366	萬歴通寶	第6b層	2.5	(2枚重なるが銭種不明)
367	萬歴通寶	第6b層	2.6	

5) 貝類(表4)

調査ではSK543から多数の貝類が出土したことから、埋土をサンプル採取し水洗選別した結果、計8,713個体の貝類を回収した(表4)。同定作業には現生標本と図鑑[吉良哲明1954]を利用しており、個体数に関して腹足綱は殻口数を、二枚貝綱は左右殻数の多数の方を原則として採用している。

SK543からは貝類のほかには瓦器やウロコなど、14世紀に属する遺物が共伴している。出土した貝類の貝種構成は汽水性種のヤマトシジミが8,709個体と99%以上を占めており、そのうち左右殻が合わさった状態のものが18個体含まれる。淡水性種はカワニナ2個体、イシガイ1個体と、種不明のイシガイ科の破片が出土しており、鹹水性種はハマグリ1個体のみであった。

このように「中世の貝塚」とも呼べるような大量の貝類を伴う遺構が、これまでに行われた調査地周辺地域の複数の調査で検出されている。大坂城下町跡のOJ94-16次調査では44,973個体、OJ93-7次調査では18,438個体、OJ91-2次調査では19,480個体の貝類が13-16世紀前半に属する溝などの遺構から出土している。また、大川を挟んで北側に拡がる天神橋遺跡のTJ00-2次調査では14世紀後半に属する井戸SE202から1,836個体が出土しており、TJ11-1次調査で室町時代の遺物包含層から出土した177個体の貝類もそうした貝塚の一部である可能性があるほか[池田研2002・大文研

表4 出土貝類種名一覧

腹足綱	Gastropoda
カワニナ	<i>Semisulcospira bensoni</i> (Philippi)
二枚貝綱	Bivalvia
フネガイ科	Arcidae <i>gen. et sp. indet.</i>
ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i> (Roeding)
ヤマトシジミ	<i>Corbicula japonica</i> Prime
イシガイ	<i>Unio douglasiae nipponensis</i> (v. Martens)
イシガイ科	Unionidae <i>gen. et sp. indet.</i>

2011a]、安曇寺跡推定地のAZ05-1次調査でも13世紀代の貝塚SX701から4,480個体が出土している[市教委・大文協2006]。

ヤマトシジミを主体とし、大川の河口部から内湾部で採取可能な汽水・淡水性種を中心とする限定された貝種から構成されていること、出土量が多量であること、他の食物残滓がほとんど共伴し

ないことなどこれらの資料に共通する特徴から、貝塚は河口部を主な漁場とする漁業集団の非自家消費的な貝採取活動の結果、形成されたと考えられており[池田2005]、本調査のSK543もそうした貝塚の一つである可能性が高い。

第三章 遺構と遺物の検討

1) 第12層出土の平瓦について

調査区北部、特に西側を中心に分布する第12層からは土師器(杯・高杯・甕・移動式竈・煮沸具の把手)、須恵器(杯・壺・甕)、平瓦、木器(横槌)が出土した。

そのうち、平瓦299は、瓦の調整や製作技法の特徴、特に粘土板桶巻き作りの際の分割技法(分割突起)などから見て、八幡市・枚方市に所在する平野山瓦窯産[八幡市教育委員会1985]の可能性が高い。そのほか、本来は第12層に含まれていたと考えられる同時期の軒丸瓦が出土している。第12～10層を壊した遺構SD601bから軒丸瓦287が、さらにSD601b・aや第12～10層を壊した遺構SK584・SX580から軒丸瓦288・289が出土している。軒丸瓦288・289は四天王寺創建軒丸瓦で、平野山瓦窯産である。軒丸瓦287は類例が少なく平野山瓦窯産の可能性はあるが、確認はできていない。このように、今回出土した7世紀第2四半期の軒丸瓦・平瓦の大部分は、平野山瓦窯で焼成されたと考えられる。調査地の付近に寺院や瓦葺建物があった可能性は低く、平野山瓦窯から消費地に運ぶ途中で、運ばれなかった瓦の廃棄物であるとも考えることもできよう。

平野山瓦窯は大川と同じ淀川水系沿いにあり、瓦を水運でこの地に運ぶことは十分可能である。また、当地は後に松屋町筋といわれる浜道を通れば四天王寺に最短距離の位置にある。平野山瓦窯産の瓦がこの地付近で陸揚げされ、四天王寺に運ばれたと想定することは検討に値する。

2) SD601aの出土遺物について

SD601aは前代のSD601bを踏襲しているが、溝内の堆積状況から見て、常時水が流れていた状態とは考え難く、浅い溝状の窪地になっていた可能性が高い。そこに大量の遺物が投棄されたのであろう。SD601a出土の遺物の時期は、長岡京期、難波V新段階である。出土遺物は量的にまとまっており、コンテナバット約50箱分ある。時期的にも短期間のものである。出土遺物は、土器、瓦類がほとんどであるが、その中でも移動式竈と瓦類が特徴的である。

瓦類は後期難波宮のもので、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・塼が出土した。時期や溝の存在した周辺環境を考慮すると、近辺に後期難波宮期の瓦葺建物が存在した可能性は低く、瓦は後期難波宮から運ばれたと推定するほうがよいだろう。時期的には、難波宮から長岡宮へ建物・瓦など資材が運ばれた時期にあたる。調査区近くが資材の積み出し地であったと想定することもできよう。

移動式竈は遺物の項でも述べたように、すべて付底系の竈で、SD601aから27個体、さらにその他の遺構・層出土であるが本来はSD601aと思われるもの18個体、計45個体が出土した。多数の移動式竈の存在は、近辺において大規模な臨時的な労働や饗宴が行われたかあるいは何らかの祭祀的行事が行われたことを示唆している。

3) 中世の遺構について

今回の発掘で検出した遺構は、中世集落の一部と推定される。集落は12世紀末から14世紀前半頃にかけて連続して存在し、一部縮小しながら15世紀初頭頃まで存続した。集落内部は溝や構などで明確に区画されている状況は確認できない。また、井戸を含む遺構が狭い範囲に分布し、密度の高い集落地であったと考えられる。そのほか、丸瓦・平瓦が出土することから、近辺に御堂などが存在していたと考えられる。また、鍛冶遺構のような生産関係遺構やそれらに関する遺物は出土していない。土鍾や貝(ヤマトシジミ)の存在からは、川や海に極めて近い立地を生かした漁労が行われていたことが推察できる。また、遠隔地から搬入した瀬戸焼、常滑焼、備前焼、亀山焼、東播系須恵器鉢、滑石製石鍋、石硯、各種の中国産陶磁器、銭貨などが多数出土したことは特徴的である。中国産陶磁器のなかには富裕層が保有したとされる白磁四耳壺が含まれる。

13～14世紀の遺構・遺物は、近辺でも確認されている。当調査地より東南では、OS87-81次調査で、14世紀頃の構・溝・井戸などが確認されている[大文協1987]。OS96-30次調査で13～14世紀の遺物が出土している[大文協1999b]。当調査地より南では、OS07-8次調査で13世紀の井戸が確認され、瓦器碗、常滑焼甕が出土している[市教委・大文協2009]。OS90-31次調査では13世紀後半の瓦質土器羽釜・土師器羽釜を井戸側とする井戸を検出し、常滑焼甕・青磁碗などが出土している[大文協2003]。OS87-100-93-47次調査では、曲物や土師器羽釜を井戸側とする複数の井戸や柱穴・溝・土壌が確認されている[大文協2003]。また、当調査地より南西では、OJ91-2次調査では、井戸が確認され、白磁碗、青磁碗、常滑焼甕、東播系須恵器鉢などが出土している[大文協2004b]。OJ91-11・92-18次調査では、13～14世紀の瓦器碗や中国産陶磁器をはじめとする土器などが出土している[大文協2004b]。

このような様相から見れば、以上述べたような調査地を中心とした河川付近の低地に、13～14世紀の集落が展開していると考えられる。集落からは常滑焼・備前焼などの国産陶器や中国産青磁・白磁などを始めとする広域流通製品が多く出土し、瀬戸内海東端の淀川河口部近くに立地することなどから、水運による流通を担った集落であり、渡辺津であると推定されている[大文協2004b]。

今回検出した遺構は、この集落の一角であり、集落のなかでは大川に最も近い位置にある。

4) 豊臣期の造成について

今回の調査では土手状遺構SX301の築造、3 m以上の盛土に象徴されるように、豊臣期の大造成事業の具体的な姿が露になった。SX301は周辺の土砂を掘削し集めて、高さ2 mまで盛り上げた状況が、長さ40 mに渡って検出された。その後、盛土はSX301を軸に行われており、土手はその地業のための作業道であり、大規模造成の骨格であったと考えられる。豊臣期の城下町建設には幾度か画期があるが、今回の造成は東横堀川沿いの低地帯を一挙に町場化した、慶長3(1598)年から翌年に行われたと考えられる「大坂町中屋敷替」に伴う可能性が高い。

土手状遺構と同様な例は、調査地の周辺ではこれまで4箇所を確認されている(図73)。最も近い地

点は南40mのOS89-148次調査(調査面積220㎡)で、ここでは約15mにわたって、上端幅約3.0m、下端幅5.0m、高さ1.5mの東西方向の「堤状遺構」SX601が検出された[大文協2003]。今回のSX301に比べ、かなり小型である。造成面は砲弾の鋳型や輪羽口など鑄造関係の遺物を含む地層で、豊臣前期である。この遺構を覆う盛土は今回の調査区西部と同様、黒褐色シルトを主体とし、東横堀の掘削時の排土を用いた可能性が高いことが指摘されている。SX601上面の高さはTP+2.8mで、SX301のTP+3.0m前後とほぼ同じである。

南方130mのOS11-2次調査(調査面積39㎡)では、高さ0.6mの「土塁状の高まり」SX501が調査区北端で検出された[大文研2011b]。遺構の一部だけで、全体の規模はわからないが、北西-南東方向を

向く。SX501は時期不明の自然堆積の砂層の上に築かれている。SX501を埋没させる盛土層(第11層)は、堆積年代を示す資料を欠く。SX501の上面はTP+3.1mで、今回の調査とほぼ同じ高さである。

OS97-45次調査(調査面積60㎡)の南北方向の「土塁状遺構」SX01は上端幅0.8m以上、下端幅1.5m以上、高さ0.8m以上である[大文協1999d]。調査担当者は豊臣前期の惣構以前の防御施設の可能性を考えつつ、盛土から出土した最も新しい遺物である瓦質土器羽釜より、大坂本願寺期の可能性も指摘している。SX01は1.5m以上の盛土で埋没されている。現状のSX01上面の高さはTP+1.5mである。

OJ96-13次調査(調査面積150㎡)の「堤状盛土」SX501は、唯一、今回の調査地の西側で検出されている例である[大文協1999c]。SX501は、上端幅5.0m、下端幅12m以上、高さ約1.3mの規模で、西北西に流れる大川とほぼ平行する。盛土内から出土した備前焼播鉢から16世紀代の遺構の可能性が指摘された。SX501北東側には溝と畦畔が検出され、耕作地となっている。SX501は約1mの砂礫層で覆われ、最も新しい遺物は豊臣前期の青花である。調査地は大川に近く、その堤の可能性が指摘されている。

以上、4例を通観したが、盛土された遺構はその形態、規模、層序から、いずれもSX301と同様の性格をもち、有機的な関連にあるものと考えられる。4例の調査はいずれも調査面積、出土遺物が限定され、その正体は謎であった。今回の発見で、大規模な造成計画の骨格・枠組みとして総合的に把握することが可能になったと言えるだろう。

豊臣期の全体の造成に比べ、検出例が少なく、土手状遺構が全体にどのように張り巡らされたのか、



図73 土手状遺構の分布

(等高線・盛土の範囲は趙2004「図290 大坂城下町跡の古地理図(2)」から引用)

詳細は不明である。ただ、これまで想定されている豊臣前期末段階の造成範囲にあること、大川に近い今回の調査例とQJ96-13次調査例は、大川に平行していること、また、当時の地形に重ね合わせると、そのほかの例は等高線と直交し、傾斜に合わせる傾向が指摘でき、旧地形を意識して配置されていることが指摘できる。

次に土手状遺構で作られた大枠の中を埋めるのが、盛土区画であった。柱・杭・板・粘土枠で幅3～4 m、長さ3～6 mの長方形の区画を作り、そのなかに川砂を入れ、順次、土地全体を嵩上げしている盛土区画の工法については、同様な例が確認できず、珍しい土木技術の一例と言える。砂はただ積み上げただけでは脆いが、密閉されると堅固になる。手の込んだ地業は、近くにある豊富な川砂を利用し、安定した地盤を形成するために考案された工夫なのか、あるいは当時良く知られた技術であったのか、武家屋敷建設を考えた特別な工法であったのか、今回の報告が地域の豊臣期の造成の復元とともに、土木技術史の研究の進展に繋がることを期待したい。

第四章 まとめ

今回の調査の意義は、都市大阪のなかでも、早くから都市的様相を示す地域において、比較的規模の大きな調査が行われたことによって、古代・中世・豊臣期の具体的な活動の姿がより鮮明になったことである。調査成果の要点は次のとおりである。

1) 古代

古代、大川は調査地により近く、北東からの攻撃面に当り、南に入り江を形成していたと想定され、難波津の有力候補地の一つとなっている。古代の地層は北東方向にやや傾斜し、調査地は水辺にほど近い位置にあるものと考えられる。今回まとまって見つかった最古の遺物群は7世紀第2四半期から中頃にかけての土器・瓦・木製品であり、明確な遺構に伴ったものではないが、現地性の高い資料である。

次に前期難波宮段階にSD601bが掘られる。真東西を向き、何らかの計画性を窺わせる。まとまった量の遺物が出土し、前代から活動は継続している。その後、調査地では8世紀末までほとんど遺物は確認されておらず、百年間以上の断絶が認められる。

さきの溝とはほぼ同じ位置にSD601aが掘られ、ここからは長岡京期の遺物が大量に出土した。食器類のほか、移動式竈が目立ち、近くで饗宴、労働、祭祀のような行為が行われた可能性が考えられる。

2) 中世

調査区北部中央を中心に建物跡、井戸、土壌などを検出した。集落は12世紀末～14世紀前半にかけて連続して営まれ、一部縮小しながらも15世紀初めまで存続した。遺物には中国産陶磁器のほか遠隔地からの搬入品が多く含まれる。調査地の南方には、渡辺津の候補ともなっている同時期の集落があり、今回の調査で確認した遺物群はこれに連なり、大川に最も近接した場所に営まれた集落の一部と考えられる。

3) 豊臣期

これまで部分的にしか確認できていなかった、豊臣期の大造成事業の具体的な姿が明らかになった。厚さ3mに及ぶ土地の嵩上げを行うにあたり、基本的な枠組みとして、土手状遺構を造成し、それを軸として盛土のなかにも枠を設けて、順次、嵩上げていた状況が観察できた。こうした工法はこれまでほとんど確認されておらず、この地域の復元に新しい視点を与えるだけでなく、土木技術史的研究においても重要な発見となった。

引用・参考文献

- 池田研2002、「TJ00-2次調査出土具類について」：大阪市文化財協会編『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告-1999・2000年度-』、pp.181-190
- 2005、「中・近世における大坂城下町出土の具類について」：大阪大学考古学研究室編『待兼山考古学論集-都出比呂志先生退任記念-』、pp.859-886
- 内田九州男1989a、「城下町大坂の誕生」：『まちに住まう 大阪都市住宅史』平凡社、pp.99-116
- 1989b、「豊臣秀吉の大坂建設」：佐久間貴士編『よみがえる中世』2 平凡社、pp.34-55
- 大阪市文化財協会1982、「長原遺跡発掘調査報告」Ⅱ、pp.277-284
- 1987、「学校法人文蔵学園大阪外語専門学校建設に伴う大坂城跡発掘調査(OS87-81)略報」
- 1992、「難波宮址の研究」第九
- 1995、「難波宮址の研究」第十
- 1998、「住友銅吹所跡発掘調査報告」
- 1999a、「大坂城跡」Ⅳ
- 1999b、「OS96-30次調査」：『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告-1996年度-』、pp.152-155
- 1999c、「OJ96-13次調査」：『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告-1996年度-』、pp.86-91
- 1999d、「OS97-45次調査」：『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告-1997年度-』、pp.73-78
- 2002a、「大坂城跡」Ⅴ
- 2002b、「大坂城跡」Ⅵ
- 2002c、「TJ00-2次調査」：『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告-1999・2000年度-』、pp.181-190
- 2003、「大坂城跡」Ⅶ
- 2004a、「難波宮跡址の研究」第十二
- 2004b、「大坂城下町跡」Ⅱ
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会
- 2006、「安曇寺跡推定地発掘調査(AZ05-1)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告(2005)』、pp.3-22
- 2009、「大坂城跡発掘調査(OS07-8)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2007)』、pp.103-113
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2012、「中央区南新町二丁目における建設工事に伴う大坂城発掘調査(OS10-10)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2010)』、pp.249-258
- 大阪府文化財センター2002、「大坂城跡発掘調査報告」Ⅰ、pp.204-205
- 大阪文化財研究所2011a、「北区菅原町における建設工事に伴う天神橋遺跡(TJ11-1)報告書」
- 2011b、「中央区東高麗橋における建設工事に伴う大坂城発掘調査(OS11-2)報告書」
- 尾上実・森島康雄・近江俊秀1995、「瓦器概説」：中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社、pp.315-337
- 木戸雅寿1995、「石鍋」：中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』、pp.315-337
- 吉良哲明1954、『原色日本貝類図鑑』保育社
- 京都市埋蔵文化財研究所2003、「平安京左京四条二坊十四町跡」、pp.57-68

日下雅義1991、『古代景観の復原』 中央公論社

小山正忠・竹原秀雄1970、『新版 標準土色帖』 日本色研事業株式会社

佐藤隆2000、『古代難波地域の土器様相とその史的背景』：大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第十一、pp.253-265

鈴木秀典1987、『発掘された豊臣期大名屋敷』：大阪市文化財協会編『華火』11号、pp.1-5

1989、『武士の屋敷』：佐久間貴士編『よみがえる中世』2 平凡社、pp.105-109

鈴木康之1998、『草戸千軒町遺跡出土の滑石製石鍋』 広島県立歴史博物館、pp.10-16

積山洋1993、『律令制期の製塩土器と塩の流通』：『ヒストリア』第141号 大阪歴史学会、pp.69-93

趙哲済2004、『大坂城下町跡の自然地理的背景について』：大阪市文化財協会編『大坂城下町跡』Ⅱ、pp.347-350

中野晴久2005、『常滑・渥美系』：『全国シンボジュウム 中世窯業の諸相 発表要旨集』全国シンボジュウム実行委員会、pp.49-76

奥岡実2005、『備前』：『全国シンボジュウム 中世窯業の諸相 資料集』全国シンボジュウム実行委員会、pp.121-142

畑中英二1995、『信楽における技術の伝播』：『全国シンボジュウム 中世窯業の諸相 資料集』全国シンボジュウム実行委員会、pp.143-163

花谷浩2000、『京内甘四寺について』：奈良国立文化財研究所編『研究論集』XI、pp.77-202

平田洋司2000、『豊臣氏大坂城の三ノ丸造成を巡って』：大阪市文化財協会編『大阪市文化財協会紀要』第3号、pp.15-30

広島県草戸千軒町遺跡調査研究所1995、『草戸千軒町遺跡発掘調査報告』Ⅳ、pp.122-131

文化庁文化財部記念物課2010、『発掘調査のてびき-集落遺跡発掘編-』

松尾信裕1994、『大坂の武家屋敷』：宮崎勝美・吉田伸之編『武家屋敷-空間と社会-』 山川出版社、pp.63-91

2003、『OS86-22次調査およびその周辺の調査』：大阪市文化財協会編『大坂城跡』Ⅶ、pp.66-97

2004、『大坂城下町跡下層の遺跡』：大阪市文化財協会編『大坂城下町跡』Ⅱ、pp.351-356

豆谷浩之2010、『近世大坂における穴蔵』：『大阪歴史博物館 研究紀要』第8号、pp.49-62

向日市埋蔵文化財調査センター1990、『向日市埋蔵文化財調査報告書』第29集、pp.68-173

森岡秀人・藤川祐作2008、『矢穴の型式学』：『古代学研究』第180号、pp.405-418

森島康雄2001、『南山城の中世土器』：『京都府埋蔵文化財論集』第四集 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター、pp.479-488

2005、『瓦器 編年と技術伝播』：『全国シンボジュウム 中世窯業の諸相 発表要旨集』全国シンボジュウム実行委員会、pp.143-164

森田勉1982、『14-16世紀の白磁の分類と編年』：『貿易陶磁研究』№2、pp.47-54

森田勉1995、『中世須恵器』：中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社、pp.356-366

森殿1992、『16世紀後半から17世紀初頭の陶磁器』：大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第九、pp.40-52

2004、『城下町大坂における唐津焼の様相』：『古唐津』 出光美術館、pp.187-195

山本信夫2000、『大宰府条坊跡ⅩⅤ 陶磁器分類編』 大宰府市教育委員会

八幡市教育委員会1985、『平野山瓦窯跡発掘調査概報』、pp.15-28

索引

索引は遺構・遺物に関する用語と地名・遺跡名などの固有名称とに分割して収録した。

〈遺構・遺物に関する用語〉

- | | | | |
|------------|--|----------|--|
| あ 穴蔵 | 83, 88, 90, 95 | と 東播系須恵器 | 41, 43, 44, 49, 51, 52, 56, 57, 59, 62, 110 |
| い 石鍋 | 5, 46, 62, 103, 105, 110 | 常滑焼 | 41, 42, 44, 46, 49, 50, 51, 52, 54, 55, 57, 58, 59, 62, 76, 110 |
| う 埋壺 | 63, 95 | 土鍾 | 28, 42, 50, 57, 62, 79, 96, 102, 103, 110 |
| お 鬼瓦 | 79, 102 | 巴文軒丸瓦 | 88, 101 |
| か 貝 | 52, 63, 90, 93, 96, 107, 108, 110 | な 長岡京期 | 35, 37, 109, 113 |
| 花崗岩 | 74, 105 | 難波Ⅲ古段階 | 21, 22, 37 |
| 竈 | 20, 21, 22, 23, 28, 29, 31, 37, 50, 57, 59, 72, 93, 109, 113 | 難波Ⅲ中段階 | 21, 22, 28, 37 |
| 唐草文軒平瓦 | 88, 99, 101 | 難波Ⅲ新段階 | 28, 37 |
| 韓式系土器 | 22 | 難波Ⅴ新段階 | 35, 37, 109 |
| こ 後期難波宮 | 37, 96, 98, 99, 109 | ね 粘土枠 | 8, 12, 65, 67, 68, 69, 71, 72, 73, 74, 95, 112 |
| 黒色土器 | 74 | は 白磁 | 5, 43, 49, 51, 55, 57, 58, 62, 63, 76, 78, 79, 81, 83, 84, 88, 93, 110 |
| し 信楽焼 | 90, 93, 94 | ひ 肥前陶器 | 12, 78, 79, 81, 83, 84, 88, 90, 93, 94 |
| 志野 | 12, 84, 93, 94 | 備前焼 | 19, 44, 46, 49, 50, 52, 55, 56, 57, 62, 78, 79, 83, 84, 88, 90, 93, 94, 110, 111 |
| 重圈文(軒丸・平)瓦 | 96, 98 | 火鉢 | 49, 62, 63, 76, 79, 81 |
| す 硯 | 57, 103, 105, 110 | も 盛土区画 | 7, 12, 65, 67, 71, 72, 73, 74, 112 |
| せ 製塩土器 | 28, 31, 33, 41, 43, 50, 55, 57, 59, 62, 74 | や 矢穴 | 19, 104, 105 |
| 青花 | 59, 64, 79, 81, 83, 84, 88, 90, 93, 111 | ヤマトシジミ | 52, 107, 108, 110 |
| 青磁 | 41, 42, 46, 50, 51, 52, 55, 58, 59, 62, 63, 76, 78, 79, 110 | り 緑釉陶器 | 50, 51, 57, 59, 74 |
| 瀬戸美濃焼 | 76, 78, 79, 81, 83, 84, 88, 90, 93, 94 | れ 蓮華文軒丸瓦 | 96, 99 |
| 銭貨 | 49, 62, 79, 87, 88, 90, 92, 93, 96, 105, 106, 107, 110 | | |
| 前期難波宮 | 28, 37, 113 | | |
| た 丹波焼 | 79, 83, 84, 93 | | |

〈地名・遺跡名など〉

- | | | | |
|--------|--|---------|-------------|
| う 上町台地 | 1, 2, 4 | ひ 平野山瓦窯 | 109 |
| お 大川 | 1, 4, 5, 12, 37, 65, 107, 108, 109, 110, 111, 112, 113 | な 難波津 | 1, 113 |
| し 四天王寺 | 96, 109 | わ 渡辺津 | 1, 110, 113 |

**The Excavation Report
of the
Osaka Castle Site in Osaka, Japan**

Volume XIV

The Report of an Excavation
Prior to development at Kitahama-higashi
in Chuo Ward

November 2012

Osaka City Museum Organization
Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features, and others, in this text

SA: Palisade or fence

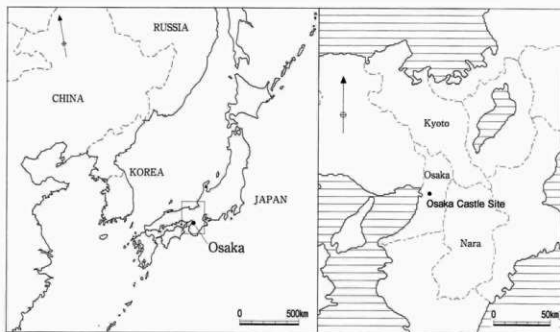
SD: Ditch

SE: Well

SK: Pit

SP: Pit or posthole

SX: Other features



CONTENTS

Foreword

Explanatory notes

Chapter I Planning and progress of the excavation	1
1 Geographical and historical setting of the site	1
2 Planning and progress of the excavation	6
1) Background of the excavation	6
2) Progress of the excavation	7
3) Report making	9
Chapter II Investigation results	11
1 Stratigraphy	11
2 Features and finds from the Ancient Period (the 7th to the end of 8th century AD).....	20
1) Features and finds on Beds 12-10b	20
2) SD601 and its finds	23
3) Conclusions.....	37
3 Features and finds from the Medieval Period (the 12th to 15th century AD)	38
1) Features and finds in Bed 9	38
2) Features and finds on Bed 9	43
3) Finds from Bed 9	50
4) Features and finds on Bed 8	51
5) Finds from Bed 8	57
6) Other features and finds	59
7) Conclusions	63
4 Features and finds from the Toyotomi Period (1580-1615 AD)	65
1) Features and finds from the first stage	65
2) Finds from Bed 6 (fills for raising the land level)	74
3) Features and finds from the second stage	83
4) Conclusions	94
5 Roof-tiles, net sinkers, stone objects, coins and shells	96
1) Roof-tiles	96
2) Net sinkers	102
3) Stone objects	103
4) Coins	105
5) Shells	107
Chapter III Examination of investigation results	109
1) 7th century Roof-tiles from Bed 12	109
2) Artifacts from the end of 8th century from SD601b	109
3) Medieval features	110

4) Development at the site in the Toyotomi Period	110
Chapter IV Conclusion	113
1) Ancient Period	113
2) Medieval Period	113
3) Toyotomi Period	113
References	114
Index	
English contents and summary	

ENGLISH SUMMARY

OS11-16 excavation at Osaka Castle site

The Osaka Castle site is located in Chuo Ward, central Osaka City (Fig.1-3). This report covers an OS11-16 excavation totalling 1,170 square metres undertaken prior to construction of an apartment complex in Kitahama-higashi, from late November 2011 to the end of March 2012. More than 100 excavations have been carried out within a 500m radius of the site (Fig. 4), and have identified almost continuous activity on the site from the Ancient to Early Modern Periods.

The site is situated on the southern bank of Okawa River, one of the most historically important places in the City: a centre of the commerce and transport from the Ancient Period onwards. Some scholars believe that 'Naniwa-tsu', a port mentioned in ancient documents, and 'Watanabe-tsu', mentioned in medieval documents, must have been located in this area.

What discovered?

Owing to the fairly large excavation area, compared to excavations in the past, the features discovered can be used to illustrate the urbanisation of the area during each stage of Ancient, Medieval and Early Modern Periods.

1) Ancient Period (7th to the end of 8th century)

The oldest finds from the site, dating back to the second quarter of the 7th century, were pots, roof-tiles and a mallet (Fig. 18-19, Pl. 19). No associated features were discovered, but following the late 7th century, more evidence of human activities was discovered in a SD601b ditch feature (Fig. 20-24, Colour Pl. 3, Pl. 1 & 20). The ditch had been dug along an east-west axis and may have been part of a larger, planned layout of the area.

No evidence dating to the late 8th century was recovered from the site, but there is evidence of another ditch (SD601a) having been dug in the same location as the former SD601b ditch at the end of 8th century. Amongst the finds, a number of dishes and portable cooking stoves were discovered (Fig. 25-29, Pl. 21-23), and suggests that some temporary event, like a feast or ceremony, was held nearby. One interpretation is that material from the abandoned Naniwa Palace was carried to the new Nagaoka Palace site from here.

2) Medieval (late 12th to early 15th century)

Around the middle of the northern sector of the site, a number of postholes, wells and pits dating to the Medieval Period were found (Fig. 30-47, Pl. 2-5). A number of features, dating to the end of 12th and early 14th centuries and a small

number from the early 15th century, indicates the duration and development of the settlement. A number of ceramic pieces transported from remote areas including China (Pl. 25) amongst finds suggest the settlement was the part of a harbour town (possibly 'Watanabe-tsu') closest to Okawa River.

3) Toyotomi Period (1580-1615 AD)

Evidence for a massive development of the area to make a castle town following the fortification of 'San'nomaru' Fort in the late 16th century by TOYOTOMI Hideyoshi were recovered.

A SX301 earthwork bank measuring 2.3m in height, 2.5m in width at the top and 14m in width at the bottom stretches over 40m along the site in a north-west to south-east direction (Colour Pl. 4). It was layout as part of the framework of the ground design and was used as a high working road while the surrounding land was being raised 3m with river sand and silt to make a vast dry land. Between earthworks, sands carried from the Okawa River were heaped step by step within rectangle compartments, which were comprised of wattled silty walls and ceils (Fig. 49-53, Photo 9, Colour Pl. 5 and Pl. 8-11).

Four examples similar to SX301 have been found near the site during former excavations (Fig. 73), but their character had not been identified, and were sometimes associated with the river bank or fortification. The discovery of SX301 could solve this long-term mystery. This technology to raise the land level by using banks and rectangular compartments has not been observed in other areas, and could supply new information for the study of civil engineering as well as the reconstruction of the development of this area.

報告書抄録

[illegible]



原 色 図 版



調査区全景(東から)



調査区東壁(南西から)

調査区南壁
(北東から)



調査区西壁
(南東から)



古代SD601a・bと
豊臣期造成土地層断面
(中央畦、南西から)





SD601a・b検出状況(南西から)



SE510検出状況(東から)



土手状遺構SX301検出状況(南東から)



土手状遺構SX301断面(北西から)

調査区東部
盛土区画上面検出状況
(南から)



SX353ほか検出状況
(東から)



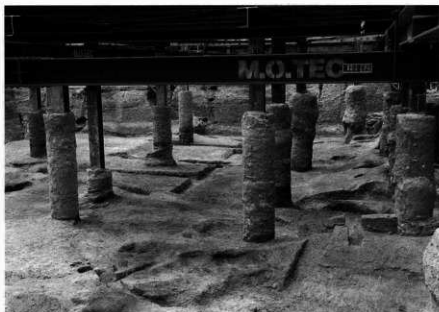
SX321検出状況
(南東から)





圖 版

SD601b検出状況
(東から)



SD601b遺物出土状況
(東から)



調査区北東部第12層
(南東から)





第9層中
遺構検出状況
(南東から)



第9層上面
遺構検出状況
(西から)



第8層上面
遺構検出状況
(南西から)

SE415埋土の状況
(南から)



SK566検出状況
(西から)



SK563埋土の状況
(南東から)





SK543貝出土状況
(西から)



SE523・SK550
検出状況
(南西から)



SE523埋土の状況
(西から)

SK550埋土の状況
(北西から)



SX580検出状況
(南から)



SX580埋土の状況
(南西から)





第6h層の偽礎
検出状況
(東から)



第6h層石材検出状況
(西から)

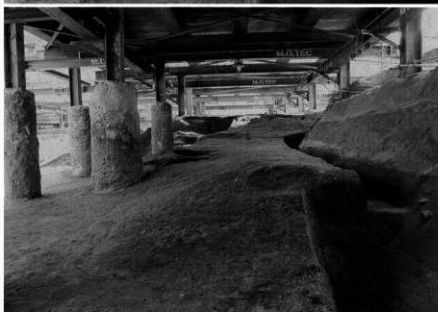


第6h層堆積後に
発生した地滑り
(調査区中央北部、北から)

SX301検出状況
(北から)



SX301北側の状況
(北から)



SX302検出状況
(北西から)





調査区東部盛土区画検出状況(北から)



調査区南東部盛土区画検出状況(北西から)

SX336・339ほか
検出状況
(北東から)



SX337・338竈検出状況
(北西から)



SX337竈断面
(北東から)





SX334検出状況
(北東から)



SX353~357検出状況
(北西から)



SX351検出状況
(南西から)

SX347・348検出状況
(北から)



SX347・348検出状況
(南西から)



SX342～344検出状況
(南東から)





SX339墨書のある礎石
(南西から)



SA202礎石検出状況
(北から)



SA202礎石検出状況
(東から)

調査区南部第6a'層上面
遺構検出状況
(東から)



調査区中央部第6a'層上面遺構検出状況(南東から)



調査区東部第6a'層上面
遺構検出状況
(南から)

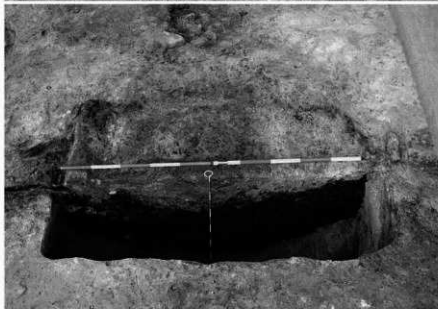


調査区東部第6a'層上面遺構検出状況(東から)

SK221・226
埋土の状況
(南から)



SK223埋土の状況
(南から)



SK218埋土の状況
(南から)





SK263埋土の状況
(東から)



SK261埋土の状況
(北西から)



SK246埋土の状況
(南から)

SK219完掘状況
(北から)



SK219煙土の状況
(南から)



SK219西壁
(東から)

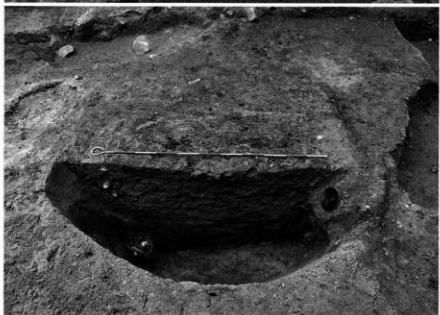




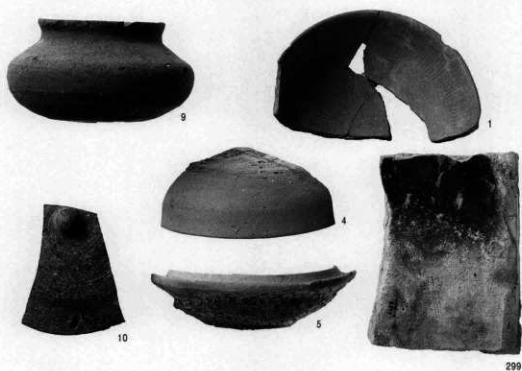
南区全景
(東から)



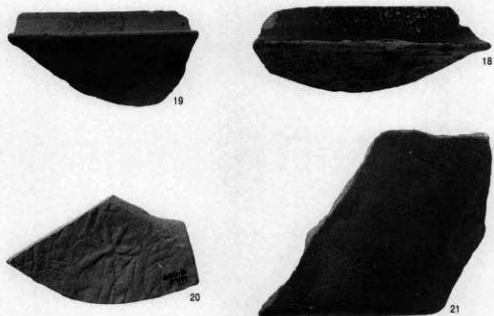
SK265・267
埋土の状況
(南西から)



SK264埋土の状況
(南から)



第12層



第11層



25

28



30



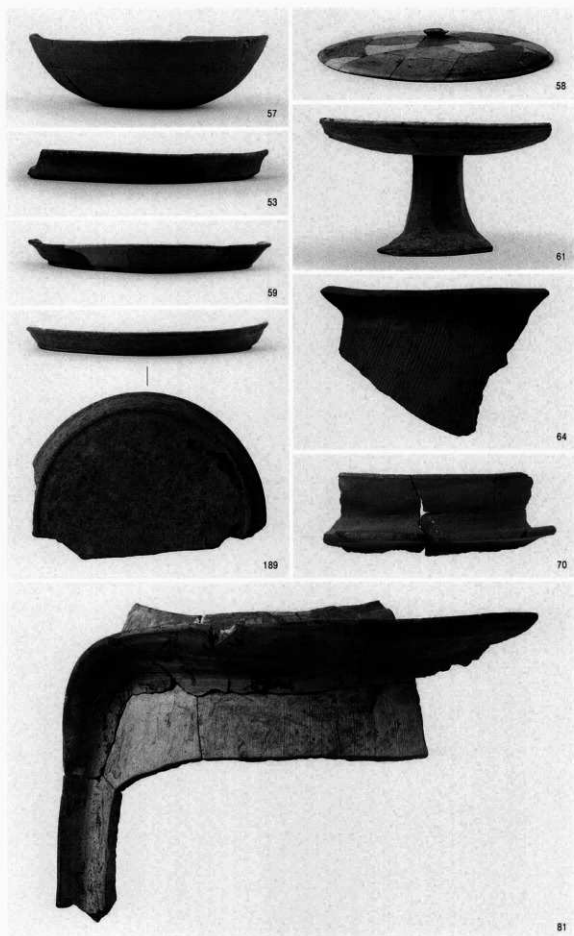
34



37



43



SD601a (53・57~59・61・64・70・81)、第6h層(189)



85



86



90



89



96



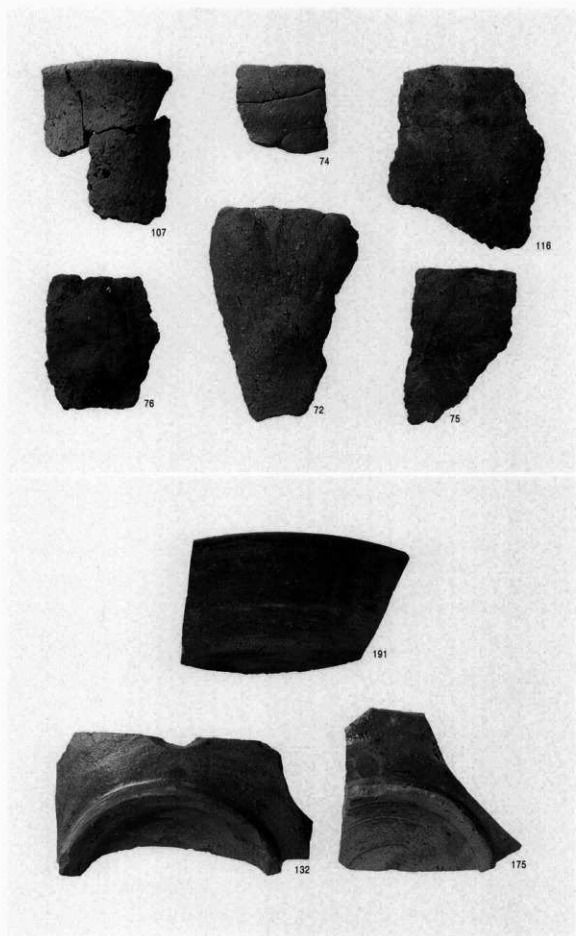
99



98



97



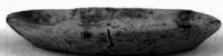
SD601a (72・74~76)、SD416(107)、SK445(116)、
第9層(132)、第8層(175)、第6h層(191)



119



120



142



143



144



147



124



126



125



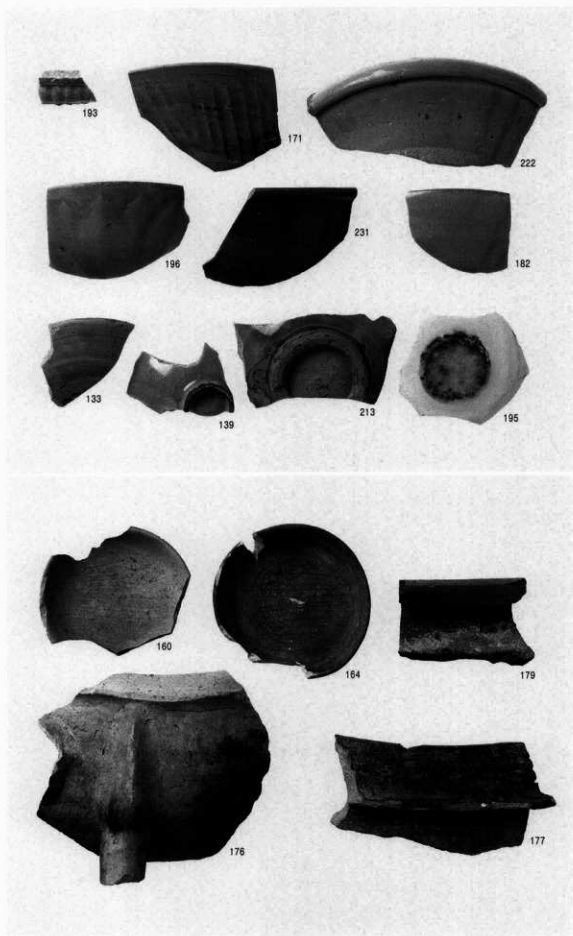
127



113



129



第9層(133)、SK541(139)、第8層(160・164・171・176・177・179)、SX580(182)、
第6h層(193・195・196)、SX301(213)、第6c層(222)、第6b層(231)



162



165



167



197



224



286



237



368



269

第8層(162・165・167)、第6h層(197)、第6b層(224・237)、第6a'層(269)、SK261(286)、SE118(368)



287



291



289



292



288



290



293



295



294

SD601b (287)、SD601a (291・293)、第9層(294)、SK550(290)、SK584(288)、
SX580(289)、SX301(292)、第0層(295)



297



296



305



301



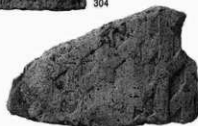
302



304



303



300



298



312



311



313

SD601a (300~305)、第8層(297)、SX301(296・298・311)、第6b層(312・313)



第6h層(308)、第6b層(307・309)、第6a層(315)、SK263(314)、SE108(310)



317



318

316



320



323



324



322



319



321



325



326

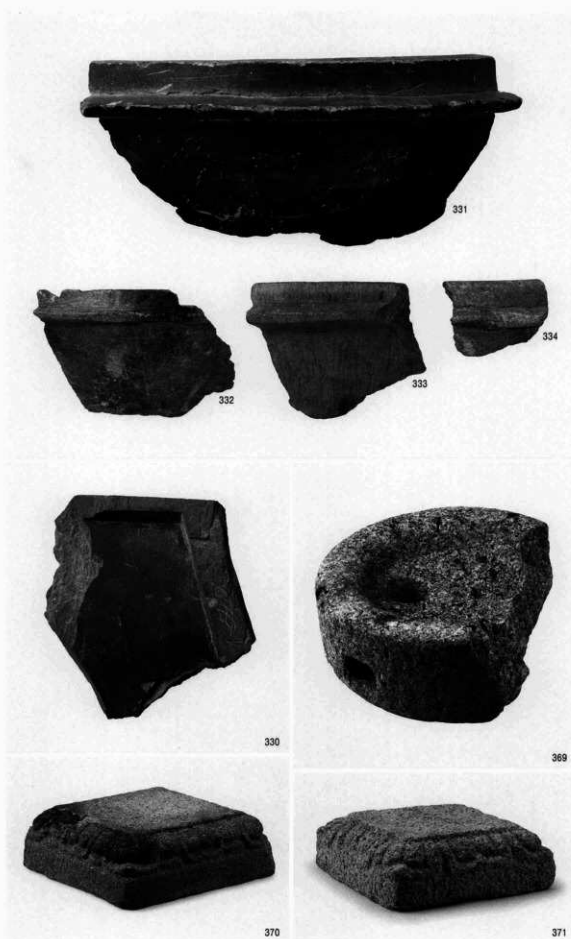


327



328

SD601a (319・321)、SK417(324)、第9層(322)、第8層(320・325)、第6h層(323・327)、SX301(326)、第6c層(316)、第6b層(317)、第6a層(318・328)



SE510(331)、第8層(330)、SX580(332)、第6h層(369)、SX301(333)、
第6c層(334・371)、SX323(370)

大坂城跡XIV

ISBN 978-4-86305-087-7

2012年11月30日 発行©

編集・発行 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所

〒540-0006 大阪市中央区法門坂1-1-35

(TEL.06-6943-6833 FAX.06-6920-2272)

<http://www.occpa.or.jp/>

印刷・製本 株式会社 ヨシダ印刷株式会社 大阪営業所

〒532-0003 大阪市淀川区西中島5-8-3

**The Excavation Report
of the
Osaka Castle Site in Osaka, Japan**

Volume XIV

November 2012

Osaka City Museum Organization
Osaka City Cultural Properties Association

**The Excavation Report
of the
Osaka Castle Site in Osaka, Japan**

Volume XIV

November 2012

Osaka City Museum Organization
Osaka City Cultural Properties Association